投

324
666

36 10.23

324-666

天台四教儀新釋

大正
11. 2. 17
内交

自序

四教儀は天台教學を組織的に叙述した殆んど唯一の著作である。そしてあの三大部五小部の如き廣澣な天台大師の述作の精髄を能く色讀體會して、而もそれを平明な語で詮表して居るのは驚くべきばかりで、いかに著者の造詣の深かつたかを偲ばしむるものがある。古來斯書を天台學入門として居るが。若しそれによつて斯書をたゞ啓蒙的な著作と速斷したならば大なる誤謬である。仰げばいよ高く鑽ればいよ〳〵堅くして端倪すべからざるものが斯書の奥に流れて居る。例して言ふならば、蓮如上人の『御文』が親鸞聖人の『教行信證』の精髄を詮して居るやうに、斯書は天台三大部の中核を能く把持して居るのである。されば斯書によつて天台學に入るを得ると同時に、天台學の研究によつて斯書の眞價値は方めて顯るゝのである。

斯書の註解書古來甚だ多く近代世に公にせられたるもの亦尠くない。それにも拘はらず。今私に一註書を加へんとするのは、斯書の一隅を明にしたいと念ずるために外ならぬ。

大正辛酉の歳仲冬下旬第一日

洛北假寓にて　稲葉圓成

天台四教儀新釋目次

序講

一、天台宗史概說……一頁
二、天台宗教義の概說……九
三、斯書一部の大綱……一五
四、斯書述作の緣由及末疏……一六
五、題號と撰號……一七

本講

第一。五時八教總論……一九
第二。化儀四教と五時教（五時八教別論上）……二八
(一) 頓　教（華嚴時）……二八
(二) 鹿苑時（漸教その一）……四六
(三) 方等時（漸教その二）……五五

(四) 船若時（漸教その三）……六三
(五) 秘密教と不定教……七〇
(六) 法華涅槃時……七九
(1) 法華經……七九
(2) 涅槃經……一一〇
(七) 問答料簡（化儀篇餘論）……一一六
(1) 方等と涅槃……一一六
(2) 五味の喩顕……一二〇
第三。化法四教（五時八教別説下）……一二五
(一) 藏教……一三三
(1) 藏教の名義……一三三
(2) 四諦教（藏教の教義）……一三九
(a) 苦諦……一四四
(b) 集諦……一五九
(c) 滅諦……一六八

(d) 道諦……一六九
(e) 四諦餘説……一七四
(3) 藏教の行位……一七九
(a) 聲聞の行位……一八〇
(b) 緣覺と獨覺……一八七
(c) 菩薩の行位……一九五
(二) 通教……二〇八
(1) 通教の名義……二一〇
(2) 通教の行位……二一二
(3) 三乘の同異……二一九
(4) 藏通の同異……二二五
(三) 別教……二二八
(1) 別教の名義……二二九
(2) 別教の行位……二三六
(四) 圓教……二五四

(1) 圓教の名義……二五七
(2) 圓教の行位……二五八
(3) 六卽判位……三〇〇
第四。觀心の大綱……三一〇
(一) 二十五方便……三一二
(二) 十乘觀法……三二〇
第五。總　結……三三九

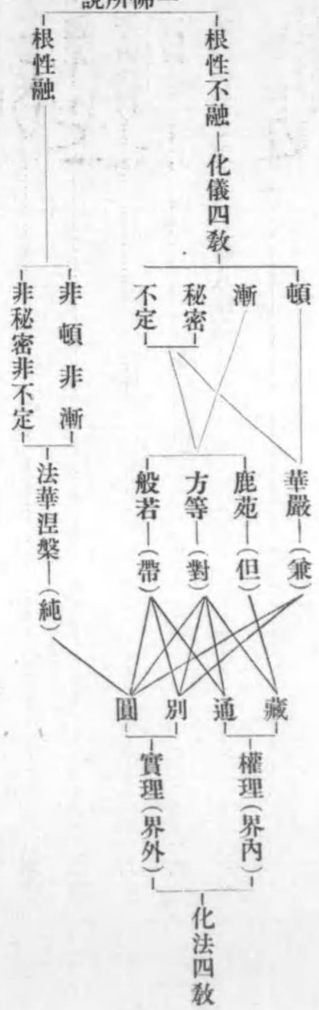
餘　說

五時教の頗……二二
教判の根本的意義……二五
華嚴教主と法華教主……三五
二喩相成……三九
秘密教と不定教……七〇

法華超八の論……七五
一乘の開顯……一〇二
四教の解說……一二五
四教の證據……一三〇
三乘人の解說……一四〇
被接の義意……二二四
一念三千の法門……二六六
菩薩行因論……二九二
天台以前の教判と天台の五時八教判……三四一

五時八教の圖
四教斷惑位次分對之圖

五時八教之圖



天台四教儀新釋

講

稻葉圓成著

序

（一）天台宗史の概說

斯書は天台宗の教義の大綱を述べたものである。よつて今初に天台宗の歷史の概要を述べやう。

天台宗の開闡は智者大師智顗に始まる。智顗は天台山（今の浙江省天台縣）に寺を建てゝ永く居住されたから又天台大師と呼ぶ。天台宗の宗名もそこから出來たものである。この智顗は梁大同四年に荆州華容縣（今の湖北省江陵府）の誕生である。丁度その當時は梁朝の末期で騷亂の絶えまのない亂世で、殊に江陵の地は梁（南朝）魏（北朝）の爭奪の地點であつたからして兵亂の巷となつた。そして智顗の父は當時江陵の鎮であつた湘東王（梁武帝の第七子）に使へて居たので、この兵亂の爲に家を擧げて放浪の止むなきに至り、その間に雙親は相繼いで歿し、智顗は寄るべもない不幸の孤兒となつた。か

智者大師

大蘇開悟

ういふ浮世の荒い波に虐げられた少年はやがて佛門に歸し出家した。そして只管ら平安な心地を求めたのである。光州大蘇山（河南省にあり）に慧思禪師の德を慕ひて其の門を叩いたのは智顗の二十三歳の時であつた。而して慧思は智顗を見て其の法器なることを察し、その所懷を傾けて示敎され、顗も亦大に修練を勵んだからして、遂に一夜豁然として大悟した。これを大蘇開悟といつて、天台宗の敎理はすべてこの開悟の源泉から流れ出でた法流である。智顗大蘇山にあること前後七年、三十歳にして慧思附法の同學數名と共に山を辭して陳都建業（今の江寧府即南京）に出で盛に法莚を結んで定慧雙行の道を力說し、道俗の歸仰を得ること太だ多く且つ厚いものがあつた。慧思は智顗の都に去つた後亦大蘇山を捨てて南嶽に行かれた。南嶽大師の稱はこれより起る。それはさて智顗都に在ること八年亦多くの歸依者を捨てゝ、遠く天台山中に入られた。蓋し多くの歸依者に取り卷かれて說法の聲を大にする所に內心の空虛を感じて更に修養工夫を進めねばならぬことを痛感せられたからである。天台山中にあること八年修禪寺を建立す。陳帝の懇切なる招請に動かされて再び陳都に出でゝ法莚を張るべく餘儀なくされた。法華文句（三大部の隨）はこの時光宅寺に於いて講せられたものを編次したものである。こゝに都に留錫すること四年にして隋の爲に陳朝は亡ぼされ建業は爲に陷れらるゝに至つた。依て智顗は難を避けて廬山に行き白蓮社の遺跡を訪ねて靜に慧遠の高風を追慕せられた。既にして隋は天下一統の覇業を成就し漸く平和の世になつたが晉王廣（隋文帝の二子後の煬帝）に屈請せられて楊州に行きて爲に菩薩戒を授け、翌年再び廬山を訪ね續いて長江を溯つて故鄉荊州を訪問せられた。留まること三年、玉泉寺を創建した。法華玄義・摩訶止觀（前の法華文句と合せて天台三大部といふ）はこの間の講說にかゝり、玄義は開皇十三年、止觀は其の翌年共に玉泉寺に於いて講せられた。蓋し三大部は天台宗の根本聖典にして天台宗の敎理はすべてこゝに攝めて居るといふべきである。開皇十六年秋天台山に歸る。先に陳帝に迎へられ山を出でゝより十一年、再び歸來せしかども世は既に隋の世にして轉變の世相に感慨無量なるものありしといふ。居ること一年にして晉王廣亦使を以て屈請せし故これに赴かんとして天台山西門の石城寺に到りて疾を得遂に示寂された。時に隋開皇十七年十一月二十四日未時で、享壽六十。詳傳は智者大師別傳（章安撰）にあり就いて研究すべし。

天台三大部

天台宗の相承

以上叙べたやうに智者大師が其の一生に於いて體驗された信仰深い宗敎的經驗を豐かな鋭い理智を以て表現されたものが天台宗の敎理である。天台宗は全く智者大師によつて開かれた。併しかういふ宗敎が成立する爲には充分の準備がなくてはならぬ筈であるばかりでなく、智者大師自身も亦「己れが發明した敎である」といふやうには決して考へて居られなかつた。「高祖龍樹師」と崇めて今現在自分の上に味ひつゝあるこの法は、曾て印度の龍樹菩薩の胸の中に味つて行かれたものであると考へられた。これによつて大師の高弟たる章安灌頂は『摩訶止觀』の序

文に天台宗の相承を叙べて今師相承金口相承といふことを説かれた。今師とは章安から智者大師のことを指して言つた語で、金口とは釋尊の口づから叙べられたものといふ意味である。そ

今師相承

の今師相承といふは今師卽ち智者大師は親り南嶽慧思禪師から相承され、その慧思禪師は北齊の慧文（一説に慧閑）禪師から傳へられた。して又その慧文は龍樹に依つてこの敎を體得せられた。よつて龍樹を天台宗の第一祖として居る。尤も慧文は龍樹とはズット時代も離れて居り處も印度と支那と隔つて居るからして面授口訣されたのではないが、龍樹の著書である中論や智

金口相承

度論によつて體得せられたのは勿論である。さて然らば天台宗は龍樹の發明かといふにさうではない。龍樹は釋迦佛の金口敎をその儘傳へられた。佛敎傳授の祖師であることを明すが金口相承である。よつて金口相承には釋迦は大迦葉に附法し大迦葉は阿難へ阿難は商那和修へ……と印度に於ける附法相承の祖師を二十三人列ねてある。これは『付法藏因緣傳』といふ印度で出來た書物の中に書いてあることであるが、それをそのまゝ寫したが金口相承である。これによれば龍樹は第十三番目の祖師である。その龍樹を高祖とする天台宗は卽ち佛敎の正統を傳ふるものであるといふことを示したのが金口相承を説いた章安の肚である。

章安灌頂

智者大師示寂後天台山を統裁したのは智越であつたが、智者大師の講説されたものを編纂し整理して後世に永く智者大師の宗敎を傳へたは章安灌頂其の人であつた。よつて後世章安を以て智者を後繼した祖師として數へるのである。天台宗の立敎開宗の根本聖敎である玄義・文句・止觀の三大部を初め今日遺つて居る智者大師の著書の多くは章安の編次に成つたのである。章安の晩年は時恰も隋末唐初の時代の切り替りであつた爲め、天台宗も振はなかつた。章安は唐朝の基礎も固つてこれから文敎の興らうとする貞觀六年に示寂した。所が貞觀十九年はかの玄奘三藏が印度の大旅行から歸つて來た年で、天下の耳目はこの新歸朝者に集つて、玄奘の傳へた法相宗のみが大に榮へ、餘の宗旨はすべてこれに壓倒せられて氣勢を擧げたることが出來なかつた。よつて天台宗も亦衰微の運を免がれ得なんだ。中唐に荆溪湛然といふ碩德が現はれて

天台宗の中興

天台宗を中興するまでは、天台山中に逼塞して唯僅かに傳燈の燈が消えなかつたのみである。章安と荆溪の間凡そ百年間に智威・慧威・玄朗の三祖がある。荆溪は天台宗の廢頽を歎きその復興を以て己が天職なりとして大に力を盡されたからして、そのお蔭で天台宗は華嚴・法相・禪等の宗旨と相對峙するの宗旨となつた。

荆溪湛然の門人は多かつたが最も名の知られて居るものは道邃と行滿の二人である。日本の傳敎大師最澄はこの二人から天台宗の敎義を傳へて日本に天台宗が開かるゝに至つた。所が本家の支那では其後間もなく武宗の法難といつて武宗皇帝によつて會昌の年に佛敎禁制の迫害を受け寺塔は破壞され僧尼は還俗せしめられ經典は散佚して了つた。その禁令は數年の後解かれ

たけれども、既に世は唐末で唐朝の綱紀が弛んで爭亂が在々處々引つ切りなしに起つたからして迫害された佛敎の恢復は充分に出來なかつた。而已ならずまだ創痍の癒えない間に周世宗の法難があつて佛敎は各宗を通じて再起することの出來ない程な大打擊を被つた。天台宗もその打擊を免がるゝことは出來なかつた。卽ち道邃を傳へた廣脩の示寂が會昌三年であるが、その後を承けた台祖物外の如きは餓饉の爲に檀施を得ず一年餘も入定斷食をしたと傳へらるゝ程の狀態であつた。物外—元琇—淸竦—義寂の四人は天台宗が衰微の極にあつた時代にこの敎を維持した祖師である。然る處宋朝となつてから佛敎も亦漸く復興の氣運に向つたが、天台宗がその復興の先驅をなすことが出來たのは地の利を古めて居つたからである。主に天台宗の行はれ所は所謂吳越の境で今の浙江省の地である。唐末群雄割據の時代にこの吳越を領したものは吳越王である。吳越王は文治主義を採つて中原の鹿を獲んとする政治的野心をもたずに專ら國利民福を計つたから、それでなくとも天然の富を領有して居る吳越の國は、天下爭亂の波を受けることが比較的少なく國は富み民は昌へた。宋朝の天下となつてからも宋朝に弓を引かずに貢物を奉つたので宋朝はこれを大に德として厚く吳越王を遇した。かういふ國に據つて居たから天台宗は諸宗に先ちて復興の運を拓くことが出來た。『佛祖統紀』第八義寂傳によるに、吳越忠懿王が『永嘉集』唐玄覺作を讀んで同除四住等の文がわからなかつた。そこで天台の德韶國師に質ねら

宋朝の天台宗

れたが、韶國師はそれを通解することが出來なかつたと見え、更に螺溪義寂にお質ねになつたがよからうとお答をした。よつて王は義寂を召された。義寂はそれに答へてそれは智者の『法華玄義』に出て居る文であるが、その書唐末の騷亂に逸して中國に今は存しない。却つて朝鮮・日本には現存するといふことであるから、どうか王のお力でお取寄を願ひたい。啻に天台の『玄義』のみでなく多くの經論疏は中國に存するもの甚だ稀である。よつて此際それらをも共に得ることが出來たならば佛法興隆の爲に非常な幸福であると、勸說された。これが動機となり王は使を海外へ出された。これによつて高麗王は諦觀斯書著者に託して多數の經論疏を吳越に贈つた。諦觀は義寂に面して一見心服してこれに師事し天台山に留つて專ら天台敎學を研鑽するに至つた。諦觀の吳越に來れるは宋建隆二年西紀九六一で宋太祖卽位第二年である。諦觀は山に在ること十年にして示寂して了つたが、この間にこの『四敎儀』は述作された。この經籍の逆輸入が佛敎興隆の動機となつた。義寂の資には寶雲義通あり義通の門から四明知禮が出た。知禮は實に天台宗第二中興の祖である。この時に當つて宗內に於いて宗旨の蘊奧に達せざる所から異義を骨張しその徒の勢は侮るべからざるものがあつた。知禮はこれらの異義者を忌憚なく批難して山家正統の敎旨を宣揚することに全力を盡した。これが山家山外の諍である。四明の門に敎を受けし者甚だ多くその門葉は永く榮へこれによりて天台宗は太た盛となつた。四明門中南屏梵

高麗諦觀

四明知禮

元以後の台宗

琮・神照本如・廣智尙賢の三家最も盛にして、各門戸を構へて天台敎學の講究に努めた。元代を經て明朝になつてからはだん〳〵敎勢不振に陷りたゞ明末に藕益智旭がありて後世に其の名を知らるゝのみであつた。藕益以後今日に至るまで凡そ二百年、天台宗は自然消滅に歸し禪宗の中に統合されてたゞ一科の學問として研究せらるゝのみとなつた。以上支那天台史を概說し了る。

日本の天台宗

日本天台法華宗の開創は最澄歸朝の翌年卽ち桓武天皇延曆二十五年である。最澄入唐して圓・戒・密・禪の四宗を傳へたが其の宗とする所は勿論天台圓宗であつた。然るに天台法華宗開創の年空海歸朝して眞言密宗を開き之を歸仰するもの甚だ多かつた。最澄の示寂後慈覺圓仁・智證圓珍等は師の遺志を紹いで入唐して密敎を傳へ叡山亦これより漸く密敎の流行を見、その後五大院安然に至つて寧ろ密敎本位の宗旨となつた。されば日本天台は純粹に支那天台を相承したものではなかつたが、一面やはり天台敎學の研鑽を努め四種三昧（摩訶止觀に說かれた觀心の道）を修することを努めた。然るに德川時代の初期に文運復興の機運に促されて妙立・靈空世に出で、天台宗の廢頽の根源が密敎の流行にあることを察して、密敎は決して山家大師の本意に非ずと說きて極力四明天台の流布に努め一面戒律を嚴にすべき旨を力說した。その結果遂に四明天台を以て一宗の本領とすることゝなり近世に於いては痴空慧澄・大寶守脫の如き四明學の大家が輩出するに至り今日に及んだのである。

天台宗の相承系譜左の如し。

- 印度 龍樹 — 支那 北齊慧文 — 南嶽慧思 — 天台智顗 — 章安灌頂 — 法華智威 — 天宮慧威 — 左溪玄朗 —
  - 荆溪湛然 — 興道道邃 — 至行廣脩 — 正定物外 — 妙說元琇 — 高論淸竦 —
    - 華頂行滿 — 日本 傳敎最澄……日本天台宗（略之）
  - 螺溪義寂 — 寶雲義通 — 四明知禮……以下略
    - 高麗諦觀
    - 慈光志因 — 慈光晤恩 — 奉先源淸 — 孤山智圓……山外派

（二）天台宗敎義の概要

天台宗の敎義を一括すれば敎相・觀心の二門である。敎相とは佛一代敎の「すがた」相狀で、その佛敎の眞髓を極めるのが敎相門である。觀心とは自己の心の上に佛敎の眞髓卽ち眞理を自己の心の上に體驗するのが觀心門である。この敎觀二門のことは智者大師が三大部に於いて開說されたのである。卽ち法華玄義二十卷及び法華文句二十卷には主として敎相門を說いて佛敎の眞髓が那邊にあるかを明にせられた。摩訶止觀二十卷は主として觀心門を說いてわれ〳〵がい

かにせば佛教の眞髓に達して證を開くべきかを叙べられたのである。所が法華玄義及び文句の二部は法華經を註釋したものである。なぜ佛教全般の眞相眞髓を叙べるのに一經の註釋書に叙べられたかといふに、智者大師の考に從へば、法華經は餘經と違つて一代教に通貫して居る眞髓を說いた經典であり一代教の價値批評をして居るから。一代教の眞相は法華經の鏡に照して始めて明になるものである。よつて一代教の眞相眞髓を知らんとしたならば是非共法華經に據るべきである。天台が特に法華經の註釋書を書いて一代教の眞相を開說した所以はこゝにあつて存する。

教相門に對する不審

然らば教相門に明す所云何といふに、斯書一部に明す五時八教がそれである。所がかういふ不審がおこる。成程五時八教といへば釋尊一代の種々雜多な教法を整理し秩序を立てゝ何人にも理解せしむる樣にしたといふ點に於いて、教のすがたといふことは出來やうけれども、それは畢竟するに教の形式に過ぎないので、教の內容卽ち釋尊の胸に燃えて居つた魂その者には觸れるものでない。從つてさういふ教相はわれ〳〵の胸に共鳴を與へないし又それは天台宗の一部分であつて而も宗の本意であるべき轉迷開悟の道を直接に言ひ顯すものでないから教理の中心とは考へられない。所が天台一宗の教理の理論的方面をこの教相門だけで全體を盡すといふのはどういふわけであるか太だ解し難い所である。この不審は一往尤もであるが、それはまだ天台の教相門を理解しないからであつて、教相門の眞髓がわかつたならばその疑は自ら氷解するであらう。凡そ佛教の見方に二樣あつて、教は月を指す指の役目だけを勤めるもので、教をいつまで眺めて居ても佛の眞髓に觸れることは出來ない。佛の眞髓は教外に別傳さるゝものであるといふは禪宗の見方である。それに反して教宗では教は佛の表現であるから佛の眞髓は教に全現して居る。よつて佛に觸れんとしたならば教を頂戴すべきである。教を棄てゝは佛に當面することは絕對に不可能であるといふは教宗の見方である。天台は教宗であつて後者の考に立脚する。それ故に佛の一代佛教の相を究めることはやがて佛の眞髓を知ることである。又佛の眞髓を知ることは、迷を迷とも知らずに迷つて居るわれら衆生が、迷を迷と知り從つて悟のいかなるものであるかを明かむることである。よつて教相が明になつたならばそこに轉迷開悟の道が明になる。教相の中に轉迷開悟がある。よつて天台宗の理論的方面は教相の一門で盡されるのである。今少しく詳細にこれを解說しやう。

教と佛との關係

教相門は教の眞相實體を明にするのであるが、教といふは「聖人下に被らしむ法」であつて大聖釋尊がわれ〳〵衆生に向つて佛の自內證を打割つて開顯するものが教である。卽ち教は佛の全體を衆生の前に開示せられたいはゞ佛が衆生への全體的表現である。われ〳〵はこの教によつて佛の全體を知るべきであつて、若し教が與へられなかつたならば永劫に佛を知ることは出

佛教に權實の分るる所以

來ない。佛がいかに尊いものであつてもそれが釋尊一人の胸の中に秘められたならば、佛はわれらの識域の外に置かるべきである。併し佛はさういふ獨善的のものでなく、われ〳〵衆生を常に一子として心から離し給はぬから、われ〳〵に教が布かれたのである。それ故教相はやがてそれを說きたまふ佛の相である。教は所說の言教であるがたゞその言說の詮索や文字の研究だけでは其の教相を窮むることは出來ない。その言教に打ち込まれてある能說の佛意を捉まなければホントウの教相はわからぬ。よつて能說の佛相が所說の教相の眞髓である。この能說の佛相を明らさまに打ち出して說いたものが法華經である。よつて法華經に於いては餘經と違つて能說の佛意が表に顯れて所說の言教となつて居る。いはゞ佛相卽教相である。餘經は所說の言教の裏に能說の佛意が潛んで居る。それ故その言教は能說の佛の表現ではあるが全分的表現ではない。よつて教は教でも權方便教である。その全的表現の法華經のみが眞實教である。然らばどうして一佛の表現に部分的と全分的の權實が分れるかといふに、それは教が前にも言つたやうにわれ〳〵衆生へのものであるから、常に對機となる所のわれ〳〵衆生といふものを度外視することが出來ないから一佛の表現にいろ〳〵の形が出來るのである。われ〳〵衆生は根機まち〳〵千差萬別であるから、自我といふ色眼鏡をはづして佛のありのまゝの相を素直に見ることの出來るものと。自我の色眼鏡の中へとりこまねば物を見ることの出來ないものとの二

法華經と餘經の別

に分れる。實際は色眼鏡を外さなければ佛の相を拜む事は出來ないのであるが、眼の惡い者なるにも構はずに眼鏡を外させたらば、佛の相は皆目拜めるものではない。それ故眼の惡い者にとつては先づその眼鏡を外させる前に眼病を治さねばならぬ。眼病を治すのは手段で佛の相を見させるが目的である故に、眼病の手術をする時には少しもその目的は暗示されてないが、手術する醫王の手前には常にその目的が明に動いて居り手術そのものゝ上に佛の眞相を見せる爲といふことが潛んで居る。故にこの場合にはまだ醫王の意は全分に現はれて居ない。それで心なき者には通途の眼病を治すを目的とする手術とこの醫王の手術とに少しの別をも認めない。それは皮相の見である。併しそれが皮相の見であるといふことはいよ〳〵眼病が癒えて眼鏡を外させて佛の全相を見せられた所に方めて知らるゝのである。法華經は佛の全相を見せられた眞實教である餘經は眼鏡をとらせる調機の方便教である。佛の全相を說かれた處に餘經の方便である事も知られその方便教を說き給ふ處にも常に佛の全相の內在して居つたことも知られるのである。——こゝに一代教の眞髓が明になつた。この眞髓が明になつた時に方便教なり眞實教がどんな形と內容を持つて居つたかといふことも、なぜあの場合にはあゝいふ教を說かねばならなかつたかといふ教の眞相が掌中の物を見るが如くに明になるのである。五時八教の教相判釋が卽ちその教の眞相である。一寸聞くと五時八教といふことは種々雜多な經典の分類整理——

例せば佛教經典整理案といふやうなものに考へられるが。決してさうではない。教相は佛相であつて教の研究がすぐ佛の研究である。佛相が明になれば頓てわれ〳〵衆生相を信知することが出來るし、又自己の何物であるかも明になるから、そこにわれ〳〵自身の眞實道が見付かるのである。

佛と衆生と自己

佛は三界を吾が家としてわれ〳〵衆生を一子とする。佛心を打ち割つて見ればそこには衆生の苦惱相で充滿して居るのである。佛心は一から十までわれ〳〵衆生の上に注がれわれ〳〵衆生の苦樂は佛は自らの苦樂として觀じたまふのである。よつて佛相はやがて衆生相である。そして一切衆生の迷の相は自己の一心の上に全體を具備して居る。それ故に衆生相は亦自己相である。華嚴經に心法と佛法と衆生法の三法無差別とあるのはこの意である。よつて教相の研究はやがて自己の眞相の研究であると共に佛卽ち自己の眞生命の研究である。こゝに教相門と觀心門の離すべからざる關係を知るべきである。

觀心門

觀心門はわれ〳〵の穢ない妄心の上に淸い佛心の全體を觀ることである。われ〳〵衆生は無明煩惱に狂はされて自己の眞生命を知らず、迷を迷とも苦を苦とも知らずに闇い生死輪廻の旅を續けて居る。若し佛がなく教が惠まれなかつたならば、永劫にこの無明の長夜を出ることは出來ない。然るに幸なる哉。現にわれ〳〵の前には教が垂れられて居る。この教を聞き教の眞髓眞相が知られた時に、その教はわがものであつて隣人の寶ではない。佛は遠きにあるにはあらでこの無明煩惱の直下に常恒不斷の慈悲を垂れたまひ、現に自己の上にこの光を投げかけられて居る。それにも拘らず自分は不急の事を諍ひてこの佛教を受け入れやうとはせない。何といふ愚さであらう。かく心付いた時求道者は業惑に鎖さるゝ自己の妄心の上に佛教を受け入れ妙法の全體をこの一心の上に體得せんとするのである。これが天台の觀心門である。これが爲に天台は自己の實驗から二十五方便十乘觀法といふ實踐的方法を指示せられ、一心三觀といつて觀心の要諦を示されたが、それらの解說は本文の上ですることにして今は略する。

以上叙べた處で天台宗の教義の核心がどんなものであるかを察せられたい。

(三) 斯書一部の大綱

前に天台宗の教義が教相・觀心の二門に盡きることを叙べたが、然らば斯書は何を叙べたものかといふことを明にせやう。四教儀一部に明す所は要約すれば五時八教であるから、一部の大綱は天台の教相門を明すにある。尤も觀心の事を明してはあるがそれを教相の中に含めてあつて教中に觀を攝めてある。このこと一部の大科を見ればわかる。大科は左の如し。

一部分三段

―初總叙三五時八教……二右 天台智者等

—次正明二五時八教一二—
—初明二化儀四教並五時一……四右 第一頓教等
—二明二化法四教一二—
—初正明二四教一……十六右 自下明化法等
—二依レ教明レ行……五十四左 然依上四教等
—後總結……六十一右 謹案台教等

依レ教明レ行の下が觀心門である。かく教相の一門に觀心を攝めるのは、前項にも叙べたやうに既に教相が明になれば自ら觀心は修せらるゝからである。又その反對に觀心の一門に教相を攝めることがある。卽ち觀心は教相が明になつて初めて成立つのであるから教相は觀心の爲の準備の開解で觀心の初門とすべきである。『摩訶止觀』はこの觀心中に教相を含める明し方で、『玄義』『文句』は教相中に觀心を攝める明し方である。よつてこの『四教儀』は『玄義』『文句』の意によつて教相の一門を主として明したものである。よつて文中三右今依二大本一略錄二綱要一といつてある。

(四) 斯書述作の緣由及末疏

緣由は前の天台宗史の概說の下に叙べたるが如し。

末疏も數々あるが支那では元粹の『備釋』二卷・從義の『集解』三卷・豪潤の『集註』三卷を三大家の疏と稱するも、備釋は略に過ぎて便ならず、「集解」『集註』最も世に行はる。日本にも『略解』二卷良光『直解』三卷性慶『空拳』十二卷道順『山簣』一卷慧澄等あり。

(五) 題號と撰號

天台四教儀

【句解】天台は天台宗のこと。元は山の名が智者大師の名となり。又轉じてその人が開かれた宗名となつた。○四教は化儀四教及び化法四教に通じた名を擧げて兩方を攝める。文中五時教をも明してあるが化儀四教の中に攝めて明すからして(一部の大科參照)化儀と化法の兩種の四教で一部の所明が盡きる。よつて題號に四教とある。○儀は儀式仕方なり。五時八教は一代佛教を判釋する仕方なり。それを明す書といふことで四教儀といふ也。

高麗沙門諦觀錄

【句解】高麗は國名にて朝鮮のこと。當時の朝鮮は高麗朝の全盛期で佛教も甚だ盛んであつた。沙門は梵語室羅摩拏(シュラマナ)を寫したもの桑門といふも同じ、勤息と譯す勤息は諸の善法を勤修して諸の惡法を息めるの義で、出家して佛道を修むるものゝこと。○諦觀は人の名、斯書の著者。

高麗國王の命によりて吳越國に　き義寂の門人となつて天台を修めたること前述の如し。○錄は抄錄でぬき出して記すことをいふ。斯書總結の文に謹案　台教廣本　抄錄五時八教　等とありて三大部等から五時八教のことを抄錄したのが斯書であると著者自ら言ふてある。錄はこれをいふ。これによつて考ふるにこの撰號（著者の名）は著者自ら案置したものと見える。

本講

第一　五時八教總論

【文科】本文三段の中今の處から散在今文までは初に五時八教を總論する一段なり。その中今は先づ教判を總叙す。

天台智者大師以五時八教判釋東流一代聖教磬無不盡

【句解】智者大師は序講に詳しく叙べた通り天台宗の開祖である。この智者大師は號で隋煬帝から賜つた名である。○判釋は判は大ザキにすること釋は小ザキにすること。卽ち一代教をカラット五時なり化儀四教なりに分類するは判なり。その分類した一々をとつて更に化法四教によつてどういふ教が含まれてあるかと細かに解釋するが釋なり。この大ザキに分類するを部といひ、小ザキに解釋するを教といふ。かく一代教を判釋するのは全く法華經を標準とすることは序講に叙ぶるが如し。○東流は印度の佛教が東方の支那へ流れ込んで來たから佛教を東流の聖教といふ。○一代は釋尊成道の夕から入涅槃の夕まで五十年の御一生をいふ。

【大意】天台大師が五時八教を以て一代佛教を分類し解釋されたがこの中に收まらぬ經は一つもない。

言五時者一華嚴時二鹿苑時（說四阿含）三方等時（說維摩・思益・楞伽・楞嚴三昧・金光明・勝鬘等經）四般若時（說摩訶般若・光讚般若・金剛般若・大品般若等諸般若經）五法華涅槃時。是爲五時亦名五味。

【文科】五時八數を列擧する中先づ五時を列ぬ。

【句解】華嚴時は『華嚴經』を說きし時のこと、釋尊菩提樹下に於いて正覺を成りたまひ、其の場を立たずに大乘法を說かれたが華嚴經で三七日卽二十一日の說法であつた。華嚴經の漢譯に二あり、一は東晉佛陀跋陀羅譯の六十卷本。これを舊譯・晉譯又は六十華嚴といふ。二は唐實叉難陀譯の八十卷本。これを新譯・唐譯又は八十華嚴といふ。外に唐般若三藏譯の四十卷本あり、これを後譯又は四十華嚴といふ。これはたゞ最後の入法界品一品だけの異譯である。○鹿苑時は鹿野苑にて說き始められた阿含經說法の時をいふ。鹿苑（ろくおん）は鹿野苑の略・印度波羅捺國（はらなこく）（今のベナレスの地）にある宥苑にて、佛三七日の後菩提樹下を立つて、憍陳如等五比丘の爲に小乘敎を說かれた。これを手始に凡そ十二年間は主として小乘敎を說法された。それを結集したものが阿含經である。その十二年間を總稱して鹿苑時といふ。或は阿含時といふこともある。○四阿含は增一・中・雜・長の四種阿含のこと。これは結集の際に結集者が便宜の爲に佛一代の小乘敎の說法

華嚴經の譯本

欠

四科を以て釋する所以

華信解品云の下法華經信解品を引證して頓教と名くる所以を總結するなり。以上部時味及び法華經信解品に依るの四科はたゞ頓教を釋するのみに止まらず、自下漸教の三時鹿苑・方等・般若幷に法華經を釋するにも亦この四科に據れり。而してこの四科によつて釋成するは何故ぞといふに。從部はその部その部の當分の經說に準じてそれが頓教なり漸教なりとなす所以を釋するのである。次に從時は華嚴經所說の三照の喩。從味は涅槃經所說の五味喩によつてそれを釋成するのである。この二喩は一代經の次第順序なりその開說の意義なりを明にするものゆへ、この二喩を以て釋成するのである。それに華嚴經は佛最初の說法であり涅槃經は最後の說法であるから、佛は最初と最後に於いて一代教開說の次第意義を宣說せられてあるから、天台の頓漸等の判釋が全く經說に契ふことを證する爲に、この二經の二喩を取つたものである。併し教判の基調は法華經に據らねば眞實のものとは言へぬ。佛自ら一代說教の趣旨を開顯された法華經に最後の批判を仰がねば要するに虛假の戲論に終る。よつて第四に法華經の信解品を以て引證したものである。殊に信解品は華嚴の會座以來永くその會座に列した佛弟子大迦葉等の四大弟子が、法華の會座に來り法華の說を聞いて從來四十餘年の說法は偏に自ら一人のものであつたことを悟り、その以前の說法の一々がどういふ意趣を以て說かれたといふことを領解したものであるから、一代經の開說の次第意趣を最も詳細に叙べてあるから、殊更信解品を以て引證さ

欠

華嚴は頓教なり

れたものである。

所謂如來初成正覺在寂滅道場四十一位法身大士及宿世根熟天龍八部一時圍繞如雲籠月爾時如來現盧舍那身說圓滿修多羅故言頓教若約機約教未免兼權謂初發心時便成正覺等文爲圓機說圓教處處說行布次第則爲權機說別教故約部爲頓約教名兼。

【文科】 華嚴經を頓教と名くる所以を釋する中、先づ初に從部釋する一段なり。

【句解】 如來は釋迦如來のこと。○寂滅道場は釋迦佛の悟を開かれた菩提樹下のこと。寂滅といふは元とその開悟の心境を言ひ顯す語にて、煩惱の煩を離れて心の靜になつたが寂で、生死の苦果を亡じて累のなくなつたが滅なり。迷の因(煩惱)と果(生死)とを離れたが寂滅なり。釋尊正覺の一念にこの寂滅を獲たまふ故に、それを獲たまふ菩提樹下を寂滅道場といふ。○四十一位法身大士とは眞如法性を開覺した菩薩のこと。四十一位は菩薩の階位に五十一位ある中十信位を除き十住・十行・十廻向・十地・等覺をいふ。蓋し天台圓教の意によれば菩薩の初住に到りて眞如法性を開悟して法性身を得る故に初住以上の菩薩を法身の大士といふ。大士は菩薩の譯語なり。法身は法性身のことで法身報身應身といふ時の法身には非ず。この法性身の語は父母所生身に對する語で、無常轉變の肉身に對して常住不朽の生命を法身といふ。初住の菩薩は、肉身の上に始めてこの常住の生命を享受する故に法身の大士といふ。但し天台別教の意では初地の菩薩にして初めて法身の大士と名くるを得と談ず。今は圓教の意にていふ。○宿世根熟とは過去世に於いて華嚴の大教を聞くだけの根機の調ひ熟して居ること。○天龍八部とは天・龍・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽の八部衆のこと。天龍等の八部の意。天は諸天・龍は常の如し。乾闥婆は帝釋天に仕へて樂を司る神の名。阿修羅は戰鬪を事とする戰の神。迦樓羅は金翅鳥と譯し龍を食とする大鳥で美の神。緊那羅は亦帝釋天に仕ふる樂神にして人身にして一角ありといふ。摩睺羅伽は大腹行と譯し蟒神にて亦樂神の一なり。これらの天部衆の過去世に於いて根機の熟せる者が釋尊の華嚴經を聞く對機なり。○盧舍那身とは。盧舍那は梵語にて淨滿と譯し又光明遍照とも譯す。華嚴經を說けろ敎主にて報身佛なり。淨滿は自行の德勝れて無量なるに就いての名。光明遍照は化他の德の無量なることを顯す名である。この盧舍那身は蓮華藏世界を領する佛にて、『梵網經』によれば千葉の蓮華臺に坐したまひ、その蓮臺の一葉毎に一の大釋迦ありてこれを司るすべてにて千の大釋迦佛あり。而してその一葉は三千大千世界なり。そして又其の一葉毎に百億の小釋迦佛ありて大千世界に各々法を傳ふるといふ。蓮華藏

盧舍那身と釋迦

世界はこの千葉の華臺に包まるゝ世界にて、これを總領するが盧舍那身にて、華嚴經の敎主がそれである。奈良東大寺の大佛像はこれに據つたものだ。○現は示現にて、菩提樹下に成道正覺を成り給ひし三十二相の應身佛たる釋迦如來が、わざ〳〵勝れたる盧那舍身の相を示現したまふといふことであるが。この現の字によつて華嚴經の敎主が法華經の敎主と異ることを詮すのであるか。そのことは次の〔餘說〕に詳說する。○圓滿修多羅とは修多羅は經の梵語にて圓敎を說きたる經のこと。天台の意によれば華嚴經は圓兼一別といふて圓敎に別敎を兼ね說いてあるとするが、其の主とする所は圓敎で別敎はたゞ傍に說いたものとする。よつて今は其の主とする所に從つて華嚴經は圓敎を說いた圓滿經といふのである。○頓敎の頓の字に頓初と圓頓の二義あり。今は二義を含めて頓敎と名く。初成正覺の說なれば頓初の義なり、圓滿經なれば圓頓の義なり。○約機約敎は華嚴經を聞く對機と、それに應じて說きたまふ敎とに就いて華嚴經を檢べて見ること。前に詳述せる如く敎は所被の機と能被の敎との微妙なる關係の上に成立するものなれば敎の眞相はこの關係を檢尋せねばならぬ。今はそれをいふ。○兼權は權機に對する權敎を兼ね說いてあること。權ははかりごとをめぐらすことで、腹底の實を覆ひ隱して居るをいふ。對機もまだ佛の腹底を聞くだけの準備の整はないものを權機といひ、これに應ずる佛敎も亦腹底をありのまゝに說かざるを權敎といふ。」○初發心時等は舊譯華嚴經第八・梵行品の

文で初發心より成佛すと明す。初發心とは前に叙べた如く初住の菩薩が初めて眞如法性を證得した所をいふ。便成正覺はその初住の菩薩がすぐ佛に成るといふこと。尤も成佛するといふても未だ無明煩惱が殘つて居るから、妙覺果滿の佛と同じ化用をなすこと能はざるも、八相作佛して衆生濟度の化用をなす也。かく初發心から作佛するのは證得したる眞如の德用の顯れである。その眞如は初住にては一分を證得するのみなれども、その一分には眞如の全分の德を攝め盡すこと、喩へば一滴の海水に四大海水の德を具するが如し。よつて初住位より作佛の大用を現じ得るのである。○爲圓機說圓敎とは、初發心に作佛を談じ因位に果德を具ふる事を明すのは、因と果とを對立的に考へて因の極まつた處にのみ果を考ふる別敎の所談ではなく。因果を不二不可分のものとして考へ果を保つ處に初めて因があり、因のある處には必ず果ありとする圓敎の所談である。斷惑(因)の結果として證理(果)を得とするは別敎で、それらの因果を局分する自力の計量を離れて眞如法性の中に歸命する處に、その眞如海中に惑(因)から脫れて法性(果)に歸入せずには居れぬ因果の大道が開顯して來るが圓敎である。發心作佛はこの自力の計量を離れた眞如海中に於ける事實であるから、自力の計量を離れざる別機には信せられぬ敎である。たゞ自力の計量の無價値を自覺した圓機のみの聞き得る敎である。○處々說等。華嚴經には品を分けて十住十行十廻向十地等の菩薩の修行次第を說くを以て處々說等といふ。○行布次第と

は行布は行列排布にて種々の法門を排べ列ねるをいふ。次第はそれらの法門を次第順序を逐ふて長時に修行するをいふ。然れば行布次第は菩薩が歴刼修行の功によりて順次に階位を歴て終に佛果に至るをいふ。これ自力の計量を以て轉迷開悟の道を考ふる別教所談である。別教は隔歴次第する故に別の名を得。隔歴次第は分けへだてをつけることで。これだけの修行を積めばこれだけの德が得られるとするをいふ。全くこれらの自力の計量を離れて不可思議の法德を仰ぐ能はざるものである。○約部爲頓は一代教を大割をして部門分けをした時は、華嚴部は大機の爲に頓圓の教を說いたものといふべきであるの意。併し更に仔細に其の部中を檢べて見るど一經悉く頓圓の教とはいへぬとの意を含めて約部といふ。『釋籤』一上[四十]此是頓部非二是頓教一といふ卽是である。○約教名兼は一經中の主とする所は元より圓教にあれども尙別教を兼ぬることと前に明すが如し。

【大意】 この一段は部に從へて華嚴經を頓教と名くる所以を明す、卽ち華嚴經當面より頓教と名けらるゝ所以を說明するのである。既に華嚴經の文に顯はれて居るやうに、釋尊が最初に開悟したまひし菩提樹下の金剛座上に坐したまふ時、多くの初住位以上の勝れた菩薩と、前生に於いて既に根機の熟せる天龍八部衆が釋尊のまわりを取り卷いて、さながら雲の月をたれ籠めたやうであつた。そこで釋尊はこれらの勝れた對機を化益する爲に盧舍那身の相好を示現して、圓滿大乘教を說法せられた。これが華嚴一經の大體であつて、天台の斯經を頓教といふのもこの所以である。さればとて斯經は終始圓教のみの開說ではない。仔細に此經がいかなる機に對しいかなる教を說かれてあるかを檢尋せば、兼權といはずには濟まぬ。何となればかの梵行品の初發心時卽作佛の如きは正しく圓機に對して圓教を說く法門なれど、一經の處々には菩薩の階次及法門を列ね歴刼修行の旨を說く是は別機に對する別教である。かく圓教に別教を兼說する經であるから、一部の大體からいへば頓教といふべく、其部中の教に就いていはゞ圓兼一別の兼說といふべきである。

【餘說】 華嚴經主と法華經主。華嚴經を說いた教主は蓮華藏界の主たる盧舍那身卽ち報身佛である。併しその盧舍那身は釋迦佛の示現に過ぎぬ。釋迦佛卽應身佛が華嚴經を說くに當つて暫く盧舍那報身佛の相を現はされたのである。啻に華嚴經を說くばかりでなく佛一代の說法はすべて釋迦佛金口の說ならざるはない。いつも釋迦が教主である。然るに其の示現の相よりいはゞ必ず一樣ではない。大日經の大日如來、觀經の彌陀如來等勝れた相好を示現したまふこと區々である。盧舍那身も其一例である。然るに華嚴經に於いて盧舍那身を示現したまふ時釋迦應身の相はこれを隱して示現されぬ。丁度阿含經の教主が三十二相の釋迦應身であつて、其の內證である勝れた報身の相を少しも現したまはぬが如くである。然るに法華經を說

須現と不須現

くに當つて釋迦は三十二相の應身佛として現はれ而もそれがそのまゝ久遠實成の報身佛として現はれて居る。かく應身にして而も報身を具する相を示現する法華の教主は正しくありの儘の佛相を打ち出されたものであるが、それに對して華嚴の如くたゞ報身の相のみを示現し阿含經の如く應身の相のみを示現するは。未だ佛の眞相を打開したものではない。何となれば報身佛は應身佛をして應身佛たらしむる生命であり本質であり魂である。三十二相の人間身のそのまゝの上にその生命本質として報身佛の無量壽無量光が存するのである。然るに華嚴經のやうに報身佛のみを示現するのは、三十二相の應身佛の外に超越的な存在を豫想することであつて、それによつては佛相の全體が顯れぬ。又阿含經のやうに化緣盡くれば寂滅に歸して了ふ三十二相身のみを示現して常恒不斷の生命としての佛を示現せぬのは元より佛の全體ではない。よつて二者いづれも方便の教といはるゝのである。よつて四明は華嚴の教主は須現の報身佛で法華の教主は不須現の報身といつて區別をして居る。須現はわざ〳〵示現せんとして示現した、わざとらしく裝ひ立てした釋迦といふことで、不須現はさういふ裝を取つて了つて生のまゝの釋迦といふことである。いはゞ華嚴の教主は舞臺に裝つた釋迦で、法華經の教主は素顏の釋迦である。こゝに兩經の別が象徵されて居るのである。

此經中云譬如日出先照高山第一時

四照と三照

【文科】次に華嚴經の三照喩に就いて頓教と名くる所以を明す。

【句解】此經とは華嚴經のこと。この三照喩は元と舊譯華嚴三十五六有寶王如來性起品の四照喩より出づ。四照とは一には先照諸大山王、二には次照一切大山、三には次照金剛寶山、四には然後普照大地とある。而して華嚴經ではこの喩の一は普賢菩薩等の如き大機が教を受くるに譬へ、二は聲聞三は緣覺四利鈍一切衆生に譬へてある。天台は法華經信解品の文を參照して高山・幽谷・平地の三照となし、更に涅槃經の五味喩に合する爲に平地を開いて食時・鹿中・正中の三とした。尤も四照を三照とするも天台がたゞ得手勝手に改めたものではなく舊譯華嚴經三十五に出現品に譬如日月出現世間乃至深山幽谷無不普照とあり、又この文の新譯五十七に譬如日月隨時出現大山幽谷普照無私とあるによれるものならん。尤も舊譯の文は無不普照の句は平地のことではなく深山幽谷を普く照さぬ所はないとも解せられる。併し新譯の普照無私の句より見れば處として普ねく照さぬはないといふ意なること明なればこの文を平地と見るのが妥當である。この華嚴經の三照の喩によると華嚴經は先照高山の第一時の說であるから頓教と名けるのである。

涅槃云譬如從牛出乳此從佛出十二部經一味

【文科】これは第三に涅槃經の五味喩によつて華嚴を頓教といふ所以を釋す。

【句解】 涅槃云は涅槃經聖行品に出づる喩である。○十二部經は新譯では十二分教と譯す。長行と重頌と授記と孤起と無問自說と因緣と譬喩と本事と本生と方廣と未曾有と論議の十二をいふ。これは佛經に包含する內容と形式とを列擧したもので、これによつて佛經のいかなるものなるかを明にせんとした一種の分類法である。此の中長行とは散文の經說。重頌は散文の經說を重ねて偈頌にて說くこと。授記は佛が弟子に對して將來作佛すべしといふ證明を授け與へること。孤起とは散文の經說なしにたゞ偈頌の讚文を說くをいふ。無問自說とは他の問を俟たず佛自ら進んで說き給ふこと。因緣は由來する處を明にすること、譬喩は喩を擧げること。本事は佛以外の菩薩等の本生譚。本生は佛自らの過去世に於ける本生譚。方廣は正しく且つ一般妥當性をもつて居る眞理を說くこと。未曾有は瑞相を現すること。論議は義理を明にすること。以上十二の條件は大小乘を問はずいづれの經典にも具備すべきであるが。今涅槃經の意では後の九部經(阿含經に配す)に對して十二部經とあれば、こゝで十二部經は大乘圓滿の經といふことを顯し。九部經の缺け目ある小乘の經にあらざることを示す。卽十二部經中方廣と無問自說と授記とを缺くが九部經なり。これ大乘敎側より小乘敎を貶しめて言ふ時のことにて、小乘は未だ中道眞如を談せざる故に方廣なし、又小乘は佛の本懷に非ざる故に無問自說なく、又小乘には一切衆生に佛性を有つことを敎へざる故に授記なしといふ。尤も小乘當分ではこの三がないといふのではない。

【餘說】 二喩相成。一代敎の最始と最終の二經を引いて五時敎の意を顯すのは五時の敎判が佛意に存したことで私の判釋ではないと明す爲めであるが、この二喩の中三照喩では一代敎が一佛(一日)の所說であることを顯し、又その說かれる敎の前後大を前にして小を次にし、大小俱の普益を後にするといふ意顯はれ。五味喩は一佛所說たることを顯すこと不便なれど、漸次に根機を調へて終に一實に歸入せしむる義を顯し易し。依つて二喩によつて一は起敎に前後あれど萬機を普益して一機をも漏らさぬ佛意を顯し、一は調機入實して一機をどこまでも眞實に徹せしめねば措かぬ化意を示すものである。(五味の喩顯は後に出づ參照)。

法華信解品云卽遣傍人急追將還窮子驚愕稱怨大喚等此領何義答諸聲聞在座如聾若瘂等是也。

【文科】 第四に法華經により華嚴經を頓敎とする所以を結釋す。

【句解】 法華信解品は『法華經』の第四信解品なり。信解品は迦葉・目犍連・迦旃延・須菩提の四大弟子が法華經の說法を聞いて自己の信解を述ぶる一品である。その信解を述ぶるに就い、長者窮子の譬喩を擧げる。其の大筋はかうである。長者は昔自己の手より逃れて行衞の知れぬ愛兒を搜し求めて或る一城に止り切りに兒の搜索に焦慮せられた。所がこの愛兒は父の里より

逃れて以來諸方に放浪して窮困を重ねつゝあつたが、會々父の止まれる一城に來り長者の家の前を過ぎつた。時に長者は門内にありてこの窮子を瞥見して其の愛兒たることを悟り、直ちに是を拉し來つて父子相見せんとしたが、窮子はそれを父と知らず却つて長者が自己を無理に捉へて危害を加ふるものとなし貧里に逃れ去つた。そこで長者は直ちに自己の所懷を遂げることの難いのを知つて、一計を案じて窮子を掃除人として長者の家に雇入れ、かくて徐々として窮子に取り入り遂に窮子の心も解けて我は汝の父なり汝は我の子なりと父子相語るを得たと。これが信解品の譬喩の筋である。これに依て佛弟子等（窮子）が釋尊（長者）の出世に會ひて華嚴經以來の丁寧親切なる化導を受け漸く法華に來りて自己が佛子にして佛果菩提を得べき自覺を得るに至つた心の跡を述べたものが信解品一品の梗概である。○卽遣傍人等より大喚等までは信解品の文を擧げたものであるが。これは窮子が長者の門前を過ぎつて長者の追手の手から逃れ去るまでの一段の骨子を擧げたものである。いふまでもなくこれは佛弟子が華嚴經の說法に對して持つた心持を述べたものである。よつて今は此の文を擧げて華嚴經がどういふ心持で說かれたものであるかといふことを明にせんとするのである。勿論信解品は佛弟子が華嚴經に對する心持を述べたものではあるが、それは法華經を聞いて佛眼の開けた佛弟子に明になつた事であり、且つ又それは佛の意底を佛弟子の語を籍つて述べられたものであるから、佛弟子の信解

は全く佛の本意である。よつて華嚴經の本意はこれに極まるといふのが天台の考である。○卽遣傍人は長者が窮子を見るなり直ちに傍に居る家臣等に命じて窮子を拉し來らしむることをいふ。卽の字は時を隔てざる頓速を顯す語で正しく華嚴經の頓敎なることを示すのである。對手の意の如何を考ふる暇もなく、自己の意にはり充てる念願を率直に露骨に顯したが、長者が窮子を見た端的の動作で、それを卽の字で言ひ顯したものである。前に述べた頓の字にヂカヅケ（機の云何を考へざる所に圓熟せざる敎なる意を含む）と同時にスグレタ圓頓（佛の意底を卒直に言ひ顯すは圓滿敎なり）の二意を含むこと知るべし。傍人は喩では長者の家臣等のことであるが、これを華嚴經の上に合して言へば、華嚴經の本文を見ると法惠といふ菩薩が佛に代りて十住のことを說き功德林菩薩は十行・金剛幢菩薩は十廻向・金剛藏菩薩は十地のことを說かれて居る。傍人はこれらの菩薩のことを指したもので、これを遣し說かしめた能遣人は佛である。又はいふべし。傍人は華嚴の說敎全體を顯すと。この時は前の菩薩等の代說も本に歸して見れば佛の說敎なれば。それを佛の自內證の理智に望めて傍人といふ。說かずには居られぬ佛の內に燃ゆるもの（理智）が、外に表れて說敎となるからである。○急追は對手の如何を見ずに佛の所懷を暢べんとするの急なることを顯す。よつて天台はこの句を解して直將二大敎一擬二宜小機一故云二急追一といへり。この擬宜の二字を以て天台は華嚴經說法の本意を顯さんとするのである。擬宜

華嚴の正所被は小機

はあてがふの意で佛は華嚴經を以て迦葉目連等の佛弟子にあてがつて、これを是非に信受せしめねばならぬと思召すをいふ。蓋し法華經によつて明にされた點はこゝにあるので、華嚴經の上だけでは華嚴經の正所被の機は大機にあつて、聲聞緣覺の小機は顧みる所ではない。これは文の上は顯れた所であるが、法華經より逆觀する時その華嚴經も佛の意底にあつてはやはり聲聞等の佛弟子が正所被である。文相には少しも顧みられて居ない佛弟子の爲に華嚴經を說かれたのである。聲聞等の佛弟子は人類の歷史の上に確なる足跡を印して居る現實人である。受け得た人間の業報に縛られて現實に苦惱を甜めつゝある人々である。かの宿世根熟の天龍八部の非人や法身の菩薩のやうな超現實の上根の器ではない。生老病死の四苦を免がれ難い運命として甘受せざるを得ない佛の前身たる悉達太子の同朋同友としての現實人が、聲聞である迦葉等の佛弟子である。釋尊出世の本懷は實にこの現實人救濟に存する。受け得た人間の業苦を痛感する人類の代表者とし先覺者として佛位に上れる釋尊は何を措いても同朋たる佛弟子をして佛位に入れしめねばならぬ。かうした現實人の熱愛が佛の本質であることを明にしたのが法華經である。それ故佛の一代の說敎はこの現實人熱愛の表現に外ならぬ。華嚴經一經のみがその埒外にあらう筈はなく。亦あつてはならぬ。よつて華嚴經の正所被は小機にある。この小機は當時華嚴經の大敎を聞き得る器ではなかつた。それは佛の手前ではよく知れて居た事柄ではあるが、

華嚴の會座に聲聞の在否

さればとてその小機を度外視することは出來ない。否もとこの大敎は小器のものである。「大敎を小器へ」の一大事の爲に佛が虛假の世間に立つ所以が存するのである。佛が世に出現したまふ第一聲はこの一大事の宣言であつた。それは事の成否を見て居るの暇のない一大事である。かうした悲痛を極めセッパつまつた心持で華嚴經は說かれた。「大敎を小機に擬宜する」と天台のいつたのはかうした意味である。この迷深き小機こそ華嚴經を初め佛一代敎を通貫しての正所被である。これが法華經による天台の五時敎の眼目である。將還とは引張り戻すことで窮子は本より長者の子なれば還といふ佛の本性に立ち還らしむるに喩ふ。○窮子驚愕等は經の本文には卽遣旁人急追將還、爾時使者疾走往捉窮子驚愕稱怨大喚我不相犯何爲見捕使者執之愈急强牽將還、干時窮子自念無罪而被囚執此必定死轉更惶怖悶絕躃地とあり。今略して引く故に大喚等といふ。○此領何義とはこの信解品の喩によつて迦葉等の佛弟子は如何なる義を領解したのであるかと徵起する語である。○諸聲聞在座等は迦葉等が旁人急追によつて窮子が稱怨大喚せりと喩へたのは、華嚴の會座に侍したけれども如聾如啞で大敎を受け入れなんだと領解したものである。聲聞の小器はその當時にあつては華嚴經を自分の爲の敎として受け入るゝことが出來なかつた、然るに法華の今にして始めて其大敎も亦我が爲に與へられたものであつたといふことを言外に含めて如聾如啞等といふ也。時に華嚴經はもと菩薩樹下の道場に於

前分華嚴
後分華嚴

いて說き給ふ所なれば、其の會座には未だ弟子あらず然れば聲聞の座に在るべき筈なし云何といふ論あり。尤も給孤獨園で說かれた入法界品善財童子の求道を說く一品は給孤獨園建立以後の說なれば其の座に聲聞の在ることは勿論にて如聾如啞の文も亦この入法界品に出づ。天台ではこの一品は後分華嚴といひ菩提樹下の說法を前分華嚴といふ。この前分華嚴には元より聲聞の佛弟子あるべき筈はなけれども、佛の意中には正所被の機として聲聞を思ひ浮べ給ふ。されば佛弟子としての形の聲聞は其座に侍せずといへども、擬宜の上には聲聞ありといふべし。迦葉等は前分華嚴の當時は未だ佛に歸依せず從つて華嚴の座に侍せなんだけれども、この佛の擬宜によつて惠まれた大敎を我が爲めの說敎として受け入れたればこそ、信解品の傍人急追の喩を以て領解したのである。○如聾如啞の文は入法界品出づ。小機は其の當座に於いて何等の敎益をも被ふることが出來なんだを言ふ。さればとて華嚴の說法が小機に取つては全く無用のものであるといふことではない。否これあるが爲に佛心が偏に小機にあることをやがて知らしめられ、且つ大敎がたゞ大機のものにあらずして却つて小機のものなりと領得せしめらる。又これあるが爲に小機が警覺されて小敎を求め且つ小敎に止まることなくして大敎を求めて止まざらしめたものである。よつて如聾如啞の華嚴經の文は法華經の傍人急追の文によつて初めて其の本義を知るべきである。天台が華嚴は小機への擬宜の敎なりとして華嚴經までも小機のものとして取り入れた意趣は深く味ふべきである。

【大意】 既に華嚴經當面より見て、成道最初の說であつて、然も大乘圓滿の敎を叙べた敎即頓敎といふことは明になつたが。更に三照の喩により第一時の說なりとして、その大敎を大機に與へるのは、一切衆生を普益するの前提であることを示し。五味喩に來つてはこれを乳味なりとなし、その大敎が單に大機に與へるものではなく小機を調へる爲めの最初の投藥であることを明にした。以上部時味の三方より華嚴の頓敎なる所以を明したが、そこで明かになつたことは最初の說といふことゝ圓頓の敎といふことである。然るにそれが大機の爲の敎か小機の爲の敎かといふことは華嚴經と涅槃經と見る所を異にして居る。それを解決するが法華經信解品である。これによれば華嚴經はその顯說の當分からは勿論大機を對機として居る。併しそれはそれを說く佛の本意ではない。佛の本意は最初より小機を正所被として居る。擬宜は小機にある。その小機は華嚴の會座には姿をも見せぬものであり、たとひ姿を見せても如聾如啞であつた。しかしこれらの小機に等しく佛知見を開かしむることこそ佛出世の本懷であつた。華嚴の會座で大機が大敎を得て佛知見に歡喜するのは、その儘煩惱に深く鎖された小機の得べき法喜である。これが華嚴經說法當時に動いて居つた佛化導の意思である。それでなくては或少數のものゝ特種敎として限られて了ひ廣大なる佛の本意は顯はれぬ。人天の大導師としての佛の確

信は表現されぬ。かうした佛の意底深くに立て籠められた本懷は法華經のみによつて開かれた。されば卽遣傍人の大敎もその目ざす所は貧里を我家とする窮子の小機にあつた。これを明にする爲に今信解品を引かれたのである。

（二）鹿苑時（漸敎その一）

第二漸敎者 此下三時三味總名爲漸

【文科】以下漸敎を明すに就いて最初に總標。

【句解】漸敎は頓敎に對する名で、次第順序を經て淺より深に導く故漸といふ。これに三あり、鹿苑時・方等時・般若時なり。鹿苑時は純小乘敎、方等時は小に對して大を說く。般若時は專ら大乘敎を說く。これを三時三味といふ。

次爲三乘根性於頓無益故不動寂場而游鹿苑脫舍那珍御之服著丈六弊垢之衣示從兜率降下託摩耶胎住胎出胎納妃生子出家苦行六年已後木菩提樹下以草爲座成劣應身初在鹿苑先爲五人說四諦十二因緣事六度等敎

【文科】以下鹿苑時を明すに約部約時約味約法華の四段ある中。今は約部の一段。約部は阿含經の顯說の上より說明するを

いふ。

【句釋】三乘根性の三乘は聲聞乘緣覺乘菩薩乘のこと。小乘敎を受くるものにこの三種の機別あり。乘は「のりもの」の義で迷の衆生を載せて悟りの世界へ運搬する敎のこと。聲聞なれば四諦敎の乘物によつて悟を開く緣覺なれば十二因緣敎の乘物によつて悟を開き、菩薩は六度敎によるといふ風に乘物の敎も三人別々である。されば三乘はもと乘物の敎の名なれども、それが轉じて乘物に乘つた人のことを三乘といふ。今も人のこと。根性は根器性分のこと。まだ聲聞の敎を聞かざるもやがてそれを聞くべき器でありそれを修する性分をもつて居るものを聲聞根性といふ。こゝにたゞ三乘といはず三乘の根性といつたのは華嚴の會座に於いてはまだ正式に佛に歸依した形の三乘になつて居らぬからである。○於頓無益は華嚴經に於いて如聾如啞なることをいふ。○不動寂場而游鹿苑は寂場は寂滅道場の略で成道正覺の道場のこと。華嚴經說法の處をいふ。鹿苑は鹿野苑のこと、阿含經說法の最初の場處なり。不動而游とは華嚴經說法の場所を動かずに而も鹿野苑で說法なされたこと。これは一寸聞くと矛盾も甚しき言分のやうなれども、說法する佛の手前では常に成道の一念の連續で、この一念の生命が自ら展び行く相が五十年の一生であるから、身は席の煖なる暇もなく屢々居を移したまへど、心は常に成道の道場に坐つて少しも動じたまはぬ。よつて不動而游といふ。もと佛の悟の心境には動靜の二

不動而游

面があり、一面は研いだ明鏡のやうにどこまでも澄み切つて寂靜である。又一面には絶えず物に應じ機に臨んではたらいて止まないのは、明鏡か前に來る萬像を容れて拒むことがない如くである。この動靜の二面は決して相背の事實ではなく却つて相資相成の事實である。心の澄むこと愈々靜なれば物を寫すこともいよ〳〵明かであり、佛心いよ〳〵明なれば物を愍むの慈悲心いよ〳〵動くのである。道場にて獲得された成道の一念が動せざる處にいよ〳〵大悲化他の用(はたらき)をせずには居られぬ。「寂場を動せずして鹿苑に游ぶ」とはかういふ心境を叙べたものである。○舍那珍御之服とは舍那は盧舍那身卽ち華嚴の教主のこと、珍御之服とは珍寶で飾り立てた天子の御服のことで舍那身を形容していふ語。○丈六弊垢之衣とは丈六とは釋迦應身のこと、釋尊の身長は一丈六尺あつたといふので丈六身といふ。弊垢之衣はやぶれて垢(あか)じみた衣で、前の珍御之服に對(つい)して應身佛を形容する語である。○脫珍著蔽とは大乘の教化を襃(や)めて小乘の施化をすることを顯す。前にも叙べたる如く佛身は釋迦應身に卽して舍那報身の相を得たまへば常に丈六身の上に舍那身の德を具へたまへども、暫く大機の前に現はるゝ爲には舍那身を以て現はれ小機に臨んでは丈六身を以て示現したまふ。實には脫ぐも著るもなけれども暫く衆生施化の爲に勝れた衣裝を脫いで劣れる衣裝をとりたまふのである。○示從兜率等以下は正しく應身佛として示現したまふ相を叙ぶ。八相作佛は應身佛示現の相であるからこの下にそれを擧ぐ。

○兜率降下は八相作佛の第一相にて、此界に出現する佛は必ず兜率天より降るといふが定(きま)にて釋迦も彌勒も諸佛皆然り。○託摩耶胎は佛母摩耶夫人の胎内に託生すること。人間界に出世する佛は人間ならざるべからざることを示す。八相作佛の第二相なり。○住胎出胎は佛母胎の内にあるを住胎といふ胎を出づるが出胎なり。住胎は八相作佛の上では託胎の中に屬して別に一相とせず。出胎はその第三相なり。○納妃生子はいづれも八相の中には數へず、耶輸陀羅妃を納れて羅睺羅を生むこと常の如し。○出家苦行の中出家は八相中の第四相なり。苦行は八相中に入れず。○木菩提樹下以草爲座は、菩提樹の下で吉祥童子の捧げた草を敷いてその上に坐して成道し給ふをいふ。八相中には降魔と成道を二相として擧ぐ。木菩提樹と木の字をわざ〳〵添えたのは。三藏教(小乘)の成道を表示する爲めで、通教の佛が七寶菩提樹下に坐するに簡ぶ。○劣應身は勝應身に對する語で三十二相八十隨形好の佛をいふ、この三十二相等は人中の尊を示す爲である。これに對して、大機を應化する爲に八萬四千乃至無量數の大相好を示現する佛を勝應身といふ。○爲五人とは五人は阿若憍陳如・頞鞞・跋提・十力迦葉・摩男俱利(五人の名に異說あるも今は法華文句による)なり。この五人は悉達太子の出家するや淨飯王を始め迦毘羅城の人々に選ばれて太子に隨侍すべき命を受け太子と苦行を共にしたが、太子が苦行を棄てゝ尼連禪河に於いて沐浴して一牧女の捧げた乳糜を受けて菩提樹下に端坐思惟し給ふに及んで、五人はこの樣を見て太子の道

心の退墮せるものと思ひ誤り太子を棄てゝ鹿野苑に去つた。よつて佛成道し給ふや先づこれらの五人の後を逐ひて鹿苑に行きこゝで五人の爲に說法をなされたが阿含經の最初の說である。○說四諦十二因緣等。阿含經の敎義を概括して聲聞には四諦敎、緣覺には十二因緣敎、菩薩には六度敎の三としたものである。諸緣度の解說は後に出づ。○事六度とは通敎にて談ずる理の六度に對して藏敎の六度を事といふ。藏敎では六度の事功を擧げることを主として敎ゆる故に事六度といひ、通敎では事功を擧げるよりも六度の理卽ち眞精神に契合する心持を主として敎ふる故理の六度といふ。例せば布施をするにも藏敎では理屈はとも角も又布施者の心理の云何といふよりも、實際財施にせよ法施にせよ布施業を實行するのが布施の主眼である。通敎では然らず布施者の心理が布施の眞意義に契合せねばたとへ形式の布施業は實行が出來ても何にもならぬ。卽ち布施の眞意義は空理にある。何ものゝ上にも我が所有なりとする觀念を空じ去るのが布施の眞意義である。それ故に布施者は常に布施を所有する我をも離脫せねばならぬ。終日布施をなして終日布施の思をなさぬのが眞の布施である。持戒・忍辱・精進・禪定・智慧も亦この例によりて知るべし。

六度の事理

若約時則日照幽谷第二時

【文科】華嚴經の三照喩によりて鹿苑時が第二時敎なることを明す。

【句解】幽谷は最も根機の低く劣れる小機に喩へたもの。大機の爲の大敎たる華嚴の後に小機を照す小敎たる阿含の說法のある順序はこの三照喩によつて知るべきである。

若約味則從乳出酪此從十二部經出九部修多羅二酪一味

【文科】涅槃經の五味喩に配して第二の說たることを明す。

【句解】酪は乳を煎じて精製したもの。華嚴にては如聾如啞の小機が阿含の敎によつて煩惱を斷じて小乘の涅槃を證るだけに上達したことを喩へたもの。○九部修多羅は九部經にて、前の十二部經の下で述ぶるが如し。今は小乘敎のことを九部經といふ。

信解品云而以方便密遣二人聲聞緣覺形色憔悴無威德者汝可詣彼徐語窮子雇汝除糞此領何義答次頓之後說三藏敎二十年中常令除糞卽破見思煩惱等義也。

【文科】法華經によつて鹿苑時の第二の說たることを明にする一段。

【句解】方便は『法華文句』十四に三種方便を擧げて釋す。其第一釋に「方は法なり便は用なり」とあつて、時宜に適應する方法を用ゐて敎化誘導すること。第二釋は「方便は權なり」と釋し謀を以て敎え導くこと。第三釋は秘妙方便と釋し、それらの謀を以て時宜に應ずる施設を

方便の三釋

なすことも、みな佛の秘妙の方寸より出づることなれば、達觀すれば方便の中に秘妙を見ることが出來る。今は華嚴の大教を受けることの出來ぬ小機の爲に謀を廻らし小機に適應する方法卽ち小教を用ゐて教導したまふこと。尤もこの小教も達觀すれば佛の大智が動いて居るのである。○密遣二人は前の卽遣旁人に對する語。密は長者よりの使といふことを隱して窮子に知らしめぬやうにするをいふ。小乘教では二乘も尙作佛すといふことは隱して說かずたゞ三界の苦を脫れて無餘涅槃に入るを窮極の理想と教ゆるを以て密といふ。二人は聲聞緣覺に喩ふ、小乘教中亦菩薩乘あれども信解品の領解者は迦葉等の四大弟子にして我身が聲聞なれば、菩薩のことに及ばずよつてたゞ二人といふ。○形色憔悴は容姿の瘠せ衰へたること。聲聞は內に無常を怖れ外に八苦に逢ひ大乘の人々の如くに福德智慧を身に得ること能はざる故に形色憔悴といふ。○無威德者は威勢のないみすぼらしいものゝことで、小乘の人々は佛の十力四無畏の德を身に保つことの出來ぬことをいふ。○詣彼とは窮子の住居とする貧里へ出かけること。小機に隨類應同することを喩ふ。○徐語は丁寧親切に會得の出來るやうに語ること。小乘教の煩惱を斷じて三界を解脫するといふことは、佛にとつては誠に迂り遠い話であるが、それを話さずには作佛の道へは出られぬ故、合點の行くやうに迂り遠い道を教へることを徐語といふ。○除糞は掃除役のこと。糞とは苦集に譬ふ。苦集はこの世の苦果とそれを受くる源因の煩惱を

修道上の其日暮

諸機各別の教

集といふ。この苦集を斷除して道滅の價を得るが小乘教なり。道は八正道の修行にて滅はそれによつて得る涅槃のこと。今除糞に譬へて掃除をすればそれだけの働に應じて賃金を儲けることが出來るといふ。以て小乘教が修道上の其日暮しにして功利的道德的の教なることを顯す。○二十年中は阿含十二年の說に合せず。よつて天台は種々に解せり。今其の中の一說を擧ぐれば、聲聞緣覺の二乘の各々には世俗智等の十智ある故にそれを喩へて二十年といふと。○見思煩惱は見惑と思惑とのこと。この二の煩惱によつて三界の苦果を受くる故、この煩惱を斷じて三界を脫れ出るといふが小乘教なり。見思二惑のことは後に出つ。

【大意】 漸教の最初は鹿苑時の說教である。佛は小機が華嚴の說法に於いて如聾如啞にて利益を得ること無きを見て、盧舍那佛の勝れたる衣裝をすてゝ三十二相の劣應身の釋迦佛として三乘の小機の前に現はれ給ひ、徐ろに方便誘引の手を垂れてこれらの小機を調へ給ふ。この鹿苑時の說法を總括すると聲聞には四諦教・緣覺には十二因緣教・菩薩には六度教で、三人が別々の教を與へられ別々の道を修せしめられた。これ小機の持前として小なる自我の天地のみに局執して大法の天地に參することが出來ない。よつて暫く諸機各別の執見に寄せて諸機各別の教を施設されたので毒を以て毒を制するものである。これやがて各別の執見を對治して大法の天地に入れしむる道程に外ならぬ。よつてこの鹿苑時は華嚴經の三照に配すれば「日幽谷を照す」

に當る。幽谷は大法の世界から最も遠かりて小我に閉ぢこもつて佛日を仰ぐこと最も緣遠き小機に喩ふるのである。この小機が鹿苑時に於いて佛日の照護を得るのである。又次に涅槃經五味喩に配すれば酪味に當り九部修多羅卽ち小乘敎を出すといふが正にこの鹿苑時の所說をいふたものである。酪味といふのは、華嚴經に於いて何等益を得ることなきに比して阿含經に於いては小機はそれ〴〵益を得たからして、華嚴を乳味といふに對して鹿苑時を酪味といふのである。次にこの鹿苑時の說敎の眞實の意義は法華經に於いて開顯された。法華に於いて佛知見を開くことを得た迦葉等の四大弟子が、曾て其會座に侍して親り其說敎の法益に潤つた。これらの四大弟子聲聞が、鹿苑時に就いていかに考へその領解をいかに釋尊の前に陳べたかといふに、その四大弟子の領解を陳べた信解品に次の如く言ふて居る。長者は既に卽遣旁人前の華嚴に時に喩ふの家では掃除人夫を雇ひ入れたいので相當の賃金も出るといふことであるが　汝も雇れてはどうか」と言はしめた。かういふ譬喩で領解を陳べて居るのが正しく鹿苑時に就いての領解であるが、この喩はどういふことを領解したものであるかといふに、華嚴の頓敎の說法に次いで三藏敎卽小乘敎を說かれたのは、先づ小機をして三界の迷から救ひ出さんが爲に、差し當り三界の迷の原因たる見思の煩惱を斷せしめやうとなさつたのである。除糞といふのはこれらの煩惱を斷ずることを言ふたもので。この煩惱を除いた所にこれらの小機の人々は更に大法の天地の存することに心附いて、そこから大乘法を欣求する志が新しく生じて來るのである。鹿苑時はそれまでに小機を調へる役目を勤めるものに過ぎない。これ鹿苑時が方便の第一歩たる所以である。

方等部の特長

(三) 方　等　時 (漸敎その二)

次明方等部淨名等經。彈偏折小歎大褒圓。四敎俱說藏爲半字敎。通別圓爲滿字敎。對半說滿故言對敎。

【文科】以下方等時を明すに亦四段ある中、今は初に約部の一段。約部は方等部の經說によつて方等時のいかなるものなるかを解說するをいふ。

【句解】淨名等經は方等部の經典は數多ある中淨名經を擧げて餘他を略す。淨名經は方等部の代表的經典で方等部の特徵を最も多く持つて居るからして淨名經一經を例示したものである。○彈偏折小歎大褒圓の八字は方等部の特徵を要約した語であつて、方等部はいかなる經典に名くるやといはゞこの八字を以て答ふべきである。彈偏は褒圓に對し折小は嘆大に對する語であるが、今はこれを錯綜して造語したものである。偏圓小大は次の圖の如き關係にあり。折小

折小嘆大

の時はたゞ三藏教の人々のみが破折され、通教は尙ほ大乘教なればこの時はたゞ三藏教の人々のみが破折され、通教は尙ほ大乘教なればこの時はたゞ三藏教の人々のみが破折され、通教は尙ほ大乘教なればこの時はたゞ三藏教の人々のみが破折され、通教は尙ほ大乘教なればこの時はたゞ三藏教の人々のみが破折され、通教は尙ほ大乘教なればこの時はたゞ三藏教の人々のみが破折され、通教は尙ほ大乘教なればこの時はたゞ三藏教の人々のみが破折され、通教は尙ほ大乘教なればこの時はたゞ三藏教の人々のみが破折され、通教は尙ほ大乘教なればこの時はたゞ三藏教の人々のみが破折され、通教は尙ほ大乘教なればこの時はたゞ三藏教の人々のみが破折され、通教は尙ほ大乘教なればこの時はたゞ三藏教の人々のみが破折され、通教は尙ほ大乘教なれば讃嘆せらるゝ。然るに偏圓相對の時は別教も尙ほ偏權の教として指彈を免れずたゞ圓教のみが褒譽される。○折小歎大は小乘を折き挫きて大乘を嘆め上げること。例せば維摩經の觀衆生品に維摩居士の室にありて一天女が天華を供養して諸菩薩及び大弟子等の上に散じたが、その華諸菩薩の衣の上をさら〳〵と落ちて行つたに、大弟子等の衣に落ちた華は著いて落ちぬばかりでなく、大弟子等がいかにこれを振り落さうとしても落ちぬ。これに依て舍利弗等の大弟子が生死を畏るゝ執着を離るゝこと能はざるを說くが如き正しく折小嘆大の一例なり。この他維摩經には處々に此種の說法あり。不思議品に於いて須彌燈王佛の獅子座の高八萬四千由旬なるを三萬三千の座を設けてあるに、維摩や文殊菩薩はやす〳〵と其の高座に昇られるが舍利弗等は登ることが出來ないのでたゞ仰ぎ見るばかりである。よつて維摩は舍利弗等に須彌燈王佛に禮をなさば登り得ることを敎ゆと說く。是亦大小相對を明す例である。又舍弗利等の大弟子が維摩の問疾に赴き難きことを說き文殊菩薩が獨り問疾に赴くも亦それである。○彈偏褒圓は偏敎を彈訶して圓敎を褒美するのである。維摩經入不二法門品にもろ〳〵の菩薩が各々不二法門に就いての領解を叙べ、文殊菩薩が無言說に不二を說き、維摩が最後に默不二を明すに至つて文殊が感嘆するはこれ彈偏褒圓の一例である。方等部の經典の特徵はこの大小相對偏圓相對を以て小乘に對して大乘・偏敎に對して圓敎の勝れたことを明にするにある。而してその圓敎を褒美するも其の意趣はやはり小乘に對して大乘の勝れたることを詮示するにありて、大小相對が此の部の本旨である。鹿苑時に於いて小乘の法益を得たる小機はやがて小乘を以て究竟の敎として局執するを以て、この局執を破りて大乘に引導するが方等時の役目　ある。所謂小機を調へて恥小慕大の心を生せしむるのが、佛がこの部の經典を設けたまふ本意である。○四敎俱說等以下は方等部の中には藏通別圓の四敎が素材として說かれてある模樣を明す。前に叙べたやうに方等部の特徵は大小二敎を對峙せしめて大乘敎の勝れたることを明すにあるからして、當然四敎が俱說せられねばならぬ。又四敎が俱說せらるゝに自ら大小相對の說法と偏圓相對の明し方があるべきなれども、大小相對の說法が方等部の本領を示すもので、偏圓相對の明し方はその窮極を示すもので、必ずしも方等部に限つたことではない。華嚴部にも般若部にも通ずる說法である。よつて今も對半說滿故言對敎と大小相對に結歸せしめてある。其の意知るべし。かく大小相對の說法を部の本領本意とするとはいへ、小乘敎は大乘敎を顯す爲に說かるゝものであるから小乘敎を明すのは所詮ではない。尤も橫來新受小の機類卽ち鹿苑時の說法を聞かずに方等時に始めて佛門に歸するものもあれば、それらの橫來の機類はその所破として說かれた小乘敎によつて小乘の

小乘敎を用ふる意趣

密成通益

利益を得ることあるも、それは方等部としては傍系であるからして、それによつて小乘教も亦大乘教と同じく此部の所詮であるとはいへない。此部の所詮は大乘教の勝れたことを顯彰するにある。よつて『止觀輔行』十之二に方等傍用三藏正用三教以斥二乘令二乘人密成通益とある。この密成通益とは通益即ち通教の益を得て大乘門中の人となる（通教は大乘の初門なり）も、それは密益であつて二乘の人々が意識して大乘門中の人なりといふ確信を得るにあらずして、二乘の人々は方等の說法によつて恥小慕大の心を生じて大乘は慕はしきものと思ふまでに至りたれど、未だ進んで大乘行を修せんとするの志を發し得ぬのである。たゞその恥小慕大の心が理として通益を得たことになるをいふのである。二乘が自ら大乘門中の一人たることを意識するは法華に來りて始めて得るのである。それまでは二乘の人々は自ら大乘の法器に非ずといふ卑屈の念を抱持するのである。

半字滿字

○半字教は小乘教。滿字教は大乘教のことである。半字滿字のことは元と涅槃經に出づる喩で、長者が其子を教育する最初は半字を教へて毘伽羅論を教へないといふ喩を出してある。毘伽羅論は印度の完全な字書のことで滿字と意譯す。それに對して半字といへば半字は初學のものゝ用ふる字書のことで不完全の字書の義である。よつてこれを大小二乘に喩へたものである。（釋籤五之下六十涅槃經を引きて釋す可二披見一）。

對教

○對教は方等部の經典の異名であつて、小大二教を對立して說き而も大を以て小を對破するが故に對教といふのである。對に對說對破の二義あり、對說の時は小乘も大乘も頭を併べて說くことをいひ、對破は小を破して大を顯すをいふ。要は小乘教を究竟の說となすの妄を啓いて大乘教の勝れたることを顯すにある。これによつて二乘の人々に恥小慕大の志を生せしめ、知らず〳〵廻小向大せしむるものが、大小を對立せしめ而も大乘の勝れたることを說く所の方等部の經典である。

若約時則食時第三時

【文科】方等時を明す下第二約時なり。華嚴經の三照に配して方等部の位置を明にするなり。

【句解】食時は朝飯時で辰時即ち午前八時をいふ。これに對して禺中は巳時（午前十時）正中は午時（正午）なり。蓋し華嚴經の三照の中照二平地一を時によつて三を開き五時五味に合せしめたものである。

若約味則從酪出生酥此後九部出方等三生一酥味

【文科】第三約味の一段なり。

【句解】九部は小乘のこと、方等は大乘のことであるが、涅槃經の出二方等一の語は正しく大乘教たる方等部のことを指したもので、小乘教の鹿苑時に引續いて大乘の方等時の說法のあつたことを明すものである。

信解品云。過是已後心。相體信入出無難然其所止猶在本處。
此領何義。答三藏之後次說方等。已得道果心相體信聞罵不
瞋內懷慙愧心漸淳淑。

【文科】第四約二法華經一の一段である。

【句解】過是已後とは窮子が除糞役を二十年間勤めて後のこと。即ち小乘教の教によつて煩惱を駈逐することに努め各自その益を得たる後をいふ。○心相體信は長者と窮子との心が互に打ち融け知り合ひ信じ合ふやうになつたこと。即ち小乘の教に順つて修行すればそれによつて教の如く涅槃の法益の賃金を得るからして窮子は長者を信ずるやうになつた。方等部に來つて菩薩の爲に大乘法を說かるゝを聞いても佛說の嘘でないことを信ずることが出來る。これ子父を信ずる故である。佛亦小機のやゝ調へることを知らしめす故に大乘法を說くも小機の誹謗せざるを信じ給ふから、方等部の說法を設け給ふはこれ父信子である。かく父子佛凡の互に信じあふやうになつたことを心相體信といふ。○入出無難は長者の家へはゃかることなく出入りをすること。入とは小乘から大乘へ入るをいひ、出は大乘から小乘へ出るに喩ふ。大乘法を聞いても昔の如くに魔說にあらざるかと畏れることもなく。又小乘法を聞くも昔の如くこの法のみが

子信父
父信子

難の二義

正法で餘法を受け入れず疑ふといふやうな局執を持たない。大乘法も小乘法も佛說として受け入れるやうになつたこと。無難の難字に畏れ難ると疑ひ難るとの二義を具す。華嚴の如く大乘を畏れ難ることもなく、鹿苑の如く大乘を疑ひ難ることなきをいふ。○其所止猶在本處とは喩では窮子は長者の家へ出入するを我家の如く難ることなけれども、長者の家が我家とは知らず、長者門外の貧家を我家と思ひ込みそこに寢泊もするをいふ。これは方等時にありて小機の人々は小乘の羅漢果に止り、まだこれを捨てゝ大乘の大涅槃を證らんとする志願を懷く能はざるに喩ふ。如何となれば心に耻小慕大すとはいへ大乘を以て菩薩の法として小乘を以てわれら小機の法なりと執じて、到底大乘法はわれらの手の及ばざる所と片付けて置く故、まだわが心の据え處は常に小乘の羅漢果に止りて大乘法に進まない。但し耻小慕大の心の動くのは漸次に大乘法に接近して來たことを示すものである。○此領何義は前にも出でし如く四大弟子がこの喩を以てどういふことを領解したのであるかと問を設けて、喩の意を明すのである。答の要旨は、この喩は鹿苑時に引續いて方等時の說法があつたことを明すもので、この方等時の說法によつて、小機の人々は漸次調ひ熟して、拆小數大の說法を聞いても腹立ち逆はぬばかりではなく、耻小慕大の心が動くやうになつた。小乘より大乘への進展が隱約の間に小機の人々の上に動いて來た。これが方等時の說法の本旨である。○已得道果は道果は小乘の羅漢果のこと。羅漢果

は八正道によつて得たる果なる故に道果といふ。この道果を得るは鹿苑時の利益である。鹿苑時でこの利益を得るが故に聲聞衆の内心に佛を信ずる心が生じ、方等時に於て佛の說き給ふ大乘法を受け入れるやうになる。○聞罵不瞋は拆小歎大彈偏褒圓の說を誹らず聞くことをいふ。○内懷慙愧は正しく耻小慕大の心動くをいふ。○心漸淳淑は淳はウブにスナホなこと淑は訓練されたスナホなことで。たとへ彈訶されてもスナホに受け入れて逆はず。又大乘法の勝れたることを聞きてはウブに受け入れて心からその法を慕ふのを淳淑といふ。かく拆小されても逆はず歎大を聞いて之を慕ふやうになれるは。所謂密成通益の相で、隱約の間に大乘の機が動いて居るのである。

【大意】 鹿苑時に於いて佛は小乘教を與へ、聲聞等はこの教によりて先づ三界に迷ふ煩惱を斷じて羅漢果を得三界の火宅から脫れ出ることが出來た。そこで聲聞等はこの法悅の境に貪着してそれを以て究竟の證とする。佛は更にこの局執を破して更に眞實のものを與へねばならぬ。換言せば小乘の天地より大乘の天地に進出せしめねばならぬ。よつて方等時の說法を第二の方便教として施設し給ふ。聲聞等は昔日の聲聞にあらずして、佛を信ずる心厚ければ、この體信の心に籍つて拆小彈偏し以て歎大褒圓の實を示したまふ。これ方等時の說法の要諦である。この說法によつて聲聞の小機は守小の局執を捨てゝ耻小慕大の心を生ずるに至つた。併し未だ進

低迷の心地

轉教

付財

んで大乘の天地に入るには至らない。足は小乘の地を踏んでたゞ頭だけ大乘の天地を憧憬するに止まる。要するに小乘人の局執の城壁の外濠が破壞されたのみである。眞に憧憬れて眞に入る能はざる低迷の心地にまで進められたのが方等時の所詮である。

四 般若時（漸教その三）

次說般若轉教付財融通淘汰。此諸部般若中不說藏教帶通別二正說圓教。

【文科】 般若時を明す亦四段に分れ。今は初約部の一段也。

【句解】 轉教付財融通淘汰の八字は般若部の經典に特有な大綱を示す語。轉教は轉は轉度で他人へ轉じて手渡しすることで、佛が大乘教を聲聞の弟子に手渡しすることを轉教といひ、又聲聞の弟子たる舍利弗須菩提はこの手渡しされた大乘教を佛に代りて說法するが般若經なり。轉教の言亦此說教の意を兼ね含む、この時は轉教は轉法輪と同意なり。元と聲聞は大乘經を說く器にあらざるも佛の加威によつて般若を轉教する也。かく聲聞をして大乘教を說かしめたまふは佛にいかなる思召があるかといへば、小機の手に大乘教を渡し與へやうとしたまふが爲でそれを付財といふ。付財は譬に就いて言ふ語で長者の財產を窮子に付屬することで、それは小

融通

淘汰

部中の三教の傍正

機に大乘の法財を手渡しすることをいふ。卽ち小機の轉教は佛の意大乘の法財を小機に付屬するにあるから、轉教付財といふ。融通とは隔て目のとれたことで、大小二乘の法門の隔て目がなくなつたこと。方等部では大乘と小乘とは對立的で隔て目がある。よつて小を訶し大を歎じた。然るに般若部では一切法門大小の隔てなくすべて空じ去つて有爲空無爲空畢竟空のたゞ絶對空のみを眞實の法となすが故に、それを融通といふ。淘汰は洗ひおとすことで、人の執我の情をすべて洗ひおとして絶對空を明す故に、融通はやがて淘汰なり。かく小機が佛に代つて大乘教を說いて知らず識らずに小機が大乘の法門に通達するやうになつたのと轉教付財その大乘の法門は絶對空で從來のやうな執我の情によつて大小の隔てのないものであること融通淘汰を明にしたものが般若部の經典である。○此諸部般若中等の下は般若部の素材となれる教を明す。般若はもはや方等の如くに小乘を相手にせずに大乘獨特の法門を開顯するのが趣旨であるから、小乘教卽ち藏教を說かず、通別圓の三教卽大乘教のみを素材として組立てられてある。○諸部般若とは般若部に屬する經典は光讃般若・金剛般若・大品般若等と部類が分れある故に諸部般若といふ。○帶通別二正設圓教とは部中に三教ある中傍正を分てば、通別二教の方便を帶んで正しくは圓教を說くにありといふ也。若し然らば般若部の本領たる小乘を相手にせずに大乘獨特の法門を開顯するの意顯れず。何となれば小乘を相手にせぬ大乘獨特の法門は別教で、

通は傍別圓は正

通教を用ふるは何故か

圓教は小乘人に大乘を開顯する教である。されば般若部の正意圓教にありとはいふべからず。よつて『止觀輔行』十之二六十般若傍用二通教一正用二別圓一加於二乘一密成二別益一とある。但し般若部を說き給ふ佛意の窮極する所は小乘人に大乘法を開顯するにあること勿論なれば正說圓教といふべし。さはいへ、これはたゞ般若部のみに限つたことにあらず。方等鹿苑華嚴すべての教は佛意の窮極は圓教の開顯にあれば、般若部當分の本意を論ずると混同すべからず。著者諦觀師やゝ明かならざる所ありて佛意の窮極に就いてのみ傍正を明せるものか。これは『輔行』によつて補ふべきである。よつて今『輔行』の文意を叙べて置かう。『輔行』によれば通教を傍に帶して正しく別圓二教を說くが般若であるといつて居る。通教はもと大乘の初門で小乘人を相手に大乘の法門を說く教であるからこの部の正意ではない。此の部の本意は大乘の獨特な法門を開顯するにあれば別圓二教を正意とするのである。此ことは龍樹も既に『大論』七十二八に般若に不共般若共般若あることを叙べて居る。不共般若は小乘人を相手にせず大乘人だけに絶對空の法門を說くをいひ、共般若は小乘人にも共に空の法門を明すをいふ。然れば般若には一面小乘人を相手に空を說く共般若あるも、天台は前後の關係より見(法華經による)てこれを部の傍意とし、不共般若を以て部の正意とした。然らば何故傍に通教を用ゐて小乘人を相手とするやといふに就て、次の如く言ふてある。卽ち一は方等の會座に於て橫來して小乘の益を得たる機に

密成別益

はこの通教によりて進んで大乘を知らしめる爲と、今一にはこの般若の會座に於いて初めて佛門に歸した小乘の機にはこの通教によりて空の理を聞かしめ小乘の益を得せしめんが爲の故に通教を說くのである。但し華嚴以來の竪入の機にはもはや通教の要はなく正しく別圓二教によつて大乘特有な法門のいかなるやを明らめしむるのである。般若部正所被の機はこの竪入の機にあること勿論なれば、別圓を說くを部の正意とする。次に『輔行』に密成別益とは、方等の會座に在りて小機は密成通益を得たれば、般若に來りては更に進んで別教の益を隱約の間に得るとなり。大乘教獨特の權威が那邊にあるかを理解するが、小機が此部によつて得る教益である。然るにかく理解するも小機は尙ほ進んで自らその法門中の人とならんとする自覺を發し得ず、依然として足を小乘の地に置いて徒に大乘の天地を讃仰する低迷者の域を脫するを得ない。併しその理知的に別教を解することはやがてそれを我物にせんとする欲求心を喚起せずには居らぬ。この點より隱約の裡に別教の人となり別益を成ずるといふ也。かゝる素地あるによつて法華の會座に到るや一躍して圓教の益を成就し得るのである。

約時則禺中時第四

【文科】第二約時。華嚴の三照に配して般若を第四時とする。

【句解】禺中は巳時卽ち午前十時をいふ。說文に日在巳曰禺中とあり、禺は隅にて東(辰)南(巳)隅のこと。

約味則從生酥出熟酥此從方等之後出摩訶般若四熟酥味

【文科】第三約味。涅槃の五味喩に配して般若を熟酥味とし、方等の次に般若を說かれたことを證す。

【句解】熟酥は生酥を更に精製したものである。方等時にありては漸く耻小慕大せし聲聞等の根機がいよ〳〵熟して、般若時に來りては、大乘の法門に通達するまでになつた故、般若を熟酥味に譬へる也。

信解品云。是時長者有疾自知將死不久語窮子言。我今多有金銀珍寶倉庫盈溢其中多少所應取與此領何義答明方等之後次說般若般若觀惠卽是家業空生身子受敕轉教卽是領知等也。

【文科】第四に約法華經一の一段。

【句解】是時長者等は長者が死期の近けることを豫感して窮子に家の財產及其出納の全部を一任し、窮子に家財並に家業に就いて領知せしめられたと譬喩を以て信解品に四大弟子の領解を述べて居るのが、正しく般若時に就いての領解である。此譬は聲聞の弟子等に般若を代說せ

しめられた佛の本意が全く大乘の法門を限なく領知せしむる爲であることを示すもので、かくて最後にそれらはすべて汝の所有なりと讓與する準備に外ならぬ。○將死不久は死期の近くことをいふ。佛壽は無量にて不死なれども衆生に應同して化益する應身佛の壽は有限にて、化緣盡くる時佛壽も從つて盡くる。般若の會座に來りては化緣の主たる聲聞衆漸く機根調熟して一佛乘を覺る期遠きに非ざることを示して將死不久と喩ふ。○多有金銀珍寶等。金は中道の理・銀は空理を譬へ珍寶は種々の法門を喩ふ。種々の法門は要するに空中二理を顯示し若くは空中二理に入らしむるものなれば金銀珍寶と喩ふ。倉は米倉・庫は道具倉のことなれば倉は百八三昧等の定門・庫は十八空（六根六境六識）等の慧門に喩ふ。種々の法門は若し行學の方より之を分類せば戒定慧の三學に攝り戒を定に攝せば定慧の二なり。定は妄念を止むる止にして、慧は眞實の智慧を觀る觀なり。よつて倉庫盈溢を以て譬ふ。盈溢はみちあふれること。○所應取與は。その時その場の必要に應じて出納をせよの意。取は自行に譬へ與は化他に喩ふ。自行化他を程よく勤めよとなり。前の種々の法門の解學と戒定の行學との二を自ら修する自行と、之を他に修せしむる化他との二つに分れる故取與と譬ふ。○般若觀慧は般若經に明す觀慧のこと。般若經には色心等の八十一科の法門の一々に就いて無常なり無我なり空なり不生不滅なり等と觀することを明す。これが般若の觀慧なり。かく一切の法門を觀じて絕對空慧を生ずるが大乘の

法開會人開會

家業である。前に付財といふは所觀の法門の家財の邊に就いて言ふもの今は能觀の智慧に就いて言ふ故に付業といふ。付財付業全く同じ。○空生は須菩提の譯名。○身子は舍利弗の譯名。諸大弟子中より此二人を選んで特に轉敎するは云何といふに、須菩提は大弟子中解空第一にして舍利弗は智慧第一なり。然るに般若經は空慧を以て入道の主とする故佛はこの二人を選び給ふ。○領知等。領知は大乘の家財家業を領知すること。等の字には融通淘汰を等取す。家財家業を領知し大乘の法門に通達すれば、自ら大小の隔て目を見ざるやうになる。別のことに非れば領知付財のみを擧げて融通淘汰を略するのである。

【大意】般若時にありては、方等時に於いて陶冶されて耻小慕大の心を起せる聲聞衆に、更に進んで大乘獨特の法門に習熟せしめ更に大乘法の深い理解を得しめんとて第四時に般若部を施設したまふ。これが爲に佛は聲聞衆に加被して大乘法を代說せしめ以て大乘の法門に通達せしめ、從來これは大乘の法門これは小乘の法門と隔て目を附けて居つた局情を打破して一切の法門がすべて絕對空の大乘なる大乘敎の奧義に通達することを得しめられた。これは所謂般若の法開會の分際にて未だ人開會をなさず。法の上だけでは大小の隔歷はなくなつたが、人の上ではまだ大小の隔て目をなす。即ち大乘法はかくの如く融通無碍なれども如何せん自らはその大乘法を受け入れてその絕對空の境を證る器でない。然れば聲聞衆は依然として小乘法を受け

羅漢の證果を開くに止まるものだといふ卑屈の見を改めることが出來ぬ。從つてやはり「我は我人は人」の屈執を脱することが出來ない。この人開會は法華經に於いて始めて開顯さるゝ所である。

已上三味、對華嚴、頓教、總名爲漸。

【文科】前來の漸教の所明を總結する語である。

(五) 秘密教と不定教

不定教を立つる根據

化儀四教中頓漸二教を上來に叙べ了つたから次下に第三秘密教第四不定教とを擧げて釋す。この二教具にいへば第三秘密不定教第四顯露不定教にして二教共に不定教である。これに對して前の頓漸二教は顯露定教で大法を聞いて大益を得小法を聞いて小益を得るのである。然るに佛教はすべて佛成道正覺の一念の表現であつて、その一言一句はその正覺の全體が内容として居るものである。よつて此の教は大にして小に非ず、彼の教は小にして大にあらずと計量し限定さるべきものではない。大乘の文字にも小乘をその内容として把持して居り小乘の言説も亦大乘の原理に立つて居るものである。これによつて大乘の文字によつて小益を得小乘の言説によつて大乘の原理を體得することが出來、到底計量し限定すべからざる不可思議の生命を有するが佛教である。これによつて定教の外に不定教を設けて佛教の深義を縱横に示したものである。古來秘密定教を更に設くべきかの論ありて異説紛々たるも、不定教に秘密と顯露との二あれば定教にも亦二を開いて顯露定教に對して秘密定教あるべき道理なれども、化儀四教の外に一教として開かざるは二の不定教を顯露定教に對して明せば、そこに定教に卽して不定教の義詮顯し了るを以て其要なきが爲である。

秘密定教の論

二教の同異

秘密不定二教に三同一異あり。左の如し。

同
- 1 佛の不可思議力による。
- 2 同聽異聞得益不同。
- 3 別の部帙なく前四時に通ず。

異——互不相知(秘密)互相知(不定)。

三同は不定教の條件なれば二教に通じ、一異は顯露と秘密の異を顯すものである。この解説は本文の下に於いて出づ。

第三秘密教者。如前四時中如來三輪不思議故。或爲此人說。頓或爲彼人說漸。彼此互不相知。能令得益。故言秘密教。

【文科】化儀四教中自下は第三秘密教を明す。

【句解】秘密教は不定にして而も秘密なる化儀をいふ。秘密も眞言秘密とは同じからずたゞ

化儀の上の秘密にて。同じ説法の會座に列りながら、列衆の相互が一緒に在りて聞法することを知らず、從つて他の列衆が如何なる法を聞けるやも知らず、列衆の人も聞法の法も人法共に相互の間に秘せられて知られざるを秘密といふ。○前四時。この秘密教ば頓漸二教と異りこれが秘密教であると指す別の部帙があるに非ず。前四時の頓漸二教が、ある種の列衆の爲には互に秘せられ而も同聽異聞せしめ給ふ時、前四時の教はこれらの列衆にとつては秘密教と呼ばるゝのであつて別座別會の説教ではない。故に前四時中とあり。次の不定教も亦同じ。○如來は釋迦如來。○三輪不思議とは佛の身口意の三業は常識で計量することの出來ないものであることを顯す。三輪とは神通輪(身業)正教輪(口業)記心輪(意業)で、この三業の神力によつて衆生の煩惱を摧破する故に輪といふ。○或爲此人説頓等は同聽異聞せしむることをいふ。此人(甲)と彼人(乙)とは佛の一音の説を聞きながら、甲には頓と聞へ乙には漸と聞へて同聽異聞せしむるは、佛の一音に頓漸を並べ説けるが爲である。これが佛の三輪不思議力によるものである。それは魔術者の不思議ではなく、佛界に於ける自然の法則である。その大自然の法則が人間界にはたゞ不思議と信せしめらるゝのみである。○彼此不相知は秘密教の特有な點で同聽異聞せる彼此甲乙が人法共に相知らざるをいふ。もし同聽異聞したことを彼此甲乙が相知り合つた場合は不定教と呼ばれる。○能令得益は彼此甲乙は同聽の上に異聞する故得益はそれ〴〵不同ではあるが、いづれも最善の利益を得ることをいふ。此下の所明は次の不定教を明す下と影略互顯してある故次の所明と對映して解すべし。卽ち得益不同のことは不定教の下に讓りてこの下には略してたゞ最善の得益あることを叙ぶ。又同聽異聞を明すにも、次下に一音演説法の同聽を出し、今この下ではその一音の説の上に異聞すべき頓漸兩意を含むことを示す。卽ちこの下では異聞を能説者たる佛の上に於いて説き、次には異聞を能聞者たる聽者の上に於いて談す。兩教の所明を對映すればいよ〴〵其意が明になる。

第四不定教者。亦由前四味中。佛以一音演説法。衆生隨類各得解。此則如來不思議力。能令衆生於漸説中得頓益。於頓説中得漸益。如是得益不同。故言不定教也。

【文科】化儀四教中第　不定教を明す一段。

【句解】佛以一音演説法等の用語は『維摩經』佛國品に出づ。今はこれを以て不定教の同聽異聞の義を明す。但しこの語では同一の説教によつて異なれる解を得ることは顯はれるも、その異聞の功は聽者にあるが如くにも解せらる。よつて次に此則如來不思議力なりとて異聞せしむるは説者の功に歸してある。これによつて不定教の意義卽ち不定は佛教の上にあることを知る

べきである。このことは次上の秘密教を明す下に或爲二此人一說、頓或爲二彼人一說、漸の言を加へて解すればいよ〳〵明になる。卽ち一音の中に頓漸を含めて同時に兩說したまふ故に、これを聽く衆生は類に隨つて大小頓漸を異聞し各得解する。○於漸說中得頓益等は得益不同を明す。漸說中頓說中とは定教の頓漸二教のことを指す。漸說の小乘教の會座にありながら大乘(頓)の益を得、頓說の大乘教を聞きても漸小の益を得るものもあるが得益不同の相なり。この得益不同は果異聞はその因にして異聞するところ得益不同なり。

然秘密不定二教。教下義理只是藏通別圓。

【文科】秘密不定二教を雙べ結ぶ一段。○秘密不定二教は共に教の不定を示す一具のものなれば雙べ結ぶ也。

【句解】教下義理とは二教の下で用ふる所の教義教理のこと。秘密不定は化儀の名であつていはゞ形式である。その形式を內容づける教理がなくてはならぬ。この教理は二教の本質をなすものでいはゞ教體である。それは藏通別圓の四教である。何となれば前に出づる如くこれら二教は別に部帙があるではなく前四時に依存するものであるから、前四時の內容となり本質となつて居る化法四教が頓て秘密不定二經の內容であり本質でなければならぬ。

化儀四教齊此。

【文科】上來化儀四教明し了るを以て之を總結する語。

八教は立體的

化儀に還元する場合

【句解】齊此とはこゝまで限りであると打ち切る語。その語の裏には第五法華時は化儀四教の外であるといふことを含めてある。よつてすぐ次に次說法華等とある。この第五時法華を非頓非漸非秘密非不定とし更に法華に明す圓教を爾前四時の圓教と區別して開顯圓とし、法華を超八醍醐の教とすることは古來一箇の論題として研究せらるゝ所である。何となれば法華超八を談ずれば勢八教の外に更に超八教の一教を設けて九教とせねばならぬ。若し八教に一切教を攝すといはゞ法華は亦八教中のいづれかに屬せねばならぬ。これ明に矛盾である。この矛盾をいかに解決すべきか。今略してこの論の大要を叙べやう。

【餘說】法華超八の論。法華を何故に超八とするかといふことを知る前に、八教とはいかなるものなりやを知るべきである。言ふまでもなく、八教は一切教を平面的に八分するものではなく、化儀と化法の二類に分れた立體的のものである。卽ち化儀の四教をいふ時には化法の四教を內容としてその中に籠つて居るものである。藥味のない處方箋はあるべき筈がない。又化法の四教を擧ぐる時は化儀の四教をその形式として必ず供ふべきである。調劑せざる藥味は病を治するの用をなさぬ。されば化儀と化法とは不可離にして而も立體的關係に於いて存するものである。併し化儀に還元するか化法に還元するか、形式に就いて一切教を見るか、內容に就いて一代教を見るかによつてその間自ら色彩を異にすべきである。先づ化儀四教に

化法に還元する場合

還元する場合に就て考へやう。大體佛が化儀に就いて心を碎き給ふは衆生の根機未熟にして所證を打出して說くことが出來ぬが爲である。若し根機調熟して其の所證を受け入れるに宜しければ化儀の要自らなくなる筈である。調劑は病あるが爲で病治すれば處方箋は反古である。法華經は舍利弗以下の諸大弟子を對告衆としての說法であるが、爾前四時の調機の說と異りて、佛はその所證たる妙法を開顯する爲にはなくてはならぬ佛子としての諸弟子を對告衆とせられたものである。寧ろ佛と佛子卽父子の對座そのことが妙法の開顯である。この場面を得んが爲にもろ〳〵の敎が說かれ化儀が設けられた。されば法華經の說法は化儀四敎を以て律すべきではない。法華經の爲に化儀の四敎があるのである。よつて化儀四敎は前四時に限りて法華は非頓非漸非秘密非不定の超八醍醐といはねばならぬ。この場合に化法四敎は化儀四敎の內容として攝められた八敎である。

次に化法四敎に還元する場合に就いて考へん。化法四敎に還元する時そこに前四時と法華との別を見るべきではない。例せば圓敎はたとへ華嚴に說けるものも方等般若に明せるものも法華に開顯せる圓敎と別があるべきではない。天台が今圓法華昔圓華嚴圓體無殊といふて居るのはこれである。藏通別の三敎に就いてもそれが何部の經に說いてあるからといふて別體がある筈がない。然れば化法四敎に還元する時は全く前四時と第五時との別を見ずに、たゞ敎理の內容云何の別あるのみである。さればこゝには法華超八といふことも問題とはならぬ。併しこゝに五時の別を見ないといふことは、化儀四敎を無視するといふことではない。形式に據らない內容はあり得ないから、たゞ五時を逐ふて一代の說法を垂れたまへる佛敎が、いかなる內容をもつて居るかを說いたものである。そしてその一代敎に說かれてある內容は要するにそれを說いた釋尊その人の所證に外ならぬ。釋尊の所證は敎宗にありては佛敎にその全體が現はされてあるのであつて、禪宗のやうに敎外に別傳すべき所證はない。よつて化法の四敎は釋尊菩提樹下の所證を表現したものに外ならない。尤も其の中の藏通別の三敎は權敎であつて圓敎に於いて其所證の眞髓を打ち出されてあるが、その權敎はやはりその圓敎と相待ちて佛の所證を顯彰するものであつて、たゞ圓敎だけでは佛の全面を知ることは出來ない。眞髓の圓敎を打ち出す爲には權を切り離すわけには行かない。法華經に方便を說いて眞實を顯すのはこれが爲である。かく化法四敎が佛の所證の全體であるが故に調機人實の爲にこれらの四敎を自由に採用して五時の一代敎が展開されたのである。併し一代敎が四敎の展開であることを打出して說いたものは、一代敎中たゞ法華經のみである。化法の四敎は純圓獨妙の圓敎のみを明す法華經によつて初めて知らるゝことである。圓敎が知らるゝと同時に權三敎が知られるのである。權は決して實と離れて單獨に知られぬばかりでなく、あり得な

四敎は佛の表現

いのである。よつて權教は法華以前に於いて說かれたものであるがそれを權教として知らしめるのは法華の圓教の開顯を待つて初めて知らるゝので、爾前四時にありては權三教が知られ法華に至りて圓教だけが知らるゝのではなく、法華に至りて圓教が開顯せらるゝと同時に權教も亦權教として知らるゝ。よつて化法四教を五時に配して華嚴に既に圓教が說かれてあるではないか、法華はその同じ圓教を單獨に說いたばかりであると論ずるならばそれは未だ眞を得たものとはいへぬ。華嚴に既に圓教が說かれてありそれは法華の圓教と別なものではないが、それをさう知らしむるものは法華であり、法華に來らざればわからないことであるから、單に化法四教の立場から華嚴と法華とを同一の位置に置くのは謬である。化法四教に還元した場合はどこまでも法華經中に入つて一切經を見るのであるから、華嚴の法華と經典の個別的意義を論ずべきではない。法華の圓教を開顯圓とし法華以前のそれを未開顯圓として區別するのは、既に五時の別を見たる化儀四教を主としたる所謂約部の論である。その場合にありては法華已前にありては圓教はあるも權教に覆はれた圓のみで未だ圓教の眞相は顯はされない。圓教の顯はされたのは法華經に於いて初めてゞある。よつてこの意を顯すのが開顯圓未開顯圓の語である。然れば化法四教に還元する場合にありても法華超八といふことは決して矛盾するものではなく、いよ〳〵その意義を明にするものであるが、正しく法華超八を談ずるのは、爾前四時と法華とを相待して論ずる化儀に還元する邊の沙汰である。然らば超八の一教を八教の外に立つる要なきかといふに、然らず何となれば法華は說教である點から特種の化儀によれることは勿論なるも、それは化儀を離れた化儀であつて、調機入實の化儀中に數ふべきではない。よつて第九教ならざる非頓非漸非秘密非不定を以て法華經の特種の位置を顯すのである。

(六) 法華涅槃時

(1) 法華經

次說法華。開前頓漸。會入非頓非漸。故言開權顯實。又言廢權立實。又言會三歸一。

【文科】 第五法華涅槃時を明すに二、初に法華次に涅槃なり。初明法華の一段の科段を略示せば左の如し。

- 明法華 四
  - 初、約部 二
    - 初、總示一經部旨……次說法華
    - 二、別對昔顯今 二
      - 初、總標今昔不同……言權實者
      - 二、別明 二

- 初、明二昔時權實相隔一二
  - 初、總標……謂法華已
  - 二、別明二
    - 初、就二頓教一釋二相隔一……如華嚴時
    - 二、就二漸教一例示……次鹿苑但
- 二、明二今日權實相即一三
  - 初、正明……來至法華
  - 二、引證……故文云十
  - 三、因通二時人謗難一……時人未得
- 二、約レ時……約時則日
- 三、約レ味……約味則從
- 四、約二信解品一……信解品云

今この一段は最初に約レ部(法華經の經說によつて一經の本旨なつきとめるといふ)中先づ一經の部旨が總示す。

【句解】 次說法華は頓漸四時の說法の次に第五時の法華經を說くとなり。文の上では秘密不定を明し了つてすぐ次說法華とあれば不定教の次に法華を說くやうに聞ゆれども、秘密不定は前四時の說法の望め方で立てた教で別に部帙があるわけでないから。次說とありて前の般若時の次に法華を說くことゝなる。○開前頓漸會入非頓非漸は法華經が超八醍醐の妙典なることを釋す。卽ち前の調機方便の爲に施設した頓漸(秘密不定をも含む)二教を捨てゝ、調機方便ならざる非頓非漸(非秘密非不定を含む)の教を說いて、佛の眞實を打ち出し、一切の衆生を悉く佛の智慧海に攝め入れしめたまふた。非頓非漸は頓漸の化儀の世話の入らぬことで、その世話の入らぬやうになつた所に、佛は思ふまゝに佛知見を打ち出したまふのである。それが法華一部に明す本領本旨たる一乘の妙法である。よつて開前頓漸會入非頓非漸の句は一經の部旨を示す語である。然らば一經の部旨を顯すになせ非頓非漸といふやうな消極的な言い顯し方をせずに直ちに一乘の妙法を開顯すると言はなんだかといふに、これは文章の聯絡上、先づ法華經が化儀の四教の外に超出した經王であることを示す爲に非頓非漸といひ、次にその經王といはるゝ所はどこにあるかといふことを示して開權顯實乃至會三歸一といふたものである。○開權顯實等は正しく一經の部旨を明す。權實は方便と眞實なり。(權實の解說は次下に詳述)。この權實の名によつて顯すものからは一にあらず、十界に約して九權一實といひ、理に約して空を權理といひ中道を實理とし、智に約して權智實智といひ、又本迹に約して迹門を權といふに對して本門を實といふ如く一樣にあらず。今は主として部に約して前四時教をすべて權といひ第五時を實といふ。前四時教中には圓教の實を說けるもやはり調機の爲の說なればすべて權とし、佛の眞實を明す法華を實とす。開の字は蓋をあけることで、今まで蓋を閉ぢてあつた爲め權實の何ものであるかゞわからなかつた。(それ故に權をさして實と誤つて居つた)今其の蓋を取つて

開と廢

權を權とし實を實と知らしめたが法華であるといふので開權顯實といふ。次に廢の字はすてゝ了ふことで、今までの調機方便の教を捨てゝ了つて顧みないを廢權といひ、新しく佛の眞實のみを推し立てるを立實といふ。この開と廢とを用ゐるに天台疏中に二途あるが如し。卽ち開權顯實を以て相待妙を顯し廢權立實を以て絶待妙を顯す。卽ち蓋を明けて方便と眞實とが併んであるのが開であるから開は前四時の權に對待して第五時は實とする相待妙を顯す。それに對して廢は方便の影を捨てゝ眞實ばかりになつた所ゆへ絶待妙を顯す言に用ふ。蓮華の喩を以て妙法を釋する下の如きは此釋を用ふ。卽ち華が開いた時に同時に蓮實が併んで現はれたが開權立實で、華が落ちて蓮實のみになつたが廢權立實であるといふてある。然るに又餘處には反對に廢を以て相待妙を開を以で絶待妙を顯す。これ廢立といふ時は法華を以てたゞ眞實のみとするもので、これに對して所廢の前四時を裏に考へて居るからして廢立が却つて相待妙を顯す語となり、權實を法華の上に併べて見るのは一代教は前四時の權までを法華一乘の開顯と見るのであるから絶待妙を顯す語とするのである。開麁顯妙など言へるはこの開を絶待妙を顯す語とする一例である。かく開と廢とを自由に相待絶待の二妙を顯す用語とし給ふは要するに相待絶待二妙は別のことにあらずして一妙法を顯す二面であるからだ。卽ち今まで握つて居つた僞物を棄てなければ眞物を握むことは出來ない(相待妙)。その眞物を握んだためしにはやることなすこと

相待妙絶待妙

會三歸一

がすべて眞物の色を帶ばねば嘘である。(絶待妙)而してこの二つは眞を握んだ一念同時に開顯さるゝ境界でそれが妙法の名によつて顯さるゝ佛境界である。又それが法華經の本領である。○會三歸一は前の開廢權實を他の語で顯したもの、三一は三乘と一乘で、聲聞緣覺菩薩の三人が別々の教によつて別々の道を行くといふ教が三乘で、三人がすべて一佛乘の教によつて同一の涅槃に到ると說くが一乘である。三乘教は前四時の權教であり一乘教は法華の實教である。もと三乘といふは藏教卽ち小乘教のことであるが、法華經では前四時の教はすべて正しく小乘の機に對して說かれたものとする故、それを基調として前四時教を見る時は前四時教がすべて三乘教となる。卽ち華嚴や般若のやうな純大乘を說く教でも小乘の人達に取つてはそれを調機入實の教として頂戴する故すべてが三乘(小機)の教である。又小機にとつてはたゞ三乘教のみが涅槃の道である。よつて法華已前は三乘教に外ならぬことゝなる。それに對して法華では三乘別々の道があるではなく一切衆生がすべて佛子にして成佛の機であること卽一乘道を開顯したものである。會は會入で流れこむこと。三乘の川が流れこんでそれが一乘の海となつたといふことで會三歸一といふ。然れば會三歸一は待絶二妙の中絶待妙を顯す語である。何となれば三乘の川の水をすてゝ一乘の海になる(相待妙)のではなく、三乘の川の水がそのまゝ一乘の海水となるのであるから。されどもその語の裏には一乘の海に歸した所ではもはや川水の見るべきもの

なく、川の水をすてたればこそ海水となつたのであるから相待妙の意を含んで居る。即ち會は相待妙を離れぬ絶待妙を顯す語なりといふべきである。以上、開廢會の三句を以て法華經の部旨を顯し了る。

言權實者名通今昔義意不同。

【文科】 約部の中、これより以下は今(法華)と昔(前四時)とを併べ昔に對して今の部旨を明にする。其中先づ初に總じて今昔不同なりと標する一段。

【句解】 言權實者等。上の開權顯實廢權立實の語を承けその權實の意義を明にせんが爲に以下の今昔對望の釋が出る。それ故に先づ言權實者と上の言を牒し來るのである。○名通今昔とは法華經に於いては前四時の昔教をすべて權とし、今日の說教を實とすること前の如し。然るに昔教に於いても既に大小偏圓の別を認め大圓を實とし小偏を權となせば、權實の名は今昔に通ずといふ。○義意不同。然らばその昔教にいふ所の權實と法華にいふ所の權實とどう違ふかといふに義と意の二點に不同があるとなり。義とは義理、權實といはるゝわけがらのこと。即ち昔教で權實といふのは、所說の法の上の別であり、法華の權實は能說の化意の上に就いていふのである。例へば四諦教がある。それは昔に於ても偏權の教であり今に於いても亦然りである。所が昔に於いて之を偏權の教といふのはそれが佛果に至ることが出來ずたゞ羅漢果を得る

義の不同

意の不同

教であるからである。即ち權といふわけがらは、その所說の法の云何によつて決定される。然るに法華にても同じく偏權の教といふがわけがらは同じではない。即ちそれは佛の調機誘引して一佛乘に入らしめたいといふ爲の說法であつて、まだ一佛乘そのまゝを說きあらはされないから偏權の教と名くる。即ち打ち割つて見れば佛の化意の上に調機誘引の權智と佛のものをすつかり衆生に惠むの實智があるから權實二教が說かれた。既に說かれた權實二教には自ら差別がある。その差別の法だけを見てそれに權實の名を與へるのが前四時であり、更にその教の內面から觀察して權實の名を與へるが法華である。以上義の不同である。かく義の不同があるからして自ら意の不同が別れる。意とは意趣でその教の目的をいふ。昔教は權は權だけで止り實は實だけで止まるもので相互の間に何等の交涉もない。意趣目的を論せんとしたならば權教は權教の中で論じ實教は實教の中で談ずるより外はない。これ昔教にありては權實は所說の法の上の別であるから、それ〴〵獨立したものであるからだ。然るに法華に於いては能說の化意の別であるから、權實は別體があるのではない。一佛の上の二智二教である。されば權教の目的とする所は權教に止るのではなくて實教に進む爲の權教である。亦實教は實教に止るのではなくて權教を出すべき實教である。これによつて法華の權實は權實相卽であり亦同體の權實と呼ばるゝ。昔教の權實は權實相隔であり亦別體の權實といふ。よつてその今昔の別を述べたの

が次の一段である。

謂法華已前權實不同大小相隔

【文科】以下昔教の權實を叙ぶる中初總標である。

【句解】權實不同は法華以前にありて權實は所説の法に就いての別であるからいつまでも不同である。○大小相隔は大小は大乘教小乘教とも解せられぬことはないが、こゝではやはり大機と小機とのこと。次の文に大不納小故小雖在座如聾如啞と大小を機に取り切つてある。それのみならず。たゞ教法の上の不同といふことだけでは法華と爾前との別が充分に顯はれない。なぜなれば、所説の法だけならば法華に來つても阿含經の所説にすぐと圓教と早變りもせず、反對に法華已前の圓教だからといつて一乘法を明してないのではない。もし教の上だけならば今昔の別を判ずるわけには行かない。そこに教を受ける機を考へる所に今昔の別が立つ。即ち法華以前にありては機の執情があるから、所説の法だけを見て得手勝手に此が圓教である彼が藏教であると教文の皮相だけを握んで區別をして、その所説の法の上に潜んである能説の佛意を見ることが出來ないから、權實二教がどこまでも不同になる。たとへ一乘法を明してある圓教はあつてもこれが大乘法であると片附けて了つて、教の眞意が少しも顯れない。然れば教の不同といふ昔教の特長は機情の相隔といふことを基調とせねば成立たぬ。よつて權實不同大

權實不同
大小相隔

華嚴の相隔と法華の相融

小相隔は教の不同と機の相隔とを出して昔教の權實の意義を叙べたものである。大小相隔は大機が小機を隔てる即ち大乘の人々が小乘の人々を二乘種不生と蔑むことゝ。小機が大機を隔てとても根敗のものが大乘の人々と一緒に成佛の道を修することは出來ぬと自屈すると、雙方より隔てる故に相隔といふ。併し爾前四時説教の本來の目的より論すれば、小機が大機を隔てゝ自屈する機情を調熟するにあれば小が大を隔つるが主である。

如華嚴時一權一實（圓實別權）各不相卽大不納小故小雖在座如聾若瘂。是故所説法門雖廣大圓滿攝機不盡不暢如來出世本懷所以者何。初頓部有一麤（別教）一妙（圓教）一妙則與法華無二無別。若是一麤須待法華開會廢了方始稱妙。

【文科】これより別して爾前四時の權實を明す中、初に華嚴時に就いて權實相隔の旨を詳説す。

【句解】一權一實等は權實不同の旨を華嚴時に就いて叙ぶ。各不相卽は別圓二教が互に相隔てるをいふ。勿論圓教は圓融無碍の法門を説いてあれども、それは佛果を得たものゝ境界として、やはり因位の菩薩は別教の所説のやうに四十一位の修行の力によりて佛果を得るものとして考へて居る。それ故に圓教は別教を隔てゝ居る。それが法華に來ると別圓二教が共に一の能

説の佛意より流れ出たもので相隔てるものではない。卽ち別敎の行者の修行の力で漸次に佛果を得ることは、功利的な心の離れ難い未熟の機を愍み給ふ佛の權智の表現であつて、佛果を得る道はさういふ自力修行の積功によるのではない。その未熟の機を棄つることの出來ない佛智を、自分の上に見出すことのみによつて佛果に登るのである。卽ち圓敎のみが眞實の道であつて別敎はたゞ圓實の佛智を知らしむる爲の權敎であると明に知られるからして、圓敎は別敎を隔てず、然も法華は純圓獨妙の說法である。これが同じ圓敎を說くのではあるが華嚴と法華に於いてその旨趣を異にして居る。恰も一つの富士山ではあるが寶永山と並んだ一山と見るのと寶永山は富士山中の一つの瘤に過ぎないと見ると分れるやうなものである。○大不納小等は大小相隔を釋する語で、華嚴經では大乘の機は大聲は俚耳に入らずと高くとまつて小機を寄せつけない。そこで小機はたとへ座にあるも如聾如啞にして聞くを得ず、大乘敎は却つて魔の所說と思ひ誤つて寄りつかない。○是故所說法門等は華嚴經が出世本懷の經にあらず法華經に望むれば全體が權敎といはるゝ所以を釋す。その理由としてやはり前を承けて隔二小機一故と隔二別敎一故の二故を擧げてある。攝機不盡は隔小機故を叙べ、初頓部有一蠡一妙云々といふてある下は隔別敎故を叙べたものである。○雖廣大圓滿は華嚴には別敎を兼ねて說けど正しくは圓敎を說く經なる故に廣大圓滿云々といふ。○不暢如來出世本懷は如來は釋迦如來にて、釋迦の此世に出現し給ふは自己一人が證りを得んが爲ではなく一切衆生と共に樂しむ一佛乘の同信の世界を建設せんが爲であつた。それ故その理想が實現せられずして小機は其の世界に入ることが出來ず、大乘の機にも亦別敎に止りて斷惑證理せんとするものを許す華嚴經は釋迦の本懷を全現したものではない。○所以者何は文章の連聯の爲にそれはどうしたわけかと徵起した言である。何を徵起したかといへば「出世本懷を暢べ給はず」といふ前の句なり。既にこの句は前の攝機不盡を結んだ句であるが、それを更に徵起して第二の隔別敎故の理由を叙べるのである。○一蠡一妙とは一權一實のこと。權を貶しめて蠡といひ實を褒めて妙といふ。○一妙則與法華無二無別は華嚴の圓敎も法華の圓敎も同一であるとのこと。然らば華嚴も亦出世本懷の經といふべきでないかといふに華嚴では圓敎はそれに對立した別敎を兼ね說いて居るから法華の純圓獨妙の圓敎とは同一にならぬのである。○一蠡須待法華開會廢等は別敎が法華の開會によつて妙となるといふと。別敎が妙となるといふのは、別敎がすぐ圓敎に早變をするやうに聞えるが、これはかういふ意味である。卽ち別敎は方便の敎である所の眞相が發き出され圓敎に對して獨立の存在を持つて居らぬとが明になつてたゞ圓敎のみが眞實の道であると知られる。そして圓敎の外何者もそれと對立した存在の意義を持つて居るものはない。圓敎は絕對の存在であるからして、從來同じ位置に置かれて來た藏通別の三敎はその圓敎の一階梯であり、圓敎の一部分とし

別敎も亦妙となる

廢立と開會

てその存在の意義を確保されるやうになつたのが法華である。それで別教が法華で始めて妙の名で呼ばれるといふたものである。この意味で別教のみならず藏通二教も亦妙の名を得るのである。更にその意義を他の語で明にするならば、華嚴經にあつては成佛道が一は圓教二は別教の二筋であつた。法華經では成佛道はたゞ圓教の一筋となつた。成る程別教は所說の上では成佛の道を明して居る。然しそれは佛の化意によつて見るとたゞ調機の方便の爲に說いたもので、その別教の所說の通りでは成佛は出來ない。それは鈍根の菩薩の機を調へて成佛道に入らしむる爲に暫く設けられた方便教であると。法華には別教能說の佛意を明にして別教の眞相を發き顯したからして、別教は成佛道ではなく圓教のみが成佛の一道となつたのである。しかしそれは別教を廢てたのであつて別教を妙とするものではない。別教が妙として開會せられるのはその廢立の上に立つのである。廢立なき開會は單なる哲學である。廢立の上に立つ開會は宗教である。それを混同してはならぬ。別教を廢てた處に別教が生きるのである。二つの成佛道を考へる機情が破れて初めて唯一絕對の成佛道が開け來る。そこにはすべてが成佛道であつて、教といふ教はすべてが斯道の爲に說かれ行といふ行のすべてがこの佛道の爲に修せられるのである。卽ち佛の設けたまふ教たる別教そのものは（所說の法そのもので、機情が一種の成佛道として執ずる別教ではない）圓實の爲であるばかりでなく、それは圓實の妙法の一部分としてそ

藏通も圓教の階梯

の存在の意義を保持して居るのである。圓實の妙法は別教等の權教を攝め入れる所に妙法の妙法たる所が顯れ、權を切り捨てた單なる實は妙法ではない。

次鹿苑但麤無妙。藏教 次方等三麤藏通別 一妙圓教 次般若二麤通別 一妙圓教

【文科】前に華嚴頓教に就いて權實相隔を解說し終れるを以て、こゝでは漸教の三時を簡單に例示する也。

【句解】次鹿苑等。この下文は解すべし。前の華嚴の下で詳しく權實不同の旨を說いたから、こゝでは簡單に例示したに過ぎぬ、たゞ部中の教の名を擧げてあるだけであるが、この部中の教をたゞ所說の法の別としてそれ〴〵獨立した教として考へるからして、空理を證るにも藏通二教の二筋ありと思ひ、中道を證りて佛に成るにも別圓二教の二筋ありと思ふて居る。そればかりでなく機情の上より三藏の小機はいかに大乘教の勝れたる法門に通達してもやはり自分は根機拙き爲に藏教によつて灰身滅智し、大機は根機利なる爲に大乘教によつて佛果を得ると執じて大小相隔す。この教を隔て機を隔つる上より權實を實質的差別とするが爾前にして、華嚴も漸三時も同じようである。そして法華へ來るとたゞ成佛道は唯一絕對であると示されたから、空涅槃を究竟として居る藏通二教も亦調機方便にして衆生を一佛乘に入らしめんための圓教の階梯である旨が明になる。又三藏の小機は自屈の執情をすてゝ我れ亦成佛の器なりと自覺して一切衆生同信の世界に入り、大小善惡の隔てがなくなり權教亦圓實中のものとなることは前に

例して知り易きことでもあり、又次に法華の權實相卽を明す下で說かねばならぬことであるから今はこれを略したものである。

來至法華會上總開會廢前四味麤令成一乘妙諸味圓教更不須開本自圓融不待開也但是部內兼但對帶故不及法華淳一無雜獨得妙名良有所以也。

【文科】これより以下は法華の權實相卽を明す中、初に相卽の大要を述べる一段。

【句解】來至法華等の下法華の權實を明すに就いて二義に約す。初に總開會等は教に約して前三教と圓教との權實相卽を明し。次に但是部內等の下は部に約して前四時と法華との麁妙を明し、權實相卽は法華獨特の妙談なる旨を述べてある。○開會廢前四味麁等。開會廢は前に釋する如く相待妙（權實決判）絕待妙（權實開會）二妙の意をいふ。前四味麁は藏通別の三教のこと。一乘妙は圓教のこと。別教を開會して妙となると前の如し。藏通も亦法華に來つてその教能說の化意が發き出されて、三界に執着し切つて居る根機を調へて心を界外の法界に遊ばしむる樣にと設けられたる權教であつて、これのみではいかなる小機も究竟の解脫を得るものでもなく又得しめやうとするものでもない。究竟の解脫は一佛乘の圓教のみであると明にせられたからして、藏通

兼但對帶

二教はいかなる意味に於いても從來のやうな獨立した解脫の法としての存在の意義を失ひ、その代りに一佛乘道の一階梯としての權教であり、それは佛化道の意の開展に外ならぬから、藏通二教も圓教と別なものでなく妙法と呼ばれ、圓教の中に藏通二教が存在の意義を持つて居ることが明かにせられたのである。○諸味圓教更不須開等は前四時の部中に說ける圓教はそれが華嚴であらうと方等般若であらうと、所說の法の上に明らさまに能說の佛意の實を打出して說かれたものであるからそのまゝ妙であつて別に開會する要はないといふと。それに反して前三教は然らず能說の佛意は所說の法だけでは明でない。よつて法華を待つて開會せらるゝ。かく法華に來るとたゞ純圓獨妙となつてそれに對立する偏權の三教は開會され了つて純圓獨妙の屬性となるからして權實相卽するのである。これ爾前の權實相隔と異る所である。○部內兼但對帶等。兼は華嚴の圓に一別を兼ぬること。但は鹿苑がたゞ藏教だけのこと。對は方等の四教對說をいひ帶は般若が通を帶して別圓を說くことをいふ。卽ち兼但對帶は前四時の各部の部意を標する語である。前四時が說かれたのは一部一經にそれ〴〵の意義があることは頓漸別說の下に明した通りである。例へば華嚴經は別教と圓教とが合說されて居るが、それは無意義に二教を說かれたのではない。又方等般若にも同じく別圓が說かれてある。それらの二教は教に別はないが、これを用ゐ說かれる佛の意思目的は決して一つではない。それ故にたゞ教に約してどの經

には何々の教が用ゐてあるといふ事がわかつただけで、それぞれの經の綜合的意義目的が判らなければその經の全體がわかつたとはいへぬ。それで各部に分れて居る四時教の一經一經の特長はその經を分析して部中にいかなる教を用ゐてあるかを知ると同時に、いかなる目的でそれらの教が但說若しくは合說されたかといふ綜合的研究が肝要である。その綜合的の目的意義を記號的含蓄的に表示するのが兼但對帶の四字である。卽ち兼の字には華嚴經の部意卽ち小機に法の尊嚴を知らせんとする擬宜の部意を顯す。別教は四十二位の修行によつて初めて成佛することを說き圓教はその佛果の融通を說く。この圓教に更に別教を兼說する所に華嚴の綜合的意義(部意)を顯す。鹿苑ではホンノ三界の苦を脫れしむだけが部意である。それを但の字で表す。方等は大小對立の上に大の勝れたることを顯すが部意であるから對字で示す。般若は小機に大乘法を領知せしむるが目的であるから通教(空)を帶んで別圓(中)を說くのである。斯の如く部に約して綜合的に經を見る時は、先に教に約して分析的に經を見た時とは趣を異にして、經全體が調機方便であることが知らるゝ、卽ち一經一經の中には圓教も說かれてあるが、それは圓教そのものを說くが目的ではなくして、それによつて機を調熟せんとするにあるから、圓教まで方便となるのである。それに對してたゞ法華一經には佛の說かんとするものをありのまゝに說かれたからして純一無雜の圓教のみを開顯されたのである。これ經典をどこまでもたゞ言

說の文相によつて讀まずに、經典の內面に含まれてある能說の佛意によつて讀まんとする天台の當然の結論である。こゝに問題となるは前には約教の邊では今圓昔圓圓體無殊で圓教だけは眞實として許したものを、今は約部の邊でその昔圓までも未開顯の圓とし方便として許さぬのはどうしたものかといふ事である。これを天台家では約教別與と約部通奪といふて居る。別與は圓教だけに別して眞實の名を與へるの意、通奪は圓教も亦餘三教と同じく通じて奪ひ方便なりとするの意である。このことは前に法華超八の論(七五頁參照)の下で論じて置いた通りに、圓教がその全豹を表すのは法華が說かれて初めてゝある。卽ち聲聞の弟子に一切皆成佛の自覺の出來たのは法華に於ける功績である。そこに圓教が全豹を表したのである。勿論爾前の圓教も亦既に一切衆生の皆成佛を談じて居る。併しそれは大乘の菩薩達の理想に過ぎなくて、實際には聲聞はやはり佛種を闕けるものとして成佛を許されなかつた。それは圓教の趣旨が眞に徹底して開說されなかつたからである。卽ち圓教は爾前に說かれないではないが餘の三教に包まれて說かれたからして其全豹を說いてない。その陰影をとつて徹底的に圓教の趣旨を開說したのが法華である。この趣旨を明にするものが約部通奪である。然るにその二乘種不生といふことを許すことは、爾前に於いて圓教としての教がさういふことを教へるのではなくて他の偏權の教を併べ說いてある所卽ち部の全體の調子から來るのであるからして、それを切り離してたゞ圓教だ

法華四一

教一

けの所説を見たならば、そこには既に法華で現實されたと變らぬ趣旨が説かれてあつて決して今に始まつたことではない。それは佛成道の一念に獲得したまふ所である。それがどうして四十餘年もかくして説かずに置けやう。これを顯すものが約教別與の邊である。○法華淳一無雜は爾前四時の兼但對帶に對して法華は純一なりと顯はす。淳一は純一でまじりけのないこと、たゞ其の所説が一乘法の圓教のみなるをいふ。○獨得妙名は妙法蓮華經の名はこの經獨特であるをいふ。

故文云。十方佛土中唯有一乘法無二亦無三教一正直捨方便
但説無上道一行但爲菩薩不爲小乘人一世間相常住理一

【文科】此の下法華四一の文を引きて前の法華のみ權實相卽して妙なる旨を證す。

【句釋】故文云等の下法華經四一の文を摘示して法華が一乘妙法を明し權實相卽する旨を引證する。○十方佛土中等。この文は法華經方便品科註一ノ下二十八丁左の頌の文で 教一を明す。教一とは教がたゞ一つより外にないといふこと。その一といふは絶待の一で二三等に對した相待の一ではない。絶待の一であるからその一の中に二三等のすべてを包容して居る一である。法華の一乘はこの絶待の一であつて、その一乘の意味を開いた教行人理であるから四一がすべてこの絶待をあらはす。先づ唯一乘法の教のみで、これに對して二乘の三乘のといふ別な教法はないといふが唯有一乘法無二亦無三といふ。それもたゞ此世界の釋迦佛の説教が一乘法のみであるばかりでなく、十方佛土いづれの佛の教もすべてこの一乘法のみであるといふことで十方佛土中といふ。無二亦無三に就いては天台疏にはいろ〳〵に解すれども、一乘法の外に二三の法はないと絶待一乘なることを顯す經文なり。一乘法とは一佛乘法で一切衆生が機の善惡智愚の隔てなくすべて同一の教の乘物によつて同一の佛果を得ること。卽ち法華で開顯されたはこの一佛乘法である。聲聞も緣覺も菩薩も共に己が智惠や才覺によらずに、佛智の凡てを打出して説かれた教に乘ずることによつてのみ、同一の涅槃に到ることが出來る。この教のみが一切衆生の成佛すべき絶對唯一の法であつて、外にはこれと對立した衆生成佛の教はない。然らば法華以前に説かれた三乘教(藏教)も亦佛教でないかといふに、それは佛教ではあるが、法華の一乘法を佛教といふ場合の嚴密の意味の佛教ではない。それは調機方便の教であるからこれによつて衆生は徹底的に滿足を得ることは出來ない。よつてこの方便の三乘法をすてゝ眞實の一乘法に入るべきである。併しその三乘法は一佛乘を得しめん爲の方便であつて、その方便教あるによつて未熟の機はその教に誘引されて一乘法に歸入する。若し三乘方便教がなかつたならば二乘の小機は永久に一乘法に入ることが出來なかつたであらう。されば三乘法は其の教の內面的原理として佛智(一乘法を説く)であり、その教の歸趣する所亦一乘法であるから、三乘法の存在の原

理は一乘法にあつて三乘卽一乘である。これ權實相卽の絶待一乘敎の意である。法華を妙法といふのはこれが爲である。これを敎一といふ。○正直捨方便等は法華經方便品科註一ノ下四十五右の文で行一を示す爲に引用したもの。行一とは眞實行は唯一なりの意。なる程六度萬行と行にいろいろの種類は分れて居るが、若しその行が佛以外の智惠より生ずるならば（例へば大菩薩の智惠を以てどうか佛果を得たいものと念ずる心から修する六度行）それは嚴密の意味に於いて行ではない。方便行であつて眞實行ではない。眞實行は唯一佛智より生ずるものである。佛智の働く所自ら六度の行となり萬善の行となり亦化他の行を生ず。一切衆生はこの佛智を體得することによつてのみ眞實行を修することが出來る。それ故行はその形に於いて無量に分るゝもその內容に於いて唯一の佛智を本質とするからそれを行一といふ。正直捨方便は調機の方便をやめて佛の自內證をありのまゝに打ち出すこと。但說無上道は無上道は佛道のこと。道は能通の義で現在の立場から理想の天地へ通ずる道路のこと。卽ちわれら衆生が生死の家から大涅槃に到る道路は唯一佛乘の道のみである。それを說くがこの法華經であるとなり。この文もと法華經では敎一を明す下にあるが今は所說の無上道の邊より見てこの文を行一を明す文としたまふ。その一佛乘の道にはたゞ佛智を體得しそれを本質とする如來行のみが許さるゝ。佛智を體得せざるものゝ萬善諸行では佛道を進み得ないばかりでなく、如來行の外に成佛道はないから、如來行以外の行はすべて虛假の善雜毒の行である。但し一度佛智を體得するものにとりては、苟くも行ある處にはそこに佛智を本質とせざるものはないから、汝等所行是菩薩道と聲聞行までが如來行と開會せられ、一切行は唯一如來行と知らるゝ。これが法華經に開顯せられた一乘の妙行である。○但爲菩薩等は取意の文にて方便品科註一ノ下四十三右雖復說三乘一但爲敎菩薩一及同科註一ノ下二十四右若我弟子自謂阿羅漢辟支佛一者不聞不知諸佛如來但敎化菩薩一事上此非佛弟子一等とあるに據れるならん。人一を顯す文也。人一とは敎を信じ行を修する人はすべて菩薩であつて、聲聞緣覺といふ別な人はないといふこと。而してその敎といひ行といふものは一佛乘の外にないのであるから、すべての衆生は佛敎を信じ如來行を修する佛子である。四海皆兄弟にて一人たりとも佛子ならぬものはないといふのが法華に開顯された一乘法である。尤もさういふ自覺を持たないで、自己は聲聞緣覺の者である乃至外道であると執じ込んで居るものは數多あるが、一度佛子の自覺を得て一乘海中に入る時はすべてが一菩薩人であると知られ、三乘五乘の別を見るのは一場の迷夢に過ぎないばかりでなく、その迷夢の中に別を見て居る當體が如來の一子であつたと知らるゝからして、佛子の外の一切衆生はない、これを人一といふ。但爲菩薩の但の字絶待を顯す。暫く調機の爲に聲聞緣覺の名を許さるゝが佛意は最初から一切衆生を成佛せしめんといふにあるから、始から終まで菩薩の爲にするので聲聞緣覺の爲にするのではない。

不爲小乘の小乘は聲聞緣覺のこと。○世間相常住は方便品科註一ノ下三十八左の文で理一を顯す。理一とはすべての現象の事物は本體の理によらざるものはないが、そのすべての現象の根抵をなす理は唯一絶待で二三の別がないといふことを理一といふ。[7]すべての現象は世間法と出世間法とに分けることが出來る。出世間法は眞如實相の理が顯現したものであるから常恒不斷で轉變することのない生命的な存在である。これは何人も異論のない所である。然るに世間法は眞如實相の理に背いたもので轉變無常のものである。それにどうして常住の生命を許し眞如實相の理の顯現として見ることが出來やう。よつて小乘敎ではその世間の因果を討ねその世間法の因つて生ずる惑業を斷じて苦果を亡ぼすべきを敎へ、大乘敎でも亦煩惱を斷じ世間法から解脫して涅槃常樂の出世間法に住すべしと談じて居る。然るに法華經には世間相常住と說き諸法實相なりと談じて、その世間法がその儘眞如實相の生命的存在であるといふのはどういふ譯かといふに、なる程世間法は生滅遷流(せんる)して暫くも止まず無常である。しかしそれ故にその無常の世間を棄てゝ常住の出世間を得やうとするは偏見である。何故なればその世間はどこまでも無常のものとし出世間はどこまでも常住のものと思ひ込んで居るのは、われらの差別見卽ち迷情に過ぎないからである。かく無常といへば常住を見ることが出來ず、常住といへば無常を切り離して考へる迷情は要するに眞如實相を見得ざる無明である。この迷情を拂はずんば遂に眞如實相を見ることは出來ない。よつて佛はこの迷情を離れしめん爲に暫く迷情の差別見に寄せて調機方便の敎を垂れ世間の外に出世間あるが如く說き給へどこれ佛の眞實說ではない。法華に來つてそれらの迷情漸く晴れてたゞ佛知見のみに信順するの機熟したれば、始めて佛知見のありのまゝを開說し給ふ。佛知見の照す所は先きの凡智の所見とは異なり、世間は無常にて暴流(ぼる)の如く轉變す。されどその念々生滅の當體に常住不變の眞如を全現す。無常の外に常住があるのではなく無常の當體に常住が宿る。世間の外に出世間があるのではなく世間の內に出世間がある。よつて世間無常なりと痛感することは常住の生命を體驗したるものに限られ。生死の苦惱を眞に味ふものは頓てこゝに涅槃の常樂を樂しむことが出來るのである。又煩惱を斷じて而る後菩提を得と考ふるは偏見にて、いかに煩惱を斷ずるも菩提の智は生ずるものにあらず。さればとて煩惱のまゝがこれが菩提の智であると許すも亦同樣に偏見である。煩惱を眞に痛感する所に菩提の智が味はるゝ。かくの如く世間に卽した出世間生死に卽した涅槃、煩惱に卽する菩提はたゞ佛の不可思議智によつて實證せらるゝ境界である。それを說いたものが法華の一乘妙法である。それ故に世間相常住と說いて轉變無常の世間に卽して常住不變の眞如實相が存する旨を明にする。かく世間相の現象に眞如實相が內在するといふことは、やがて世出世迷悟を問はず苟くも一事一物のある處實相の理の存せざることなきを示すものである。所謂一色一香無非中道である。

如來行即衆生行

これを理の一乘といふ。

【餘說】一乘の開顯。法華經に開顯する所は要するに一乘の妙法である。これを直說するものは方便品であるが、その方便品の所明を釋するに天台は四一を以てした。これ光宅疏の教理行果の四一に據り更に之を修正したものである。天台がこの教行人理の四を以て一乘の意義を顯さうとしたのはどういふわけであるかを附言して置かう。無明長夜に沈淪して果しもなき迷の旅を續けて居る衆生を呼び覺ますものはたゞ教である。教は衆生と佛とを結び付ける唯一の連鎖である。衆生は教を信ずることに依つて佛界に入ることを得、佛は教を垂るゝことに依つて衆生界に出ることが出來る。衆生の闇の世界を開いてくれる鍵は唯この佛教である。これによつて佛は先づ教を說いて衆生界に佛自らを投げ出す。教によつて衆生界に紹介せられたものは行である。行とは修治造作の義で、普通一般には衆生が佛界に至らんとする努力のことと解するが、今はさうではない。佛の內心が衆生の爲に燃えて佛道に至らしめんと努め給ふのが行である。この佛行は教が詮顯する所の全體である。卽ち佛はわれら衆生の爲にのみ存し、衆生が佛心の全分を領して居ること從つて又佛が衆生の全分であることを知らしむるものが教である。故に衆生が佛を全領し佛が衆生を全領する所から衆生の上に始めて眞實行が修せらるゝ。卽ち行は如來行であると同時に衆生行である。衆生が少しも己が修治造作の念を加へずに而も修治造作するものは如來行佛行である。これが法華經に開顯する一乘行である。衆生は自己の上にこの惠まれた教行を全領する時、初めて己れならざる自己の眞面目を自覺する。換言せば如來の一子としての自己卽人を始めて信知す。理はその自覺によつて自ら實證され開展せらるゝ、純眞な世界である。そこにはものみなが光明に照され常住の生命に輝くのである。かくて無明常闇の衆生界が光明遍照の佛界に全領され佛凡一如の世界が實現された。かくて衆生はこの理を體驗する時、一如を證り澄さず利他教化地に出でゝ教を垂れ行を示し菩薩(人)をして涅槃常樂を證せしむ(理)然れば一佛乘の妙法はこの四

教↘行↙人↖理

を以て盡さるゝ故、四一を以て一乘を開顯するのである。(四一の各釋は前述の如し)。

時人未得法華妙旨但見部內有三車窮子化城等譬乃謂不及餘經蓋不知重擧前四時權獨顯大車但付家業唯至寶所故致誹謗之咎也。

【文科】因に時人の法華に對する謗難を會通す。

【句解】時人は諦觀當時の人のこと何人を指すか明かならざるも、法華經は小機誘引のこと

法華に權を設かざるを得ない所以

が說いてあるから、小乘のことを影にも說かぬ華嚴經よりは劣るといふものがあつたから、それを今會通するのである。こゝから推するに前に今昔の權實を明す下に華嚴經のことを特に詳說して出世本懷に非ざることを言ふたものはこの時人の僻說に當る所があると見へる。○三車は譬喩品の三車一車の譬喩のこと。三車は羊鹿牛で聲聞緣覺菩薩に譬ふ。小乘三藏敎の三乘也。○窮子は信解品の長者窮子の譬喩を指す。窮子は小乘の聲聞緣覺を譬ふ。○化城は化城喩品の化城寶所の譬。化城は小乘の涅槃を譬ふ。○餘經は別に何經と指さゞれども華嚴經を指すこと前後の關係にて察知すべし。○前四時權は小乘の機を指す。小乘の機を調熟する爲の前四時なれば、小乘の機は前四時敎に通ずる所被なれば前四時の權といふ。法華經はその小乘の機に一佛乘の敎益を得しむるが所詮なれば、その權機を重ねて擧げるとなり。この小乘の機は前四時に亙つて廣く大小の敎を聞いたが、自己のものとして正しく修するものは小乘の三藏敎である。第四般若時までは志を變へずに常にそれを偏に取り用ゐて來た。それ故に法華にはその三乘敎をすて一乘敎を取らしめたのであるから。又前四時權とはその小機が前四時中用ゐて居つた藏敎のことを指すとも見らるゝ。よつて詳しくいへば前四時權とは前四時の間常に藏敎を己がものとして居つた小乘の機を指すといふべきである。この權機を一實に入らしめるのが佛出世の本懷であり、又この權敎を施したまふことがはや圓實の佛意であつたと權實相卽を開顯するのが法華の妙旨であるから、權機權敎を擧げずにはすまぬ。法華に權を說くことはいよ〳〵法華の妙法なる所以を顯すもので、もし法華に實だけ說いてあつたならば(華嚴のやうに)それは權に對する實で、權卽實の絕待妙の意は顯はれぬ。法華に是非共權を擧げずには居れぬ所以を知るべし。○獨顯土車は三車一車の一車のことで、獨の字で爾前に曾つて顯はれなんだ佛乘(大白牛車)が法華に始めて顯れたといふ意を述べる。○付家業は窮子に長者の家業を付屬する信解品の譬、前の窮子に對して一佛乘の觀行を開顯するが法華であると顯す。○唯至寶所は前の化城に對する寶所の譬。寶所はもと印度人の蓬萊島のことで理想境のこと。そこは五百由旬もある遠方であるからとても足弱の聲聞等は一氣に進み入ることは出來ぬ。そこで一策を按じて三百由旬の途中の化城(寶所に僞せた城下)まで連れて行き、その化城へ着いてから更に眞の寶所は尙二百由旬の彼方にありと指示した。この妙策によつて足弱な聲聞等が寶所に至ることを得たといふが化城寶所の譬喩である。寶所は大乘の涅槃を譬ふ。化城は小乘の涅槃である。二乘の小機には先づ小乘の益を得しめ、法華に至つて初めて一乘の大益を得しめたまふ。唯の字法華獨明を顯す　○致誹謗之咎也。法華を誹謗するは權實相卽の妙旨を知らぬからである。よつて前來今昔相望して權實相卽の妙旨を說いたからして、それによつて誹謗をやめよと。これで約一部の法華經の一段を結釋したのである。

寶所の譬

約時則日輪當午磬無側影第五時

【科】法華經を明すに四段ある中、第二約時の一段。華嚴經の三照中照平地中の正中なり。

【句解】日輪當午は正午(十二時)のこと。○無側影は四面が太陽に照されて影のないことで、法華では一切衆生が佛日の光益を受けて成佛せぬものゝなきに喩へたもの。

約味則從熟酥出醍醐此從摩訶般若出法華五醍醐味

【文科】第三約味の一段、涅槃經の五味喩に配す。

【句解】出法華。涅槃經の本文には從摩訶般若出涅槃とあつて出法華とはない。從つて醍醐味に配するは涅槃經である。天台は法華涅槃同味の教であるから義を以て法華を醍醐味に配したものである。

信解品云。聚會親族卽自宣言此實我子我實其父今吾所有皆是子有付與家業。窮子歡喜得未曾有此領何義答卽般若之後次說法華。先已領知庫藏諸物臨命終時直付家業而已。譬前轉教皆知法門說法華時開示悟入佛之知見授記作佛而已。

【文科】第四に約信解品の一段。

【句解】信解品云等。前四時と異り法華時はもはや殊更法華經によつて其部意を確かむる要はないが、なぜ更に信解品を引くかといふに二義あり。一は信解品は法華の說を聞ける佛弟子の領解なれば、前來叙べた法華の說と較べていよ〳〵法華の部意を明にする故に之を明すのである。又一には前來にて法華の部意は顯れたが般若の次に法華が說かれたことは明にならぬ故それを明にし五時の順序を確にする爲に信解品を引くと。以上二義共に存すべし。○聚會親族等は。長者が臨終の枕頭で窮子に遺言して親子名乘をなし一切の財產を窮子に付與する譬。これはいふまでもなく法華の開顯を喩へたもの。聚會親族とは文殊彌勒等の大菩薩が法華の會座に來集したことを喩ふ。これらの大菩薩はいづれも過去世に於いて釋迦と共に過去佛を師として修行した同僚故、舍利弗等の釋迦の弟子よりいべば伯父なり叔父なりにあたるわけ故親族といふ。○此實我子我實其父は。舍利弗等の聲聞衆は釋迦の致法を聞いてそれによつて佛と成るから、所謂佛口より生じた佛子で、釋迦は其父である。かく聲聞緣覺を如來の子と示したまふは法華經獨り顯す所である。○付與家業は佛は佛敎の中に果地の萬德因位の萬行ありとあらゆるものを含めて、これを弟子衆に付與したまふ。弟子衆はこれを信受する所に成佛の確信を生するのである。前にも般若の時も付財付業の言を遣つてあるが、あれは未だ佛の心の中に秘め

られてそれを宣言されなんだ。從つて聲聞もそれを自分の胸に信受しやうとはせなんだが、今や時機到來佛は明らさまに宣言し給ひ衆生は明に之を信受するに至つたゆへそれを付與家業と譬へたもの。○頌知庫藏諸物等は般若の時はたゞ支配人として領知せしめた分齊なるも法華の會座では相續人として相續付與したものであると顯す。○臨命終時は信解品の本文では聚會親族の前にこの言あり、前には略して引かず、よつて今この言を加ふ。法華八年の說法終るや間もなく入滅したまふ故、臨命終時と譬ふ。○前轉敎皆知法門等は區々たる大乘の法門を知るは般若のことで、法華ではたゞ佛眼を點睛するだけであると顯す。○開示悟入佛之知見は方便品科註一ノ下十八左に出る經文で、諸佛は一大事因緣で世に出現するといふのはどういふことかと自問して、その答に佛知見を開示悟入して衆生を佛知見道に入らしめんが爲に世に出現したものであると法華經の出世本懷たる理由として說いてある。さればこの語は法華經の眼目である。依て天台は『法華文句』十一初右以下四意に約して縱橫無盡に解釋を施して經意を明にせんと企てゝ居るが今はたゞその大要を示すに止めやう。卽ち一言にして言へば衆生が自己の上に佛智を獲得し佛眼を開くことである、それを開示悟入と四字で叙べてあるのはどういふわけかといふに。開の字は開發の義で隱れてあるものが現はれること。卽ち衆生の心は無明煩惱に覆はれてあつたが、その蓋がとれて隱れてあつた佛知見の鏡があらはれた所を開といふ。いはゞ佛知見を全體的に

法華の眼目

開示悟入

捉んだことを顯す。示の字は指示と熟し、佛知見の中味に立ち入つて部分的に味得するをいふ。卽ち佛知見の內容をなして居る萬德萬行を指示し領納すること。喩へば鏡の中に萬像が現はるる如きである。悟は了達の義でだん〳〵佛知見が手に入つて來る所をいふ。卽ち佛知見には全體的な輪廓(理の空)と部分的な中味(事の假)との二面があるがそれがはだ〳〵にならずに一つの統一體として體得するやうになつた所を悟といふ。喩では鏡と像とが渾然として一體となるが如し。入は流入の義で佛知見を佛知見として把持しやうといふやうな窮窟な思を離れて自由自在な應用を現はし、而も任運にそれが大智慧海に融け合ひ流へするをいふ。かく分けて言へば四段になるが、いづれも一念同時に獲得する證を分析して言ひ顯したに過ぎぬ。佛知見も佛知は三智を全うする一切種智(中道を見る智慧)佛見は五眼(肉・天・慧・法・佛)を全うせる佛眼と分けて釋するも(三智のことは後に出づ)、暫く第六意識と前五識とに分けたのみで、佛知卽佛見で二つのことではない。○授記は佛が聲聞衆に汝は今より幾年の後に某と云ふ佛になり何々世界に出現するといふ記を授けたまふこと。記は弟子が其の成佛の豫言を心に記しづけて心あてにすること。授記は譬喩品では舍利弗に授記し授記品では迦葉目連等の四大弟子の各々に授記し、五百弟子品には富樓那以下の千二百人に授記し、法師品には更にその範圍を擴充して佛在世並滅後に亙つて法華の一句一偈を聞く者に授記して作佛を豫言し給ふ。これ法華を聞信する者た

とひ佛の授記したまふことなしとするも成佛の自覺を得るのである。これを佛よりのたまひて妙法が一切衆生の成佛道なることを明にするものである。○作佛而已。前來開示悟入の上に更に授記を得て之を確め、最後に間違なく作佛するのが法華の敎益であると顯したものである。

涅槃の說意

（2）涅槃經

次說大涅槃者有二義。一爲未熟者更說四敎具談佛性令具眞常入大涅槃故名捃拾敎。二爲末代鈍根於佛法中起斷滅見夭傷惠命亡失法身設三種權扶一圓實故名扶律談常敎。

【文科】涅槃經を明すに二科あり、一約部二約時味是なり。今は初に約部の一段なり。

【句解】說大涅槃者等。法華に於いて說くべきすべてを說き盡せる佛が何故最後の一日一夜に於いて涅槃經を說き給ふやといふに二義ありとて、涅槃の說意を明しつゝ涅槃經のいかなるものであるかを示すのが此下の所明である。○一爲未熟者等は一に佛在世の未熟者の爲に涅槃を說き給ふことを叙ぶ。○未熟者とは法華を將に說かれんとする際靈山の會座を起去した五千人の增上慢の比丘の如きその一例である。法華に洩れて未だ入實し得ざる者をいふ。○更說四敎は藏通別圓の四敎を更めて說くこと聖行品の四種四諦の說を指す。（四種四諦のこと次に出づ

道說道泯

佛性の意義

四敎に各々苦集滅道の四諦あること）これは未熟者の中でも方等般若の會座を經て涅槃に來れるものにはその要なきも橫より直ちにこの會座へ來れる者へこの四敎を說くのである。是を道說といふ。その四種の四諦を德王品に來ると四不可說と說いて、四敎がいづれも能說の不可思議の佛意を顯したものであると、權を開いて實を顯し、四種の別は方便に過ぎないもので、その實は一圓實の不可說より外はないと說いてある。是を道泯といふ。法華に一度泯亡した權方便をこゝで再び泯ずるの意。但し今の文には別に道泯のことをいはざるは具談佛性等の句にその意顯はれるからこれを略するのである。○具談佛性等。佛性常住を談じて、それら未熟の者までが大涅槃に入り成佛せしむるが涅槃經の所詮であると顯す。涅槃經には一切衆生悉有佛性を說くこと審にその佛性の常住を明すこと叮嚀親切である。よつて古來より涅槃經を常住敎と呼んで居る。佛性の意義はいろ〳〵に解せらるゝが。涅槃經に說く所はやがて佛になるべき可能性といふ意ではなく、佛の持つべきあらゆる性能卽ち慈悲喜捨等の福德智慧のこと。それで一切衆生悉有佛性といふは、迷の衆生がそのまゝ悟の佛德の所有者であるといふ意味で、迷の衆生には佛になるべき可能性があるといふことではない。かく佛性は果佛の德であるからその佛德は煩惱によつて其德を損じ、智斷によつて其の德を增益するものでなく。煩惱の熾盛なる裡にいよ〳〵佛德はその光を顯すものであるから佛性常住といはるゝ。されば佛性は亦大涅槃

と別なものではない。佛の證が涅槃であるから言は異なるも意は同じで佛性卽涅槃である。○具眞常入大涅槃とは大乘の涅槃は小乘とは異り常樂我淨の四德を具へることを顯して眞常といふ。眞の字は外道の顚倒の妄見に簡んで眞の常住なりといふ。殊に常の一德だけ擧げるは、涅槃經は佛の肉身の示滅によせて法身の不滅を明すのが所詮であるから、佛性常住と說きて常の一德だけを示す。よつて今も眞常といふ。然れば入涅槃といふことは死滅することではなく却つて常住の生命を得るといふことで、釋迦佛の入滅はいよ／＼法身佛の常住なることを示すものである。今は在世の未熟者をして釋迦佛と同じく眞常の大涅槃に入らしむるものが、佛性常住を說く涅槃經の所詮であるといふことで今具眞常入大涅槃といふたもの。されば涅槃經に佛性常住を說くのは法華の一乘開顯を繰返すものである。何となれば一乘開顯は要するに一切衆生がすべて一佛乘によつて成佛することであるから、涅槃經に佛のもつべき德性は常住で一切衆生が共に享受するものであると明すと全く同一である。よつて具談佛性等の文は追泯の說のことを明すものといふべきであるから更說四敎の追說を明しながらこれに對句となるべき追泯のことを言はぬのである。○捃拾敎の捃拾は落穗を拾ひ集めることで、涅槃經が法華經に洩れたる未熟者を開悟せしむる所から捃拾敎といふのである。法華の大收穫に對して涅槃を捃拾といふ。○二爲末代鈍根等は佛滅後の者　爲に此經を說くことを明す。末代の鈍根に二類あり一無常を執する者で、佛すら入滅したまふ何況んや一切衆生はいかに戒を持ち行を修するも亦死滅は免れ難いから、苦んで修道することはないと、佛の入滅によつて無常を執じて佛道を廢て佛敎を謗るものがある。二には一實の圓常を執するものは、生死卽涅槃の圓敎を曲解してこの儘が佛であるから修行の要はない。修行を策勵するは權敎の所談であるとて、一向に一實を執じて方便を謗る所謂惡平等の邪見に墮するものがある。佛はこの二類の滅後の機の爲に、法華の後に更に涅槃經を說かれたのである。○起斷滅見とは佛の入滅によつて無常を執すること。第一類の機をいふ。○夭傷慧命亡失法身は般若（智慧）と法身（理體）の二德を傷ひ失ふこと。もとこの理智二德は迷悟によつてその體に增減なければ傷ふの失ふのといふことはなければども、迷情の者はこの二德を信知せず從つて取り用ふることが出來ぬから、それを夭傷亡失といふ。惡平等の邪見に墮する者はこの二德を失ふものであるから、これは第二類の機に就いていふ語なれど、第一類の斷見の者も亦同樣である。よつてこの二句を上の二句と離して解すれば第二類の常見のことになり、上に付けて讀めば第一類の斷見のことになる。いづれとも解すべきなれど設三種權等の句より見て上の二句と離して第二類の常見のことゝする方が文意に親しい。○設三種權扶一圓實は藏通別の三敎の方便を說き設けて。それによつて一實圓敎の眞意の失はれぬやうにすること。扶は扶持で一實をもりたてることを顯す語。一說に三種の權を戒定慧（前

三教）のことゝする義もありこれは『法華玄義』四ノ下十二扶二戒定慧一顕二大涅槃一とある文によるものなれど。今の文義には疎し。一圓の實に對する權は前三教なること親易きことである。さて此經に三教の方便を說くのは一實を執ずる常見者を覺醒する爲めである。この常見は圓實の一面だけを見て、それが權に卽した實なることを知らざるより生ずる。よつて法華には既に權を擧げて實を顯してある。今も三教の權を說いてその歸趣する所の圓實なることを顯す。この意が明になれば理談のみに偏して持戒修行を廢することが誤であり眞の圓敎でないことが知れる。さればこの二句は第二類の常見者に就いて云へるものである。併しこの三種の權を三教中主に藏教の戒律のことにして解すれば、第一類の斷見者に對して滅後に戒律を大切に持つべきを說き以て斷見者をして常住佛性を信せしめやうとなさるゝことを設三種權扶一圓實の二句に言ふたものとなる。然ればこの二句兩意を含むこと知るべし。○扶律談常教は滅後の邪見者に對して說き給ふ邊から言ふ涅槃經の異名である。戒律を扶助として常住を談ずる教とは、涅槃經には盛に滅後戒律を嚴守すべきことを誡めてあるが。これは無常を執ずる根機の邪見を對治するためで、この邪見に封ぜられて居つては到底佛性常住の道に入ることが出來ず、珠を繫けながら迷はねばならぬ。よつて殊更戒律を力說せられたが、それは要するに佛性常住の道に滅後の人々を引入せんが爲に外ならぬ。それ故律は常住教の補助として說かれたものであるといふ

ので扶律談常といふ。この扶の字扶助の義。然ればこれは第一類の執無常の機に望めていふのであるが。若しこれを前の設三種權等の句の結釋とすれば第二類の執圓常の機に望むるものとせねばならぬ。然る時は三種權教中殊更藏教中の戒律を擧げたもので、戒律の言には三教の戒定慧を含むとすべきである。いづれにしてもこの第二末代鈍根の爲の扶律談常教の所明は、執無常と執圓常の二類に對することを意中に置きて、それを顯はに打出さずに巧に錯綜して書けるを以て、一見解し難きやうなれども、深く意を得て見る時はいかに著者の用意の周到なるかゞ知られるのである。

然若論時味與法華同。論其部內純雜小異。故文云從摩訶般若出大涅槃前法華合此經爲第五時也。

【文科】 涅槃經を明す二科中第二約時味の一段。

【句解】 論時味等は約時には正中の第五時、約味には醍醐味にて法華と同じ。○論其部內等は部中の用教に就いて論ずれば小異あり、法華は純圓獨妙にてまじりけなく、涅槃は四教を用ゐてあれば權のまじりものがあるから純雜の別がある。これ涅槃經は法華經に殘された跡片付の爲であるからかういふ別があるが、その歸結はやはり一切衆生をして佛性常住を證らしむるものである。法華の二乘を開會して一切皆成佛の一乘法を開顯したことを異なれる語で言ひ顯

したに過ぎない。されば涅槃は法華の延長で別時別味ではないから、二經を合して第五時としたものである。○文云從摩訶等は涅槃經聖行品の五味相生の終りの文で、前の法華の下では隨宜に語を置き換えて出二法華一としたのであるが、本文には今の通り出二大涅槃一とある。

(七) 問答料簡 (化儀篇餘論)

以上に化儀四教(五時を含めて)を各説し終つた。よつて以下にはそれに言ひ遺した二つの問題に就いて解説をなすのである。

(1) 方等と涅槃

問此經具二四教一與前方等部具説四經爲同爲異。答名同義異。方等中四圓則初後俱知常別則初不知後方知藏通則初後俱不知。涅槃中四初後俱知。

【文科】問答料簡二ある中先づ方等と涅槃の同異を料簡する一段。これは涅槃經の部意を明にする爲の料簡なる故涅槃經を明し終つて引續きに叙べたもの。次の五味喩意の料簡は五時教全體に關係する問題なれば後へ廻したものである。

【句解】此經具四教の此經は涅槃經にて四教を追説すること前述の如し。○方等部具説等は方等部が四教を對説することをいふ。○名同義異。四教はどこに説いてあらうともその教體に

教は部によりて色彩を異にす

方等と涅槃との相異

蘇息教

別のあらう筈はないが、佛がそれを用ふる化意は經によつて同一ではない。よつて四教はそれが説かれて居る經によつて自ら各別な色彩を持つて來る。例せば華嚴の圓教と法華の圓教との關係の如きである。今方等部の經典と涅槃經とは兩經共に四教を其部中に持つて居るから、これを取り出して其の同異を料簡するのである。義異はそれを説かれた能説の化意と、それを聞いて受用する聽者の心持との相違が教そのものゝ義理に別を生せしむるのである。勿論一教一教を部中より抽き出して見れば名同なるのみならず教體に別はない。併し部の中にある間はその部意の支配を受けるからして義が不同になる。どういふ點が異なるかといへば、涅槃經は既に法華開顯の後の説で法華の補遺であるから。一經の部意は最初から佛性常住を打ち出し一切衆生悉有佛性と談じて何等隱す所はない。よつて其部中に四教を追説するも其の中の三教は權にして調機入實の爲であるといふことを曝け出し、併も鈍根の機は其の三教が最後眞實の道でもなく又鈍根のものにとつてもそれだけでは證り切れるものではない(爾前にてはたとひ前三教は勝法でないと知れてあつても、小機のものはそれを自分にとつては無上の教と執じて居る)と明に知つて居るも、その權をすてゝ直に一實を證することが出來ないから、調機の教と知りつゝ而もそれを受行するのである。是を『止觀輔行』三ノ四(二十四)彼經四教皆知二常住一本意在圓權用三三教一以爲二蘇息一實不二保一權以爲二究竟一等とある。蘇息はいきやすめのこと。弱い旅行者

がこゝはまだ目的地ではない途中の都と知りつゝそこにいきやすめをするが如く、三教の權方便で一息ついて更に目的に突進するが涅槃の三教を追說する所以である。爾前にあつては然らず佛の化意では蘇息の爲に權教を設けられたのではあるが、說教の上ではそれが蘇息の爲の教であるとは打明けてないから、權とは知らずにそれを眞實のものとして受行する。殊に方等部は大小偏圓を對等の位置に置いてその勝劣を判ずるのが部意であるから前三教はそれ〴〵究竟眞實の教として說かれてある。これが兩經の四教の義異なる要點である。この意にて次の文を解すべし。○方等中圓則等は先づ方等の四教を明す。○初後俱知常は圓教をいふ。初は未だ眞如を見ざる間のこと。卽ち名字卽から十信の終までをいふ。後は一分眞如を見付けてから後のこと卽ち初住より妙覺までを指す。俱知常は佛性常住を知ること。卽ち煩惱に泥れて居る凡夫の當體に佛德のすべてを具へて居ることを知るのは圓教では、最初の名字卽の凡夫位から最後の妙覺位まで變ることはないよつて俱知といふ。○別則初不知後方知は別教では初（眞如を見ざる間）とは十回向位まで後（眞如を見る）は初地以上のこと。別教の十回向までは佛性常住を知らぬ。なぜなれば別教では眞如を理とし一切衆生が佛性を有つて居ることを初めから知つて居つても、その眞如は佛果に到らねば全現するものではないと考へ、佛性もたゞ成佛の可能性だけは凡夫も持つて居るが煩惱を斷盡せねば佛德は自分のものとならぬと考へて居るからして、佛性常住は知らないのである。なぜなれば佛性常住とは凡夫のこのまゝ不斷煩惱の位に常住の佛德を見ることである。それは圓教でなければ說いて居らぬからして別教の人々が知る筈はない。ところが別教の人でも初歡喜地に入る時無明の一分を斷じて親り眞如佛性を證る。その證つた眞如佛性は常住不變の當體であるからしてそこで始めて常住を知るのである。（之を證道同圓といふ教證二道のこと後に出づ）よつて後方知といふ。○藏通初後俱不知。藏通二教はたゞ空理を究竟のものとして未だ眞如中道を談せないから。たとへ後位の空理を證つたものでも佛性常住を知らない。況んや空理を證らない初位の凡夫に於いてをやである。故に俱不知といふ。○涅槃中四等は涅槃の四教は別圓二教は勿論藏通二教も初（賢位）後（聖位）共に佛性常住を知るといふ。そのこと前辯の如く涅槃經は開權顯實を明せば、三教は權にして何人もその究竟は佛性常住（圓）を證るにありと部の綱領として明示されてあるから、三教も其究竟は圓教にありと揭げてある。（これは三教の本來の眞面目である）然らば三教を說く要はないではないかといふに、決して然らず涅槃の對機である雜多の鈍根は、『釋籤』二ノ上「解は卽して行は卽せず」といへる如く、頭には圓教の常住佛性の旨を理解は出來ても、やはり實行が俱はない。鈍根の者は自覺して調機の要を痛感して、三教の觀を以て鈍器を練り鍛へるのである。以て俱知常住の旨を知るべし。

俱知常住

（2）五味の喩顕

問將五味對五時教其意如何。答有二。一者但取相生次第所謂牛譬於佛五味譬教乳從牛出酪從乳生酥醍醐次第不亂故譬五時相生次第二者取其濃淡此則取一番下劣根性所謂二乘根性在華嚴座不信不解不變凡情故譬其乳次至鹿苑聞三藏教二乘根性依教修行轉凡成聖故譬轉乳成酪次至方等聞彈斥聲聞慕大恥小得通教益如轉酪成生酥次至般若奉勅轉教心漸通泰得別教益如轉生酥成熟酥次至法華聞三周說法得記作佛如轉熟酥成醍醐此約最鈍根具經五味其次者或經一二三四其上達根性味味得入法界實相何必須待法華開會。

【文科】第二の問答料簡。五味喩を以て詮顕するところを明にする一段。

【句義】問將五味等。この下の問答にて涅槃經の五味喩を以て五時教に對配するのは、どういふ意味であるか、從つてこの喩がどういふことを詮顕するのかといふことを明にする。○答有二。喩顕に二ありて、一は五時教の關係が一から二を生じ二から三を生じ乃至四から五を生ずるといふやうに次第相生の關係にあつて、決して前後次第を濫すことの出來ないものであるといふことを詮顕する。この場合は乳から酪を出し酪から生酥を出すといふ相生相關を譬に取つたもので、乳酪等の濃淡は所用ではない。二には五時教の關係が一よりは二、二よりは三と順次に淡から濃へ精錬されて行つたもので、決して離れ〳〵のものでないといふことを喩顕する。この場合は五味相互の間に濃淡のあるのを譬に取つたものである。卽ち一には教の相生次第あることを二には機の濃淡を顕すのである。かくて佛の一代教は一つの纒つた體系をなして居るものであつて、隨機隨說の切れ〴〵のものゝ叢書ではないといふことをハツキリと示したものである。○次第不亂は乳より酪を酪より生酥をといふ次第が整然たるもので亂すことの出來ないやうに五時の順序の濫すべからざるをいふ。○取其濃淡を『集註』には約機と約教の二義ありといひ前の相生次第にも約教と約機の二義ありとせるも、濃淡を教の濃淡とすれば華嚴は阿含よりも劣れる教といふことになり忽ち差支へる。よつて濃淡は約機に限り相生は約教に限るといふべきである。尤も小機の手前では大乘を說ける華嚴よりも小乘の阿含の方が勝れた教と思ふのは勿論であるが、それは機の中に含まれて居ることで。その機情の判斷を以て直ちに教

教の相生
機の濃淡

佛一代の正所被は鈍根

の價値を決定し敎に濃淡勝劣を見るのは偏見であつて、一代敎を佛の權實二智の開展として勝劣の批判を下すべきでないといふ天台の意に悖る考であるから敎の濃淡を喩ふるといふ說は取るべきでない。○一番下劣根性は最鈍根の者のこと一番は一とかたまりのこと一類と同じ。舍利弗以下法華に於いて開會された數多の聲聞(緣覺)の弟子衆をいふ。これが一代敎通じての正所被の機であるといふことを明したは法華であるが、それを發見して世に高唱したものは天台大師である。聲聞の弟子衆を正所被の機といふのは、換言せばどん底の人類の救濟が釋尊の本意であるといふことである。卽ち一代の經典はこの人類熱愛の大精神の開展であると見るのである。○轉凡成聖は凡は三界の眞理に迷ふ煩惱(見惑)を斷盡せざる間を凡といひ。それを斷じてから後の四果を聖といふ。鹿苑の會座は見思を斷ずるが敎の趣意である。○得通敎益は方等部の敎意は二乘の下機をして大乘の初門たる通敎の益を得しむるにある。尤も前に方等時の下で辯じた如く法華會座までは、二乘の人自ら進んで小乘を捨て大乘に入りて大乘の修行をするといふことはない。たゞ不知不識の裡に大乘の益を得るのを得通敎益といふ。二乘の人の意識に上つた所は恥小慕大の心を記したゞけである。○得別敎益は般若の敎益を擧ぐ、別敎の益は密益なること前に例して知るべし。○三周說法は法華經迹門段の說法のこと。今法華經の大科如左。

圖示する如く迹門段の正宗分三段に分れ、上根の爲の法說周と中根の爲の譬說周と下根の爲の因緣周との三周なり。同じ開三顯一の法門なれどそれを直接に說くが法說周、それを譬喩（三車一車の喩）によせて說いたが譬說周、更に下根の爲に因緣に寄せて說きたまふが因緣周。因緣とは今の佛弟子の由來のことで大通智勝佛といふ過去佛の時に大乘法を聞いて佛種を植えられて以來今日に至るまでに數多の佛が其中間に出で、それらの佛の敎化によつて漸々調熟したから、今日は佛種の果實を收獲する時が來たのであると過去の因緣を說き、開三顯一の法門を明にしたまふが因緣周である。かく同じ法門を三遍周り說かれたから三周說法といふのである。

○得記作佛は授記作佛と同じ、得記は佛弟子からいふこと授記は佛からいふ語。○其次者等は中根の者をいふ。五味を經て證る下根と一味だけですぐ證る上根との中間のものをすべて含む。

經一二三四は一を經て二味目で證るもの、一二を經て三味目で證る者、一二三を經て四味目で證る者三類を一緒に言ふたもの、中根はこの三類に攝る。尤も一を經て二で證る者の中にも華嚴と阿含、阿含と方等、方等と般若、般若と法華等の別はあるも、原則としては上の三類の外を出でぬ筈である。○其上達根性等は上根のものをいふ。昧昧得入は華嚴乃至法華の中いづれかの一味だけで證ること。○法界實相は一體の異名でいづれも眞如中道の理のこと。法界は法性の世界卽ものそのものゝ實體だけで少しも計度分別の念を加へぬ境界をいふ。實相も如實のすがたにて、概念的計量を離れた所に法はその如實のすがたを我等の前に顯すのである。○何必須待法華開會は上根や中根の者は必ずしも法華の開會を待つて初めて證るものではなく、法華以前に證悟する。但しこれらの法華以前の得悟者は法華を聞いて益々圓實の道を增長して一歩々々妙覺果滿に近よるのである。

上來已錄五味五時化儀四敎大綱如此。

【文科】化儀四敎と五時敎の別說の總結の語。

【句解】文は解し易し。

第三　化法四敎（五時八敎別說下）

自下明化法四敎。

【文科】これより化法四敎を明す一段にて、先づそれを總標する語。

【句解】化法は化儀所用の法の略とも解し又能化の敎法とも解す。いづれにても通ず、敎法の內容に就いての分類である。

【餘說】四敎の解說。敎理の內容によつて一代敎を分類したものが化法四敎である。これよりこの四敎の一々に就いて明すのであるが、今その概要を解說することゝする。

- 空理—界内
  - 事　教……事外ニ理ヲ立ツ——藏　教
  - 理　教……事卽理ト談ズ——通　教
- 中道—界外
  - 事　教……事外ニ理ヲ立ツ——別　教
  - 理　教……事卽理ト談ズ——圓　教

一代教廣しと雖ども所詮の理に就いていへば空と中道の二より外はない。卽ち眞理の世界はわれ〳〵の我他彼此の迷情を以て窺ひ知ることは出來ない。その迷情を打破し迷情を以てこしらへ上げた世界を空じた處に眞理の世界は顯現するものと說くのは空理を所詮とする空教である。それに對して迷情を打破し迷情の世界を空無した處に眞理の世界は顯現するに相違はないが、たゞ打破空無したばかりでは眞理の世界は全現さるゝものではない。眞理はもつと積極的な實在であつて、一切の存在がそれによつて保證される所の第一原理でなくてはならぬと說くのは、中道眞如の理を談ずる中道教である。然るにこの二理の考へ方に亦各々二つがある。卽ち一は超越的原理とするか二には內在的原理とするかの孰れかである。空を單に超越的原理とするものは直ちに現實の事象の上に原理を見ることが出來ない。現實の事象(有)は原理(空)を蔽ひ隱すものであるから、この現實の事象み探求しそが實有ではなく因緣和合の上に暫く其の有相を保有するに過ぎないことを明らめ、因つて以て現實の事象を構成

する根本源因が內心の惑業にあるを確め、この惑業を斷破して初めて空涅槃を得ると說くものは藏教である。よつて藏教は空を事外の理とし、而も事象の探求によらざれば理に達することは出來ないとするが故に界內の事教といふ。界內とは三界だけを迷の境界とするのであつて、これに對して界外とは三界の外に淨土があると考ふるのである。三界は經驗の世界形而下の世界である。界外の淨土は超經驗の世界形而上の世界である。たゞ見聞覺知の經驗だけがわれ〳〵の全體であると考へて居るものは界內の教によつて救はれやうが。もつと奧深い內性の世界をもつて居る者には界外の教が惠まれねばならぬ。それはさて藏教は三界を以てわれ〳〵の世界の全體とし、これを解脫して空理を證るのを究竟の涅槃とする。次に通教は同じく三界を解脫して空理を證るを以て究竟と說くが、その空理を以て內在的原理とする點に於いて藏教と異なる。卽ち現實の事象はこのまゝが空であり原理の世界であつて、別にこの現實の外に空理があるのではない。色卽是空空卽是色といふがそれである。所がこのまま空であるといへばとて、迷へるものが因つて以て事象とするものを肯定したのではない。三界のものゝこれが三界であるとするものはそれは一場の迷夢に過ぎない、決して三界そのものと何等交涉を持たないものである。併しその迷夢を破らねば三界の眞相は現はれぬ。否な三界の眞相が現はれぬのではない、われ〳〵がそれを觀得ぬのである。三界はわれ〳〵の

別教

圓教

觀ると觀ぬとに拘はらずいつもそのまゝ空であり原理の世界であつて毫も變りはない。そこでわれ〳〵が涅槃に至る道は藏教のやうに事象の探求にあるのではない。いかに客觀の事象を探求しても原理に達することは出來ない。否な事象の分析的探求は却つていよ〳〵原理に遠ざかる所以である。よつてそれらの事象を擯きて直ちに原理を觀る所にのみ涅槃がある。原理を觀る眼を得ることがわれ〳〵に與へられた、唯一の絶待に參する道である。この理を觀る眼は迷の夢から醒めた時に開かるゝ。よつて通教を界内の理教といふ。次に別教は中道眞如を以て超越的原理と談ずる。現實の事象は眞如に依止し（賴耶緣起說のやうに）若くは眞如の變作（眞如緣起說の如く）ではあるが、それが直ちに原理の世界涅槃の境ではない。現實の事象は無明（眞如を覆ひ隱す）の緣（因）によつて變作されたものであるからして、この事象の因つて起る緣起の相狀を探求して、徐に無明を斷じて迷の世界より離脫し而して後に眞如のみの涅槃界に至るを得ると說くが別教である。よつてこれを界外の事教といふ。圓教はこれに反して現實事象の當體が眞如中道の原理そのものであつて、事象を離れて別に眞如はないと眞如を事象の内在的原理とするのである。尤も通教の場合と同じやうに、凡夫の迷見の以つて十界の相とするものはそれは要するに迷夢中の事相であつて、事象そのものではない。事象そのものは常に十界差別の事象を現じつゝ而もそれが全體として眞如中道の世界である。よつてこの涅槃の世界に證入する道は事象の研究によつて斷惑證理するにはあらで、直ちに事象そのものゝ上に中道の原理を直觀し體驗することにある。よつて圓教を界外の理教といふ。以上四種の教が二種の理を詮顯することを叙べた。然るに眞理は唯一絶對にして初めて眞理たるべきに二の眞理を說くのみならず而もそれが一佛所說の上にあるに於いてはいよ〳〵不可解に非ずや云何。曰く。成る程空と中道とは二理ではあるが、それが同時に頭を併べ又同じ價値のものではない。藏通の二教の中では空は唯一の眞理である。併し別圓二教に來ればその空はもはや眞理ではない。又反對に別圓二教では中道を唯一の眞理とするも、藏通二教ではそれを眞理とすることを許さない。よつて二の眞理が同時に存立するのではない。やはり眞理はいつも唯一である。然らば釋尊は何れを眞理としたまひ、亦何故に眞理に非ざるものを眞理として說き給ふたかを明にせねばならぬ。釋尊の所證はいふまでもなく圓教に於いて開顯されてあるから、圓教に詮顯されたものが唯一の眞理である。然るに餘の三教を說き給ふは未熟の機に順應せんが爲であつて暫く眞理を明らさまに打出さずに婉曲に說かれた方便教である。元より方便は眞實ではないが、又同時に虛僞ではない。非眞理を眞理と言ひ曲げられたのではない。なぜならば空理は直ちに中道ではないが、中道と相容れぬものではない。卽中道眞如はわれ〳〵の迷見の能く到る境界ではなく、迷見を破つた所に顯は

一佛に二理四教ある所以

るゝ境界である。それ故眞如は一面迷見を離れた空の境界である。よつて空の境界は眞如の境界の一面である。されば空理は佛の手前にあつては直に眞如そのものを指して居る。併しそれは眞如そのものゝ直接的な表現でない點に於いて未だ佛意の全體は盡されぬから方便である。但しこの方便を以て眞實となし、空理を以て眞理の全體となすのは、敎を受ける機執の迷見であつて眞理に相反する。それはどこまでも打破せねば眞理は顯はれぬ。併し空を說いた敎そのものはやはり佛の證悟したまふ眞如の一面の開顯であるから、それは方便說であつて非眞理ではない。從つて破さるべきものではないのみならず、中道眞如に達したものは同時にこの空の境界にも達するのである。よつて空理はそれだけでは眞實ではないが、それが中道眞如の一面を詮すものであると知られたらば空理も亦眞實となるを知るべきである。そして佛が暫く一面の空を說いて眞如の全體を說かないのは調機方便の爲である。よつて佛は四敎の網を張つて一切衆生を一實の眞如界中に引入せしめたまふものである。四敎の別があるのでいよ〳〵佛は一切衆生の慈父悲母たることが知らるゝものである。

【餘說】 四敎の證據。天台大師は何を典據として以上のやうな四敎の判釋をしたかといふに其著『四敎義』一（縮藏陽帙第八六七）によるに、涅槃經の四種不可說及四種四諦と中論の四句偈を以てその證據として居る。卽左の如し。

（四不可說）　（四種四諦）　（四句偈）　（四敎）

生生不可說——生滅四諦——因緣所生法——藏

生不生不可說——無生四諦——我說卽是空——通

不生生不可說——無量四諦——亦名爲假名——別

不生不生不可說——無作四諦——卽是中道義——圓

この中涅槃經の四種不可說は、所謂追泯の說法であつて、四種四諦は追說の說敎である。（涅槃經の下百十一頁參照）四種四諦は苦集滅道の名は同じであつてもその考へ方には四種ある。（四種のことは本文に入つて解說する）それが藏通別圓の四敎である。四不可說はこの四敎の別は暫く衆機に應ずる上の別であつて、佛の手前にあつてはいづれも一佛の所證たる不可思議不可說の心地を開顯したもので其の體四敎の別を泯亡したものである。生生不可說とは惑業（集諦）の因によつて生死（苦諦）の果が生じ、八正道（道諦）の因行によつて涅槃（滅諦）の果を生じ法性の空理に歸入する。これ藏敎の所說であるが、その藏敎の生生がそのまゝ佛の不可說の所證を開顯したものであるといふが生々不可說である。次に生不生の生は因緣所生の法のことで、それがその儘空理の世界である不生不滅のものであるといふが生不生であつて、これは通敎の所說である。不可說は前の如し。不生生は眞如は生滅せざる常住法であるから不生

である。それが無明の緣によつて生滅の萬法を變作するが生である。これは別敎の所談。次に不生不生は萬法がそのまゝ眞如であるから、世間相常住で萬法が常住不斷の生命的存在である。眞如が常住なるのは勿論であるから不生不生といふ。これ圓敎の所說である。かくいろ〳〵に開顯されたが要するに佛の眞如を體驗した不可說の所證から流出し所證を開顯するものに外ならないからすべて不可說といふ。次に中論の四句偈はいろ〳〵に解せられるが、今は因緣所生法の句は。迷悟の法は因緣和合によつて生ずるもので別に實我實法があるではないといふことを示す語であるから藏敎である。その因緣所生の法がそのまゝ空であるといふのは通敎である。又その諸法は眞如隨緣の差別相に外ならぬ。諸法は眞如の假名であるといふは第三句の意で別敎である。諸法の當體が中道眞如であるといふが第四句の意で圓敎である。よつて天台はこれらの大乘經論を證據として四敎の判をなしたのである。この外章安は法華玄義十ノ下(四十右)に四敎の證據として長阿含經の四大敎と月燈三昧經の四種修多羅を擧げて居るがこれはたゞ敎を四分する例を經典に求めたもので、これによつて天台が四敎の判をしたといふのではない。私に更に考ふるに。四敎の判をなせるは地論學派の四宗判の影響を受け五時敎の判は成論學派の五時判の影響によるといふことは否むべからざることである。併しこれらのことは最後に一項を設けて詳論するから今は略して言はぬ。

(一) 藏敎

第一三藏敎者。

【文科】以下藏敎を明す。大科如ノ左

- 初標……第一三藏
- 次釋
  - 一釋=名義……一修多羅
  - 二釋=敎義(二)
    - 初通標=所被機……此有三乘
    - 二別明=聲聞敎(二)
      - 初正明=四諦……初聲聞人
      - 二四諦餘說……然如前所
  - 三釋=三乘行位……略明藏敎
- 後結……略明藏敎

(1) 藏敎の名義

一修多羅藏(四阿含等ノ經)二阿毘曇藏(俱舍婆沙等論)三毘尼藏(五部律)此之三藏名通大小今取小乘三藏也。大智度論云。迦旃延子自以聰明利

根於婆沙中明三藏義不讀衍經非大菩薩又法華云貪著小乘三藏學者依此等文故大師稱小乘爲三藏教

【文科】 先づ藏教の名義を釋する一段。

【句解】 三藏教は經律論の三藏を明す教法のこと。小乘教なり。藏は包含の義で經にはあらゆる佛教を包含し論には佛の論說を律には佛制をそれ〴〵包含するから、經藏等といふ。經が卽藏である。○修多羅は梵音で經のこと。正譯して線といふ。線は花を貫いて花環を作るやうに、言語の線で一切の理義を貫いて散失せしめないから佛教を修多羅といふ。經といふは義譯にて支那で聖人の書を經といふ所から線から轉じて經と飜じて聖人の書なることを顯したのである。○四阿含等は前に出づ○阿毘曇は梵音。譯して無比法といひ論のこと。○俱舍は世親の俱舍論のことで玄奘譯は三十卷。○婆沙は毘婆沙論のこと。この婆沙論は迦膩色迦王の時五百羅漢が迦旃延子の發智論を廣說註釋したもので玄奘譯は二百卷。時に經も律も佛自ら說き自ら制し給ふものなるに、今論は滅後の人師の述作を擧ぐるは云何といふに、佛自ら說ける論は漢土に傳はらないから暫く滅後の人師の論を擧げたまでゝある。尤も佛は論を說き給ふことなしといふ說もあれど、一說には佛亦論を說きこれを結集したものを『相續解脫經』と名けしもこの論漢土未渡なりと。今は暫く後說による。○毘尼は此に律と譯す。○五部律の數へ方には異說あるも、今の著者は『止觀輔行』六ノ二四十に據つて書いたものであるから、それによるべきである。卽ち左の如し。

五部律

論藏は佛說か

一、曇無德部（法藏部）——四分律
二、薩婆多部（說一切有部）——十誦律
三、彌沙塞部（化地部）——五分律
四、婆麤富羅部（犢子部）——律本未渡
五、迦葉遺部（飲光部）——解脫律（但し戒の名目のみにて廣律は傳はらず）

摩訶僧祇律（根本）

この說では摩訶僧祇律は根本上座部の律のことで、それから五部に分れたからそれを五部律とするのであるが。一說に僧祇律は大衆部の律であつて、五部は上座部の分派であるから本末の關係はないといふ。今その是非を論ずるに暇なければ唯著者の意に從ひ『輔行』（荊溪）の說に據ることとする。尤も荊溪は『南山戒疏』一ノ上討を相傳するもので南山律宗の所傳である。孰れにしても佛滅後戒律は優婆離を上首として結集されたが、その後小乘二十部の分裂によつて各派に其の所傳を異にするやうになつた。それで一佛の所制がいろ〳〵の異說を生ずるに至つたものである。○名通大小等とは大乘にも大乘の經律論があつて小乘の三藏と名は相通ずるが今はこの共通の名を小乘に取り切りの名としたといふ。○大智度論等は大小共通の名を小乘取り切り

三藏と小乘

三藏の名の歴史的考察

の名とするは典據あることで天台大師の臆斷ではないと智論と法華經とを引用したもの。智度論は二左十四と四左六十の二文を合糅したもの。○迦旃延子は佛滅三百年の出世にて有部宗の祖『發智論』の著者である。『婆沙』は其後五百の羅漢が發智論を註釋したもので迦旃延子の著述ではないが、註釋書を本書の中に引き上げて婆沙論までを迦旃延子の著作の如くに言へるもの。例せば論註の文を淨土論として引用するが如し。又一說に智論の本文には迦旃延子輩云々とあり、今輩字を脫する歟と。○衍經は摩訶衍經の略で大乘經のこと。この大乘經の對句に婆沙中明三三藏義一とあれば、三藏は小乘のことを言へる語なること明である。よつて三藏の語で小乘を詮すこと龍樹に其の例ありと示す。○法華云は安樂行品(科註五七十)の文で貪著小乘二三藏學者とあればたゞ三藏學者とのみいふて小乘學者なることを顯してあるから、この文を引用したもの。然るに此文に就ては華嚴家の靜法寺慧苑は『華嚴刊定記』三十石に。これは貪二著小乘三藏一學者なれば三藏の言は大小に通じて濫じ易いから殊に小乘の三藏と言つたものであるから、この文は却つて三藏の名を小乘に取り切ることの出來ない證據となるといふて居る。併しそれは一概の論である。蓋しこれは歷史的に考ふるに。成實論の著者がその造論の趣旨を述べて「三藏の實義を顯彰する爲である」といふて居るに徵して知れるやうに、龍樹時代の小乘敎徒は三藏の所有者はたゞ自分等ばかりで大乘敎の關する所でないと、小乘敎徒自ら三乘敎といふ語を振り舞して大乘敎(小乘敎の如き獨立した戒律藏を有しない)に對して小乘敎が佛の眞說であるといふことを自負したのである。それが轉じて後には小乘敎を呼ぶ特別の語となつて、三藏といへば小乘のことなつた。それで龍樹はその通用語をその儘用ゐたものである。この龍樹敎の流を汲んだ羅什の飜譯(智度論も亦同人の譯)にかゝる法華經に三藏とあるを直ちに小乘の意味にとるのは決して無理なことではない。そして又『集註』にも指摘して居る樣に小乘三藏と語を重ねたのは三藏が大小に通ずるから簡別の爲に小乘といふたのではなく、あれは四言一句の偈頌であるから、四言の成語の爲に小乘三藏と重ねて言ふたものと見るべきである。それで天台大師自らこの法華の文を以て三藏の名を小乘に取り切る證據とされた。(『四敎義』一、縮藏陽ノ九四左十)。併し既にかういふ疑議を挾むことが出來る文は證文としては價値の乏しいものであるから、これを撤回するも差支なからう。たとひ法華の文は證文とならぬとしても智度論の文は疑議を容るゝ餘地はないからそれで差支ない。それはさて。かく共通の名をどうして小乘に取り切るかといふに私には前に叙べたやうに語の歷史的意義から說明すべきであると考へるが。『集註』には三故を以て說明して居る。卽ち一には小乘の三藏は部帙別なるが故に。これは大乘には戒律はあるが例せば梵網戒が梵網經の一部であるやうに、いづれの戒も經の中に合せ說いてあり小乘律のやうに別の部帙がない。二には小乘の三藏は隔異するが故に。これは所詮の法體に就て言ふたも

三藏小乘の三由

ので、小乘では律はたゞ教團生活を圓滑ならしむる爲の規定に過ぎないものであつて、經に說かれた教法が自然に生活の上に發露したものではない。(勿論これは比較していふことで絕對的のことではない)それに對して大乘の律は單な規定ではなく、たとひ佛がこれを規定することがなくとも、大乘經によつて養はれた者の生活は自ら戒律を生み出さねばならぬ。それで大乘では律は教法の一部であり教法は亦律の內的原理であるから律の一部ともいへる。この故に所詮の法體に於いても大乘は經律が融通し小乘はそれが隔異して居る。よつて三藏と取り立てゝ言ふのは小乘の方がより適切である。三には小乘の三藏は舊醫を破するが故にと。舊醫はいはゆる外道の方に戒定慧の三學が劃然と區別されてあるから、それに對して設けられた小乘ではやはり三學が區別されてある。卽ち邪に對して正を顯す爲には相手のもつて居る範疇によつて顯すのが最も便利であるから三藏は別々になつて居る。大乘はさういふ必要が少ないから三學の區別がハッキリして居らぬ從つて三藏の別が明かでない。この第三の理由は前の二故のよつて來る由來を叙べたものである。これらの三故は私に所謂歷史的意義と矛盾するものではなくて。かういふ根本的に小乘には大乘に比してとり立てゝ三藏といはるゝ義理が存在して居るから小乘教徒が自ら三藏教となのりて大乘教は三藏教卽佛教に非ずと自負するやうになつたのであるから。それが一般的の名と轉じたものである。更に考ふるに天台大師が殊更小乘の名の

代りに藏教の名を取られた(それは印度ではとも角も支那では混同され易い名である)のには、もつと深い心理的な理由が伏在して居る。それは小乘の名は大乘に對する名で價値批判の名辭である。從つて小乘の名は大乘教徒のみに許されて小乘教徒は決して許さない　天台に從へば阿含經は小機誘引の說法ではあるが、併しそれであるから淺近な教として判定することは大なる誤謬である。何となればそれは佛の手前では一乘法中の三乘法であつて、その教の內部には佛の所證が傾注されてあるので、涅槃經に所謂生生不可說の大法である。されば阿含の所說を小乘法といふことは佛教に對する凡情の妄判に過ぎない。決して當を得た名でないばかりでなく誘法罪を犯すものである。これは天台が古師の教判中に誑相不眞といふ名を以て般若等の經典の名とするを破斥して誘法の咎を犯すものであるといつて居るに徵して知るべきである。然るに三藏の名は何等褒貶を加へざる名である。よつて小乘の名を棄てゝ三藏の名を特に採用された天台の心理を讀むべきである。華嚴家に愚法小乘と呼ぶに比して天台家の敬虔な態度は注意すべきである。これが三藏の名を取つた根本的理由であつたであらう。○此等文は智論及法華の文をいふ。大師は天台大師のこと。

(2)　四　諦　教(藏教の教義)

此有(レニリ)三乘根性

【文科】これより以下藏教の教義を明さんとするに際し、先づ所被の機を通じて擧ぐる也。

【句解】三乘根性とは聲聞緣覺菩薩の三人のこと。乘はのりもので教法のこと、人は教法の乘物によつて涅槃の彼岸に運ばれるから教法を乘といふ。それから轉じて教法に乘ずる人を乘ともいふ。今は乘る人のこと。根性は人の性質持前のこと。『輔行』二ノ四四右能生を根と爲し數習を性とする」と釋し、根から幹や枝葉を出すやうに、われ〳〵の天稟の持前から善惡の二業を能く生ずるから持前のことを根といひ。習性（ならひせい）となつたものがわれ〳〵の持前となつたから性といふ。

【餘說】三乘人の解說。藏教は三乘人を對機として而も聲聞には四諦教、緣覺には十二因緣教、菩薩には六度教と別々な教法を與へてそれ〴〵の根機に應じて修道せしむるのが藏教の特色である。それでこれら三人がどんな風に違つた根性を持つて居るかを知つて置かねばならぬ。それは既に聲聞とか緣覺とかといふ語に能くその根性の相異を顯して居る。聲聞は佛の聲教を聞いて證を開く人の謂である。卽ちたゞ教によつて救はれる人である。自省し內觀する餘祐もない亦思慮も分別も少なく唯それからそれへと襲ひ來る環境の刺激に逐ひ廻され汲々としてその日暮をするより外に途のない最下の凡人である。かういふ鈍根の根機には自省內觀を要求する教は入らぬ。唯强い生命の力を以てそれに望む先覺者の言のみがその最鈍

聲聞

緣覺

最下の凡人を導いて眞實道に向はしむる。佛の聲教をたゞ聞くことによつて救はれる聲聞は己が思索や計量をすてゝ只管ら佛に歸依し柔順に教を聞信する愚鈍の下根ではあるが、それだけ宗教的氣分の豐富な根機である。釋尊教團の中心はこれら鈍根の佛弟子にあつた。次に緣覺は緣によつて覺るものゝ謂で、佛の聲教を機緣として自省內觀し、以て內性の光を開覺するものが緣覺である。この場合に佛の聲教は內性の光を導き出す緣に過ぎないのであるから、それは必ずしも佛の聲教を待たねばならぬわけではない。若しその聲教を聞くことが出來なければ飛花落葉の自然界の默示を以て置き換えても差支はない。たゞそれらの機緣に攀つて內省自觀すればやがて內性の扉は開かるゝ。聲聞がどこまでも佛世に値ひ佛教を聞きたてまつらねば開悟することの出來ぬのと大に趣を異にする。緣覺は機緣を得れば家を出で山に入り沈思冥想自己の道を自ら開拓することの出來る天才である。ところが聲聞緣覺の二人はたゞ自己の道自己の解脫だけに專注するばかりで、利他といふことは問題とせぬ。いはゞ自己頭上の問題に急迫されて他の問題にまで手を出す餘祐のない人々であつた。古來聲聞根性といふ語は利己主義の代用語とせられて來たが、これは決して其意を得たものではない。何人も眞摯に自己の問題に當面した時に他を顧みる餘祐を見出さぬであらう。これは自己を虛うして他のことのみに浮身をやつす輕薄な態度よりどれだけ緊張したものかも知れぬ。他の

問題は自己の問題の解決によつて出發せねばならぬ。それはさて、これらの自己にのみ專注する二人に對して菩薩は自利と共に利他を考へる。換言せば利他を完成せずには自利の完成は不可能であると眼がさめたが菩薩である。いかに自己のみが證りすましても隣人を愛する心もなく隣人を同信の世界に持つことなしには到底堪えられないのである。卽ち菩薩は社會的自己に眼がさめてこの自己の開悟を理想とする上根の人をいふ。菩薩とは菩提薩埵の略で覺有情・大心衆生・大士等と譯す。以上三乘人のいかなるものであるかを叙べたが、聲緣菩がかけ離れた人々ではなく、いつの敎界にもこの三類の根性は存するものであることを知るべきである。而して諦緣度の三敎を與へたまふ所にこの三類の機に應同したまふ所以を知るべし。四諦敎は苦諦を最初に列し十二因緣敎は同じく輪廻を說くにも無明(集諦)を最初に置く。そこに聲聞には內心の煩惱をいかにすべきかといふことが一層頭上に急迫した緊要事である。よつて生死の苦果を先づ說き、內心の煩惱に惑へる緣覺には無明が迷の因であると指示したまふ。更に社會的自己を救濟せんとする菩薩には布施波羅蜜を第一に數へて居る六度敎を垂れたまふのも、やはり應病與藥の妙を盡したまふものである。

初聲聞人依生滅四諦敎

生滅は藏敎の大綱

【文科】これより以下聲聞四諦敎を釋する中、先づ總標の語。(藏敎の敎義は三乘に亙れども今は且く聲聞敎のみを擧げ緣覺の十二因緣敎と菩薩の六度敎とは次の行位を明す下に併せ釋す。これ一は叙述の便宜によるものであるが、一は聲聞が藏敎の正所被であるからそれを代表的に擧げたものである。)

【句解】初聲聞等は、次に緣覺と菩薩のことを明すに望めて初といふ。但し餘の二は行位中に攝め明してある。○生滅四諦は涅槃經の四種四諦中の第一の名にて、今この語を以て藏敎の四諦の明し方を顯したもの。生滅とは諸法はすべて因緣の離散によつて生滅するもので、一つも生滅し轉變しない常住不易のものはないといふことで、これが藏敎の大綱である。四諦に就いて言へば、苦諦の生滅といふのは生死の苦果はすべて暫くも止まらずに生滅變異して遷りかはるをいふ。集諦は生死の苦果を招く原因たる煩惱のことで、貪瞋痴の心が緣に觸れ時に從ひ互に起つて移りかはり行く故に生滅といふ。道諦は煩惱を對治する戒定慧の三學のこと。この三學を修するに從つて煩惱が漸次に對治消滅し、それと入れかはりに三學の德が生起する。亦反對に修道を怠れば煩惱がもり返してその德を失するといふ風に一進一退一生一滅する故生滅といふ。滅諦は修道の因によつて得る涅槃のことで、迷の因果たる苦集を滅して得る故に滅といふ。迷と入れかはりに得る悟にして生死を滅して涅槃が生ずるからやはり滅諦も生滅といはるゝ。尤も俱舍婆沙では滅諦は無爲常住のものとすれど、天台は成實論等によつて滅諦も亦人の上に證る德であるから有爲無常とする。かく四諦共に因緣の離合集散によつて生滅するもの

であると談ずるを生滅の四諦といふ。

(a 苦諦

言ヒ四諦ト者。一ニハ苦諦ナリ二十五有ノ依正ノ二報是ナリ。言ヒ二十五有ト者。四洲四惡趣六欲幷ニ梵天四禪四空處無想五那含ナリ四洲四惡趣成レ八六欲天幷梵王天成ニ十五ニ四禪四空處成ニ二十三無想天及那含天成ニ二十五ニ別スレハ則チ二十五有總スレハ則チ六道ノ生死ナリ。

【文科】これより四諦の一々を解説する中、初に苦諦を明す、その中、今は先づ苦諦を總括して叙べる。

【句解】苦諦の諦は不虛審實で間違なき眞理のこと。この世界はすべて苦ならざるものはない。これ間違なき眞理であるから苦諦といふ。凡夫はこの世界に住してボンヤリと苦惱を感ずるけれども、それを眞理として確認することは出來ぬ。よつて凡夫には苦はあれど諦はない。それが眞理であると敎へるが佛敎である。○二十五有の有はタモツの義でこゝに一の果報があればそこにはそれを生ずべきだけの過去の惑業の因をたもつて居り、又それが一つの所作をなせば必ず未來の果報をたもつて失はないからこの果報を有といふ。すべてこの世界の果報はそれ〴〵の因果を保つて失はぬゆへ有と名けらるゝ。○依正二報は果報を有情と有情の依つて住する國土等すべての外界の事物との二つに分け、有情は果報の主たるが故に正

報といひ、國土等外界の事物は有情に依止する果報なれば依報といふ。○言二十五有等は二十五有を列擧す。今圖示せば如左。

(備考) (1) 四惡趣と人間と天上(六欲天以上四空處天までを含む)を六道といふ。

(2) 二十五有中梵天・無想天・那含天の三天はいづれも四禪天中の天なれど、重れて擧げる。その理由は外道がこの三天を執じて涅槃なりとする故に、特にそれを出して迷塗なることを示す爲なり。

(3) 五那含天は五天に分れるも二十五有中では一天として擧げる。
(4) 天部は次下百五十四頁に詳しく圖示す參照。

一地獄道

一地獄道梵語捺洛迦又語泥黎此翻苦具。而言地獄者此處在地之下故言地獄。謂八寒八熱等大獄。各有眷屬其類無數。其中受苦者隨其作業各有輕重。經劫數等其最重處一日之中八萬四千生死經劫無量作上品五逆十惡者感此道身。

【文綱】六道を別して明す中初に地獄道を明す。

【句解】捺洛迦も泥黎も共に梵音を寫したもので、前は新譯、後は舊譯で用ふる語いづれも同じ意味で苦具と飜譯する。苦具は道具のことで地獄は罪人の責め道具であるから捺洛迦等といふ。○地獄は地下の獄で地下一千由旬(或は五百由旬)に到れば罪業ある人々を責め苦しめる牢獄があるそれを地獄といふ○八寒八熱等は地獄の種類を擧ぐ。八寒地獄のことは俱舍論十一左に明す。八寒は一頞部陀は寒さの爲に身體がブク〳〵と膨れること。二尼剌部陀は膨れた身體が更に裂けること。三頞哳吒は舌端でうめく聲のこと。寒烈の爲に高聲を發することが出來ずたゞ舌端を動して苦しみうめく地獄なり、その聲を地獄の名とす。四嘑々婆。これは唇端を動かして苦しむ聲のこと。寒さの爲にもう舌端も動かず、たゞ唇端でうめく地獄をいふ。五唬婆は喉の内で出す聲のこと。六嗢鉢羅は青蓮。これは寒氣の爲に身體が青色になつたことを形容する語。七鉢特摩は紅蓮。肉がえみ出して身體が紅色に變ずるをいふ。八摩訶鉢特摩は大紅蓮。更にそれが甚しくなつた所をいふ。○八熱地獄のことは正法念經にも近くは往生要集上本にも出づ。一等活。二黑繩。三衆合。四嗥叫。五大叫。六炎熱。七極熱。八阿鼻(無間)をいふ。因にこれらの地獄は竪に重なつてあるか横に併んで居るかといふに兩說ありて一準し難し。○各有眷屬は八寒八熱の大地獄にはそれに附屬する小地獄がありといふ。八熱地獄の一々の獄に四門ありてその門毎に四つの小獄が附屬して居る。それ故一獄に十六の附屬の小獄があり て八大獄には百二十八の眷屬地獄、それに本地獄の八を合して百三十六の大小獄があるわけとなる。八寒地獄も亦これと同じく百三十六の大小地獄より成り立つて居る。一說に八寒は八熱の傍にある地獄で別に附屬の小獄はないといふ。尙この他に孤獨地獄といふて深山幽谷等に孤立した地獄があつてそれに鬲子(鬲は鼎の類で山谷中に鼎だけがあつてそこで罪人を苦しむる小地獄のこと)輕繫(これも山谷の間に孤立してある地獄の一種)等の別がある。よつて其類無數といふ。○其中受苦者等は同じ一地獄でも罪の輕重によつて受苦にも輕重があつて一樣でないといふことを叙ぶ。○其作業は過去に於いて作つた罪業のこと。○經劫數等は受苦の年時も亦罪の輕重によつて長短がありとなり。○最重處は最も罪の重き者を例示す。○作上品五逆

八寒地獄

八熱地獄

善惡の三品

等は地獄へ墮する業因を叙ぶ。五逆は殺父と殺母と殺阿羅漢と出佛身血と破和合僧とのこと。十惡は殺生と偸盗と邪婬（以上三は身業）妄語と綺語と惡口と兩舌（以上四は口業）貪と瞋と癡（以上三は意業）のこと。上品は中品下品に對する語で善惡二業を三品に分つ、上品の惡は惡中の最をいふ。この善惡を三品に區別するは何を標準とするかといふに、善惡を行ふものゝ心としかけられる相手の云何と、それを反省する時の前後との三によつて區別せらる。卽ち一に約心（當事者の心理）とは、當事者が極めてハツキリした意識を以て行動した場合は上品で、ボンヤリした意識でやつた場合は下品。その他は中品。これは善惡共にさうである。二に約境（相手方の勝劣）は、若し善をなす場合にしかけらるゝ相手方が劣れる場合は上品で、例せば蚊蚋を殺さぬのは上品の善である。又相手方が勝れたものであつたらば下品である。例せば父母等を殺さぬのは下品の善である。其餘は中品である。尤も惡をなす場合にはこれと反對に相手方が勝れたものであつたらば上品で例せば父母を殺す如きは上品の惡である。劣れるものを相手とする場合は下品で其餘は中品である。三に約時（反省時の前後）は、すべて一の行爲をなす場合はこれを三時に分けて見ることが出來る。卽ち欲作（決行せんとする端的）正作（決行した端的）作已（決行し終つた端的）の三時である。決行し終つても尙ほ悔ふることなき場合は上品である決行し終つてから後悔ゆるものは中品で、決行した端的に悔ゆる場合は下品である。これは善惡共にさうである。

二畜生道亦云旁生。此道徧在諸處。披毛戴角鱗甲羽毛四足多足有足無足水陸空行。互相呑啖受苦無窮。愚癡貪欲作中品五逆十惡者感此道身。

【文科】第二畜生道を明す一段。

【句解】畜生は牛馬のやうに人に畜へられて生きて行くものであるから畜生といふ。○旁生は立つて歩むことをせず横になつて歩き亦從つて形も横廣であるから旁生といふ。○此道徧在は畜生は五道に通じてどこにでも居るをいふ。但し夜摩天以上には四足の畜生なしたゞ妙色鳥のやうな畜生があるのみといふ。○披毛は犬馬の如き走獸。戴角は牛馬の如き角あるもの鱗甲は魚類（鱗）と龜鼈類（甲）をいふ。羽毛は鳥類。○四足兩足等は足の多少有無に就いて種類を擧ぐ百足蟲は多足、蛇は無足なり。其他可レ知。○水陸空行は居り場處に就いて別を示す。畜生の住處はこの三に盡きる。○互相呑啖等はこの道の受苦の相を叙ぶ。蛇が蛙を呑み猫が鼠を啖ふの類、互に弱肉强食して苦を受くること窮りなし。○愚癡貪欲等はこの道に墮する業因を叙ぶ。畜生は其性愚痴なればたゞ日夜食を求むることのみに汲々として其他を顧みない。そして又貪

三餓鬼道

欲にしてあくことを知らずこれによつて弱肉強食止む時はない。かゝる果報を受くることは過去世に於いて愚痴にして而も貪欲なりしが爲である。

三餓鬼道梵語閻黎哆此道亦徧諸趣有福德者作山林塚廟神無福德者居不淨處不得飲食常受鞭打塡河塞海受苦無量詔誑心意作下品五逆十惡感此道身。

【文科】第三餓鬼道を明す一段。

【句解】閻黎哆は閻黎哆の誤。尤もこの誤は『止觀輔行』二ノ二を踏襲したもので諦觀が初めて誤つたのではない。○此道亦徧諸趣は餓鬼の住處が畜生と同じく上は天上より下惡趣に亙つて住居するといふ。尤も正しくの居處は地下五百由旬の閻魔王界だといふ。○有福德者等は手近く閻浮洲卽此界の餓鬼に就いて叙べたもの。餓鬼にもいろ〳〵の種類がある。山林塚廟の神と崇められるものは最も福德ある者で飲食を得るに差支ないものであるが、人糞の中に生存して之を食ふものは下等な餓鬼の類である。○不得飲食は全く飲食することの出來ぬ最下等の餓鬼である。この無財のものにもいろ〳〵あるが、炬口といつて腹中に熱氣ありて常に口より火を吹く餓鬼や、又針咽といつて咽喉は針の如く小さく腹は山の如く大なる餓鬼は食慾非常に熾なれども食が喉に入らない。又臭口といつて口中腐敗して臭氣甚しく食はんとすれば忽ち吐氣を催して食ふことの出來ない餓鬼もある。○常受鞭打は餓鬼が諸天にこき使はれ刀杖を以て打たれること。それで餓鬼が道げ廻り爲に河を塡め海を塞ぐやうになる。○誑誑心意等は此道に墮する業因を明す。誑は人に誑ひおどやうずをいふこと。誑は人を欺きだますこと。

四修羅道

四阿修羅道此翻無酒又無端正又無天或在海岸海底宮殿嚴飾常好鬪戰怕怖無極在因之時懷猜忌心雖行五常欲勝他故作下品十善感此道身。

【文科】第四阿修羅道を明す一段。

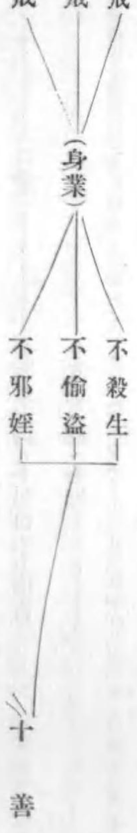
【句解】此翻無酒とは。修羅がその昔天人の甘露を飲むを見て、まけまいと思ひ酒を造らんとて四天下の花を採つて大海中に釀して置いたが、魚龍の業力で之を遮げて海水の味を變せしめなかつたから、修羅大に怒つてそれより以來斷じて酒を飲まぬことにした。そこで修羅を無酒と呼ぶやうになつた。○無端正は容貌の醜きこと。但し醜いのは男ばかりで、女の修羅は容貌端正で帝釋天の妻となつた舍脂といふ修羅王の女の如きも非常な美人であつたといふ。○無天は天德の無いといふことで、修羅は天德はないが諸天に次ぐの勝れたる果報を持つて居るから無天といふ。○或在海岸海底等は住處を明す。修羅のあるものは須彌山の半腹の巖窟に

住するものもあるが、主として海岸海底に住する故に今云々す。○怕怖無極は。他と戰ひ爭ふものは他を信ずることが出來ないものであるから、他を疑ひ疑心暗鬼を生じて他を怖れるとも人一倍強いものである。自ら信ずることの強いものは他と爭ふこともなく從つて他を怖るゝこともないものである。爭を好む者は强者ではなくて却つて弱者である。○在因之時等は此道に受生する業因を叙ぶ。○猜忌心は猜はそねむこと忌は他人の盛事をいま〳〵しく思ふをいふ。○五常は仁義禮智信。この五つの道は天下の常道で古往今來易らぬ故常といふ。行五常は一般に世間の道德を守り行ふことをいふ。行爲は善いことなれども、動機がよくない、卽ち人の道德をみていま〳〵しく思ふから五常を守る故、其の果報は勝れてゐれども、常に人の手許ばかりを苦にして安ずることが出來ず、好んで戰爭をし我と我れで苦しんで居るが阿修羅の業報である。○十善は前の十惡に飜對した身三口四意三の十善である。

五人道四洲不同。謂東弗婆提（壽五百歲）南閻浮提（壽一百歲）西衢耶尼（壽二百五十歲）北鬱單越。（壽一千歲命無中夭聖人不出其中卽八難之一）皆苦樂相閊（ハルルノ）在因之時行五常。五戒。五常者仁義禮智信（ナリ）五戒者不殺不盗不邪婬不妄語不飲酒行（トリスルモノ）中品十善。感此道身。

【文科】第五に人道を明す一段。

【句解】人道四洲。須彌說では須彌山を取り卷く七香水海七金山の外周に第八の醎海ありて最外廓の鐵圍山によつて圍まれて居る。その醎海の四方に四洲ありてこゝに人類が棲息するといふ。よつて人道四洲といふ。海中の島國なれば洲といふ。○弗婆提は梵語。新譯に毘提訶といふ。○閻浮提は新譯に瞻部洲といふ。この世界のこと。○衢耶尼は新譯に瞿陀尼といふ。○鬱單越は新譯に俱盧洲といふ。無中夭は北洲は果報勝れ壽千歲ときまりて夭折（わかじに）するものなし。聖人不出は北洲には佛出世せず依つて佛法を聞くことが出來ぬ。あまり果報が勝れるから聞法の機緣生せぬからである。これ八難の隨一。八難とは聾盲暗啞と世智辯聰と佛前佛後と無想天と北洲と地獄と餓鬼と畜生となり。佛法の利益を得ること能はざるより八難といふ。但し佛前佛後は佛出世の前後を一般にいふのではなく佛法のなき時のこと。○五常は世間の道德。五戒十善は佛法の道德。在家出家を論せず持ち行ずべき德目である。五戒と十善とは開合の異にして別のことではない。如左。



不妄語戒――（口業）――不妄・不綺・不惡口・不兩舌―
不飲酒戒――（意業）――不貪・不瞋・不痴――

（備考）不飲酒戒を持てば自ら意業の三善に攝むるは云何といふに、飲酒を禁ずるのは貪瞋痴を生ぜぬやうにする爲であつて、不飲酒戒を持てば自ら意業の誘引が出來るからである。

六天道

六天道二十八天不レ同カラ欲界六天色界十八天無色界四天初欲界六天者。一四天王天居須彌山腹二忉利天居須彌山頂自有三十三天二天單修上品十善得レ生其中三夜摩天四兜率天五化樂天六他化自在天已上四天空居修上品十善兼坐未到定得レ生其中次色界十八天分爲四禪初禪三天梵輔大梵二禪三天少光無量光光音三禪三天少淨無量淨偏淨四禪九天無雲福生廣果已上三天凡夫住處。修上品十善坐禪者得レ生其中。無想天外道所居。無煩無熱善見善現色究竟已上五天第三果居處。上之九天離欲麁散未出色蘊故名色界。坐得禪定故得禪名。三無色界四天空處識處無所有處非想非非想已上四天只有四陰而無色蘊故得名也。

【文科】第六天道を明す一段。

【句解】二十八天は左の如し。

欲界六天
一、四天王天（東持國・南增長・西廣目・北多聞）
二、忉利天（コレニ三十三天アリ中央ガ帝釋天）
三、夜摩天
四、兜率天（空）

二十八天
五、化樂天
六、他化自在天（居天）

色界十八天
一、初禪三天。梵衆・梵輔・大梵。
二、二禪三天。少光・無量・光音。
三、三禪三天。少淨・無量淨・徧淨。
四、禪九天。無雲・福生・廣果・無想・無煩・無熱・善見・善現・色究竟。

無色界四天
一、空處天
二、識處天
三、無所有處天
四、非想非非想處天

○欲界。此界の衆生は下は地獄より上は天界まで食欲色欲眠欲等の諸欲に耽るから欲界といふ○色界は前の諸欲を離れて男女の別なく光明を食とし衣自然に至り果報甚だ勝れたるも。未だ地水火風の四大種所造の色（物質）によつて構造された世界を離るゝことが出來ないから色界といふ。尤も欲界の如き穢惡の色はなく清淨の色のみなりといふ。○無色界は此界には四大種所造の色全くなくたゞ心法のみの世界なれば無色界といふ。○四天王天は須彌山の中腹の四方に一天づゝある天の總稱。東は持國天・南は增長天・西は廣目天・北は多聞天。○忉利天は須彌山の頂上にある天の總稱にて、忉利は三十三と譯し、山頂の四方の角に各々八宮殿ありて其の中央の帝釋天と合せて三十三天ありといふ。○空居は須彌山の上の虛空に諸天が逐次に積み累つて

あるをいふ。○未到定は色界初禪の根本定の方便のことで、未だ根本定に到らぬといふことで未到定といふ。この方便定が一歩進めば初禪定になる。初禪の根本定は初禪天の果報を得るのであるから、未到定は他化自在天の生因となるもので、欲界天に生るゝには正しくは散の十善・傍には欲界定によるのであるが、今は最上の他化自在天の生因だけを擧げて兼坐未到定といつたものである。○禪は梵語具には禪那靜慮と譯し心を一つにして散亂せしめず(靜)妄分別をやめて正しく考へる(慮)の義である。色界はこの禪定によつて受ける果報であるから四禪天といふ。禪定の淺深によつて四天に分ける。四禪の別は左の如し。

初禪　五支—覺(尋)。觀(伺)。喜。樂。一心。
二禪　四支—內淨。喜。樂。一心。
三禪　五支—捨。念。智。樂。一心。
四禪　四支—不苦不樂。捨。念淸淨。一心。

これはそれ〴〵の禪定の心理を擧げたものであるが、初禪は覺觀の心所があつて思慮分別するよつて初禪までは言語がある。二禪以上は覺觀の心所がなくなるから思慮分別することなく言語もなし。そこで世界の主となつて統御のはたらきをする大梵天は思慮分別のある初禪の第三天に居する。第二禪になれば思慮分別を離れるから世界統御は出來ぬ。覺觀の心所のある初禪のみ故初禪のことを覺觀俱禪といふ。第二禪は思慮分別を離れて內心がすが〳〵してわけもなく喜悅の心で一杯になる。そこで第二禪を喜俱禪といふ第二禪以上言語なく光明を以て言語となすといふ。第二禪は更に前のやうな取り立てゝ喜ぶといふやうなあら〳〵しい心所から離れて而も心底から快樂に充つる禪定ゆへ樂俱禪といふ。第三禪には喜なく樂のみなり。第四禪になるとその樂の「こゝちよさ」もなくなりて不苦不樂に住して心少しも動かぬやうになる故捨俱禪といふ。○凡夫住處は第四禪の第三天までが凡夫の住處でこれ以上は聖者の所居となる。凡夫は煩惱を斷せぬものをいひ見惑所斷の預流果以上は聖者である。○無想天は外道の最後の涅槃と思へる所で、此天に生れると生れる時と死ぬる時だけ暫く心あるも、其の中間の五百大劫は心想無く枯木の如くであるから無想天といひ、外道は涅槃と思ひ誤るなり。○已上五天第三果居處は五那含天のことで、第三阿那含果(不還果)の者が生れる天である。○上之九天離欲等。欲界のやうな麤動散亂の心身を離れたがまだ色の籠を出るとはせぬ。色は四大種所造の物質のこと。物質は心と違ひ有礙不自由なものであるから之を籠に喩へ、色界は物質の世界から離れ切らぬ世界であると示すのである。そしてこのことは第四禪の九天だけのことではなく色界十八天全體にかゝること故に。文に上之九天とあるは上之十八天と訂正すべきである。○空處はすべての色を離れてたゞ心に緣じて見るのは虛空だけになつたところを空處といふ。○識處は

虚空にも心をかけずたゞ能縁の心識の念々に動いて行く樣だけを見つめる。○無所有處は。更に能縁の心識にも心をかけず、どこにも心をかけぬをいふ。○非想非々想處。前のやうにどこにも心をかけずに居ればとて無想の枯木の如くでもない(非々想)勿論あれこれと心で見るのではない(非想)いはゞ心のはたらきの非常に微細なるをいふ。○有四陰而無色蘊は。五蘊中受想行識の四蘊は心的作用にて色蘊は物質をいふ。よつて心のみで無色なりといふこと。こゝに四陰といふは新譯の蘊を舊譯では陰といふから、舊譯の言を用ゐたもので義は四蘊のこと。併しすぐ後には新譯の言遣で色蘊といひ前後不整なるは穩當ならず。陰か蘊かいづれか一方にすることを可とす。

上來所釋從地獄至非非想天雖然苦樂不同未免生而復死死已還生故名生死

【文科】上來六道のいかなるものかを解説したから、今はそれら六道がすべて生死界なりと示す一段。

【句解】苦樂不同。四惡趣は苦、人界は苦樂半ばし、天上界は樂なれば苦樂不同といふ。しかしそれは相對的にいふことで、天上界にも亦五衰の苦ありて生死輪廻の巷なれば亦苦界なり然れば六道はすべて苦ならざるはない。

此是藏教實有苦諦。

【文科】苦諦の一段を總結する語。

【句解】實有は藏教の教義を詮示する語。藏教では生死の苦果は因緣和合によつて出來上つたものではあるが、それに客觀的の確實性を認める。例せば人間界は常に生滅變化して暫くも同じ相を持續しないが、併しその人間界はどこまでも苦惱に充ちて居る果報であるから、たとひこゝに人があつて「苦界ではない」と思ひ改めやうとしてもそれは到底出來ることではない。いかに立派な心を持つた人があつても又佛にとつても人間界は樂土ではなくて苦界である。なせなればこれは惑業所感の土であるから、どこまでも苦界である。かういふやうに生死界の苦惱といふことはたゞわれ〳〵が苦しいと思ふから苦しく見えるといふ主觀的な事實ではなくてそれを思ふ思はぬの主觀の云何に拘はらず苦界はどこまでも苦界である所の客觀的事實であるよつて實有の苦諦といふ。通教の人々が苦はたゞ衆生の主觀の事實であつて、苦と思ふ主觀の迷夢が破れて見れば、苦と思ふて來たものそのものが法性それ自らであると、苦諦をたゞ主觀の上の事實として考ふるに對して、藏教では因緣に實を認めて客觀的事實として考ふる故に實有といふのである。

(b) 集諦

二集諦者卽見思惑又云見修又云四住又云染汚無知又云

取相惑又云枝末無明又云通惑又云界内惑雖名不同但見思耳。

【文科】自下四諦歌の中第二集諦を明す。其の中初に總じて集諦の體ものがらを明す。

【句解】集諦とは集とは苦果を招き集めるものといふこと。苦果を招集する原因となるものは惑と業なり。卽ち惑は意に惑を起すこと、意に惑が起れば自ら身口二業に發動して行爲所作をなす。それが業なり。この業が因となつて苦果を招き引く。されば嚴密にいへば惑と業が集諦であるが、前に苦諦の下で善惡二業のことは述べたから、こゝでは惑卽ち煩惱だけを擧げてある。○卽見思惑は先づ集諦のものがらを擧げたもの。卽ち見惑と思惑との二が集諦の體ものがらである。見惑は四諦の理を明らめざる考へまちがいをいふ。思惑は相手の事物に對して愛着する念をいふ。なぜ見惑思惑と名くるかといふに各々二釋あり。左の如し。

見思の二釋

見惑
- (1) 見所斷惑の略。この時見は四諦の眞理を照見することで、眞理を見ることによつて斷せらるゝ惑といふことで見惑といふ。(これを從解得名といふ)
- (2) 見卽惑の義。この時見は四諦の理を知らざる迷妄の見解をいふ。この迷見がそのまゝ惑であるから見惑といふ。(これを當體受稱といふ)

思惑
- (1) 思所斷惑の略。この時思は前の見道で證りし四諦の眞理を重ねて心に思ひ明らむることで。この眞理を重慮することによつて斷せらるゝ惑(それは愛著の煩惱である)を思惑といふ。(從解得名)
- (2) 思卽惑の義。この時思は愛著の心をいふ。この愛著の心(思惑は愛の外に瞋と癡と慢とあれど其の中に於いて愛最も力强し)の當體が惑であるから思惑(或は愛惑)といふ(當體受稱)

二惑の異名

○又云見修等以下に見思二惑の異名を擧ぐ。見修は見惑は見道所斷の惑なれば見惑といひ、思惑は修道所斷の惑なれば修惑といふ。見道は預流果のこと修道は一來果不還果をいふ。○四住は見一切處住地と欲愛住地・色愛住地・無色愛住地の煩惱のこと。前一は見惑後の三は思惑なり。見惑は眞理に達せざる惑であるから三界に別々の眞理はないから三界を緣じても畢竟一の四諦の眞理に惑ふに過ぎぬから一切處(三界のこと)といふ。住とは我等は惑によつて住著して三界を離れることが出來ぬから惑を住といふ。次に思惑は三界の事物に愛著する惑であるから、三界を緣じて別々に愛著の心を生ずるから斷ずる時も又別々に斷せねはならぬ。よつて思惑を三に開く。愛は思惑中最も力强くわれらを三界に住著せしむるから取り立てゝ擧げたもの。○染汚無知は不染汚無知に對する語で見思二惑のことを指す。この二惑は其體穢はしいもので惡趣の果を招く、すべて惑の行く處はよごし汚さゞるはないから染汚といひ、無知は四諦の理を知らず又三界の事物の眞相を知らぬから見思二惑が生ずる。よつて二惑を總じて染汚無知といふ

○取相惑は亦見思二惑の總稱である。取相とは皮相を取りて執着することで、たとひ涅槃とい

ふやうなものでも皮相だけを見て空なものぢやとキメコンダならば取相であるから惑である。今は三界生死の法の皮相を見てそれが因縁和合の法なることを知らず實法ありと取著する故それを所有したいといふ思惑が起る。又因縁の理を知らざるは見惑である。依て見思二惑は三界取相の惑である。○枝末無明は根本無明に對する語。根本無明は中道眞如に達せざる惑であるこの惑があるから三界を縁じても其眞相たる空理を見ることが出來ず(見惑)、空理を見得ぬから實我實法と思ひ惑つて愛著するやうになる(思惑)。されば見思二惑は三界の空理に達せざる惑であるが、その惑は中道の理に達せざる無明の惑から派生された枝末の惑といふことで枝末無明といふ。無明は中道の理に達せざる惑の名である。尤も枝末無明の名は藏敎當分でいふにあらで、大乘敎でいふ名である。以下の異名すべて然り。○通惑は聲・緣・菩の三人が共に通じて斷ずる惑といふこと。見思二惑の異名である。これに對して無明惑は菩薩に局りて斷ずる惑であるから別惑といふ。○界內惑は三界に迷ふ惑のこと、見思二惑は三界の生を引く源因であるから界內惑といふ。これに對して無明は界外の淨土に生ずる源因であるから界外惑と名く。

初釋見惑有八十八使所謂一身見二邊見三見取四戒取五邪見已上利使六貪七瞋八癡九慢十疑。已上鈍使此十使歷三界四諦下

增減不同成八十八謂欲界苦十使具足集滅各七使除身見邊見戒取道諦八使除身見邊見四諦下餘皆如欲界只於每諦下除瞋使故一界各有二十八二界合爲五十六并前三十二合爲八十八使也。

【文科】別して見惑を明す一段。

【句解】身見は五蘊假和合の我身の上に常一主宰の我ありといふ考をいふ。よつて亦我見とも名く。○邊見は我身に就いておこす斷常二見のこと。斷見は我身は死なばなくなつて了ふやうに思ふと、常見は人はいつまでも人にして死するも亦來世人となるといふ考。斷常いづれかの一邊に片寄る故に邊見といふ。○見取は以上の二見は全く迷妄の見解であるにも拘らず、それを正しい見解であると執著するをいふ。○戒取は戒禁取見のことで、例せば外道の苦行を以て涅槃の正因であるといふのを妄信するが如き。其の他外道の說く非道の法を正道であると誤り執著するを戒取見といふ○邪見は因果の道理を撥無して信せぬこと。○已上利使は已上の五見を利使といふ。利とは後の鈍に對する語で、已上の五見は日常の行爲を規定する根本觀念で始終忘れずに思ひ込んで居り且つそれからいろ〳〵の行爲が導き出されるから、其勢が鋭いゆ

五鈍使

へ利といふ。使は駈役することでこの五見がわれ〳〵を駈役していろ〳〵の惡業をなさしめ三界に流轉せしむるから使といふ。○貪は上の五見に贊成する者があるといよ〳〵五見を正しいものとして愛執する心をいふ。○瞋は上の五見に反對する者があると立腹するをいふ。○癡は上の五見に沒頭して全く盲目的であるが爲に、それが生死流轉の因であることに氣が附かぬをいふ。○慢は上の五見に就いてうぬぼれすること。卽ち自分だけが知つて居ることで他は知らぬと高ぶるをいふ。○疑は上の五見に就いて確信を缺くことで、理に契はぬことはどこともなく落付かぬもので、それが狐疑心をおこさせる。○鈍使。貪等の五はすべて五見に附いておこる心で獨立したものではなく其の力も鈍いから鈍使といふ。大體貪瞋痴等の獨立した心は思惑であるが、今は五見の上に附いておこる邊だけを取つて見惑に附屬せしめたものである。混同してはならぬ。○歴三界四諦下。三界四諦は所迷の境を擧げたもので十使は能迷の惑體である卽ち見惑はたゞ十より外はないが、この惑は自分の手の屆く程のものにはすべてはたらきかける。欲界の苦諦を見ればそれにはたらきかけて惑ひ乃至三界の苦集滅道いづれのものにもはたらいてそれ〴〵の迷見を持するから。それを仔細に檢べると八十八使になる。勿論それを元へ戻せば十使の外はない。合すれば十開けば八十八である。先づ欲界についていへば左の如し。

（苦……十

欲界
- 集……七（除二身・邊・戒一）
- 滅……七（同上）
- 道……八（除二身・邊一）

欲界の果報の苦を緣じて十使を生ずることは說明するまでもない。次に欲界の集滅を緣ずる場合に身邊戒の三見ははたらかぬといふのは、身見も邊見も共に五蘊假和合の法に就いて生ずる惑であるから、たゞ生死の果報の苦に就くだけで、その他の二諦を緣ずる場合にはおこらぬ筈である。次に戒取見はもと誤れる外道の戒禁を見ておこる惑であるから、それが戒禁といふことからは涅槃の因たる道諦に就ての誤であるし、又その戒禁が身語二業の規定であるといふ點からは身語二業卽ち苦諦に對する誤れる見解となるから苦と道とを緣じておこるが、集と滅とには全く無關係であるから之を除く。尙集滅道の三諦に就いてはいづれも見込ちがひの見取見と因果撥無の邪見とがおこることは言ふまでもない。五鈍使はそれらの迷見に附庸して生ずるからいづれにも通ずること知るべし。これで欲界の四諦を緣じておこす見惑は三十二あるわけである。○次に上二界に就いての增減は別に欲界と異なることはないがたゞ瞋使だけは生せぬなせなれば上二界は禪定によつて感ずる世界であるから瞋といふやうな麤散な心は生せぬ。そこでこの一を前の四諦の一々から控除せねばならぬ。よつて色界にも無色界にも二十八使づゝ

思惑

の見惑があるわけで、三界を合して八十八使となる。

二明思惑者有八十一品謂三界分爲九地欲界合爲一地四禪四定爲八共爲九地欲界一地中有九品貪瞋癡慢言九品者上上上中上下中上中中中下下上下中下下上八地各有九品除瞋使故成八十一也。

迷事惑

【文科】別して思惑を明す一段。

【句解】思惑は迷事の惑で事相に迷ふ心をいふ。前の見惑の道理を辨へぬ迷理の惑と全く趣を異にす。又思惑は情的で見惑は知的である。○欲界合爲一地は欲界は六道に分れるが共に散地といふて散亂麁動の心のやまぬ世界なれば合して一とする。上二界は共に定地なれども四禪(色界)四定(無色界)の八地は禪定も各別、果報も亦各別なれば分けて八地とする。かく殊更に上二界を八地に分けるのは、私に考ふるに印度の俗習として冥想沈思に耽つて天界の樂に憧憬すること深ければ、この習俗を打破してそれがすべて迷であると知らしむる爲に殊更定界を八に開いて示されたものであらう。○貪は自分の氣に入つたもの(可愛の境)をどこまでも所有せんとする愛欲の心をいふ。○瞋は自分に氣に入らぬものを損ひ惱まさうとする憎惡の心をいふ。○癡は事象の眞相を見ることの出來ぬ昏い心をいふ。○慢は自分を高ぶり他を輕んずる輕はづみの心をいふ。以上の四心が思惑の體である。いづれも生れつきの煩惱であつて理窟なしにおこる衝動的な心的作用である。されば前の見惑に附屬して生ずる五鈍使とは別である。○九品は惑力の强弱麁細によつて四心の一々に九類を分けるのである。かく一つの惑を九品にも分けるのは云何といふに、思惑の性質として、積り積つた惡習であるから甚だ粘着性が强い。依て一度それは惡い心であると知れてもなか〳〵斷せられぬ。だん〳〵漸を逐ふて竹皮を剝ぐやうに斷じて行かねばならぬ。それに比して見惑は道理がわからぬのであるから、理を盡して悟しそれが誤りだと知ればどんな强い惑でも一時に斷ぜられて了ふ。そこで思惑だけを九品に分けるのである。○除瞋使の三字は分註にすべし。上二界に瞋使を除くこと前の見惑に例して知るべし。

上來見思不同總是藏教實有集諦

【文科】集諦の所明を總結する語。

【句解】實有は前の苦諦に例して知るべし。卽ち煩惱はおこるべき因緣がありて生じ、その煩惱はそれ〴〵の果報を生ずべきものであつて、煩惱は夢のやうな事實ではなく、因緣によつて生滅する客觀的な事象であるから實有集諦といふ。これは藏教の所談に限つたことである。

(c) 滅　諦

三滅諦者滅前苦集顯偏眞理因滅會眞滅非眞諦。

【文科】第三滅諦を明す一段。

【句解】滅諦の滅は涅槃の譯名で、三界の惑業を斷じ盡し且つ肉身も亡びて了ひ、全く生死の煩累を滅無した所を滅卽涅槃といふ。惑業だけ滅盡した所を有餘涅槃といひ、肉身まで灰身滅智した所を無餘涅槃といふ。諦はそれが眞理であると顯す語。○偏眞理は何物にも累はされぬ空寂の眞理をいふ。偏とは大乘から小乘の空理を貶しめて言ふ語で、中道の非有非空にて片寄らぬ不偏に對して空を偏といふ。この空理は本來法爾として三界に偏在する眞理である。然るにこれを知らざる惑が妄動して六道生死の果報を生じ爲に自然法爾の空理を覆ひ隱した。今やそれらの苦と集とを滅無して本來法爾の眞理を顯すが涅槃の滅である。○因滅會眞。滅は眞理のまゝに歸した所であるが、分けて言へば滅は苦集を滅無した能入の智惠で、眞は所入の理體である。能入の智慧は修行の力で研き上げたものであるから人の造作に關するもので、眞は法性そのものであるから本來法爾の人の造作に關せざるものである。よつて滅は有爲無常（道諦の原因によつて得た結果が滅であるから）にして眞は無爲常住のものといふべし。卽ち理智冥合の極致はこれが眞理であると認識する智慧まで棄てはてゝ法性自然の眞理だけになり切つた所である。併しその眞理の法は法だけでは衆生のものとならぬ。衆生は滅の智慧によつて眞理に歸入することが出來る。それを今因滅歸眞といひ又滅非眞諦と滅諦と眞諦とを別なものであるといつたものである。尤も俱舍論や婆沙論では滅諦の外に所入の理を見ないから、滅がそのまゝ無爲常住のものであるといふのである。今の所談と一致せぬが、今は成實論及び涅槃經の四種四諦の說によつて四諦共に生滅のものであるとしたものである。○滅非眞諦の句で滅諦も亦生滅のものであるといふことを裏に示したものである。次の道諦の結語に「藏敎生滅道諦」の句に準じていへば、こゝに「藏敎生滅滅諦」といふ句があるべきであるが、それをこの句に言はせたものである。苦集と入れかはりに生ずる滅は道諦の因によつて造作せられたものであるから生滅無常のものである。

(d) 道　諦

四道諦者。略則戒定惠廣則三十七道品。此三十七合爲七科。一四念處。一觀身不淨（色蘊）二觀受是苦（受蘊）三觀心無常（識蘊）四觀法無我（想行蘊）一四正勤。一未生惡令不生二已生惡令滅三未生善令生四已生善令增長三四如意足（欲・念・進・惠）四五根（信・進・念・定・惠）五五

力（同上根ニ名）六七（ニハ）覺支（念・擇・進・喜・輕安・定・捨）七八（ニハ）正道（正見・正思惟・正語・正業・正精進・正定・正念・正命）

【文科】第四滅諦を明す一段。

【句解】道諦の道は能通で。戒定慧の修行は涅槃に通ずる道なれば道諦といふ。○戒定慧の三學が道諦の全體である。戒は戒律を持つて起居動作を如法にする。定は散亂の念を攝めること。惠は眞理に契ふ正しい見解をもつこと。○道品の品は品類で道の部類に屬するものといふ意で道品といふ。○一四念處の念處とは智惠（念）を生ずる場處で。智慧は不淨苦無常無我なり身受心法はそれを生ずる場處である。四念處觀は先づ自己の身心を內觀して正しい智慧を持つのである。自己の身心は五蘊假和合の法なれど、外道凡夫の四顚倒の妄見（從來もつて居つた智慧）を退治する爲に四に攝めて觀ずるのである。

五蘊
- 色 — 身 — 不淨 — 淨
- 受 — 受 — 苦 — 樂
- 想 ／ 行 ＼ 識
- 心 — 無常 — 常
- 法 — 無我 — 我

四顚倒妄見

○觀身不淨はこの肉體は上は頭より下は足に至るまで汚物の集團であると觀ずること。○觀受是苦は受は苦なりと觀ずること。受は外界の刺激を受け入れることで最も原始的な精神作用である。既に他動的にもせよ外界と接觸することは內心に苦痛を負はしむるものである。なせればその外物に好いとか惡いとかの判斷をすぐせずには居れぬ。判斷すれば好いものは欲しい

し惡いものはいやであるしいづれにしても苦しまねばならぬ。依て受は苦なりと觀ずる。○心無常は心はいつも變らずに個性を持續するやうに思へども實は念々に生滅して暫くも止るものではない。○法無我の法は想行二蘊のことで、想行は前の受で受け入れた刺激を分別判斷する作用が想で、更にその判斷に應じて能動的に我物にしやうとか若くは排除しやうとかとはたらきかける精神作用が行である。これらの精神作用は既に我の觀念を構成して他と對立して居るが、その我は心的作用から作り出した幻影に過ぎないものであると觀ずるが法無我觀である。かく自己の身心を觀じてその眞相を知るのが四念處觀である。これは佛道最初の修行であると共に最後の智慧である。これだけの智慧が滿足に得られたらばそれが羅漢果である。以下の道品もこの智慧を滿足せしむる爲にいろ〳〵の手段を講ずるに過ぎぬ。○二四正勤は七科中の第二。正勤とは勇猛精進に道を勵むこと。卽ち四念處觀を修するに懈怠せずに力を入れて勤め勵むことを正勤といふ。正は外道の苦行を勵む邪勤に簡ぶ。○未生惡等の惡は四顚倒の妄見に順ずるものをいふ。善は四念處の正見に順ずるものをいふ。○三四如意足は七科中の第三。如意足とは意の如くに滿足するといふと。こゝに來て思ふやうに四念處の正見を研くことが出來るから如意足といふ。なぜこゝで思ふやうになるかといふに、前の四正勤では四念處を勵むことであるから念處の智慧の炬に油を注いたばかりてある。いかに勵んでも忘念の風に曝して置い

ては智慧の炬は明るくならぬ。この四如意足は妄念を靜める定であるから、この定の提灯の中へ慧炬を入れたのであるから、定慧が均等になつて思ふまゝに正しい智見の炬が明るくなる。といふので四如意足といふ。○欲念進慧。欲はかくしたいと心に希求すること。四念處觀を成就したいと心に希求するをいふ。念は明に心に記して忘れず一心に專注すること。進は脇目ふらずに突進して間雜なきこと。慧は思惟分別して心を散さぬこと。以上四如意足は散動の心を止めて一心に四念處を專注するのであるから定である。尤も入定したといふのではなく、心を一に專注しやうとするのであるから『止觀輔行』七之一[三四]には入定の方便といつて居る。○四五根は七科中の第四。根は能生の義で正しい無漏智が生ずる根本といふことで根といふ。こゝまで來てやがて正しい智見を持ち得るといふ自信が出來たのである。○信進念定慧。信はこれが眞理であると明に信ぜられるやうになつた。進は信に勵まされていよ〳〵精進努力する。念は更にふり返つて心に銘記する。定はその心に銘記した智慧に向ひ一心不亂に專注する。慧は心が一つになればいよ〳〵智慧が明になる。○五五力は七科中の第五。力は前の根が增長して自信が强くなつて障があればそれを排除するだけの力が出來たところを五力といふ。○六七覺支は七科中の第六。七覺支は七菩提分ともいひ菩提と覺は梵漢の相異、支と分とは同義にて七の分れの一といふことを顯す語である。覺とは覺察覺了の義で見分けをすること。心の浮沈の見分

けをしてこの七法を以て心を調へて行く故に七覺支といふ。

七覺支
- 念（心の浮沈に處する法即後の六法を覺知して居ること）——通二定慧一
- 擇（簡擇にて能く分別すること）
- 進（精進にて勵み努めること）——慧（治二心沈重一）
- 喜（意に稱ふて喜ぶこと）
- 輕安（身心がかる〳〵と快きこと）
- 定（一心不亂なること）——定（治二心浮動一）
- 捨（心の浮沈を離れて平正なること）

○七八正道は七科中の第七。正道は一に聖道とも書き、いよ〳〵無漏智がおこるやうになつたゆへ中正にして理に契ひ涅槃に至る道なれば正道といふ。○正見は四諦の眞理を見つけたこと。○正思惟は見つけた眞理を更に思惟すること。○正語は不實の語を離れること。○正業は身の過非（殺生・偷盜・婬）を離れて正しく身を處すること。○正精進はいよ〳〵修道を勵むこと。○正定は身心を寂靜に保ち亂想を離れること。○正念は正法を心に銘して忘れぬこと。○正命は三業の過非を離れ五邪命を離れて如法の生活をなすこと。五邪命のこと大論十九[二十四丈]に出で一爲二利養一故現二奇特相一、二爲二利養一故自說二功德一、三下二相吉凶一爲人說法。四高聲現威令二人畏

敬。五說二所得供養一以動二人心一これで。佛弟子たるもの愼むべきである。

已上七科卽是藏教生滅道諦。

【文科】道諦の所明を總結する語。

【句解】生滅道諦。道品は煩惱を對治して生ずるものである。やはり人の造作によつて出來たもので生滅遷流するから生滅道諦といふ。

(e) 四諦餘說

廣狹と勝劣

然如前所列四諦名數通下三教。但是隨教廣狹勝劣生滅無生無量無作不同耳故向下名數更不再列。

【文科】前來四諦を解說し終つたから。これより以下は四諦に關しての餘說二項を叙べるが。今は四種四諦を明す一節である。

【句解】四諦名數は苦集滅道の名目と四といふ數目とをいふ。卽ち四諦の法相は大小乘に共通でかはらぬが、但し苦なり集なりの四諦の意義の考へ方は別である所に大小の別がある。○下三教は通別圓。○教廣狹とは。藏通二教はたゞ三界六道だけのことを言ふから狹、別圓二教は界外の淨土を立て廣く十界を談ずるから廣といふ。○勝劣は、事理相卽を說く教を勝といひ事理不相卽と明す教を劣といふ。同じく空理を說くにも超越的原理とする藏教は、現象の迷悟の事象の外に空理を說くから事と理とは別なもので相卽せず。事を滅無せねば理はあらはれぬ然るに通教は空理を內在的原理とするから、色卽是空空卽是色と說いて現象の事相そのまゝを本體原理のあらはれとする。よつて事理相卽である。たゞ迷はその色卽是空の相卽の世界を知らず勝手な妄想分別に耽るより生ずるもの。その迷夢を破つて諸法如實の相に達すべきである。よつて通教は空理を談じながら勝といはるゝ。次に別圓二教の相卽不相卽は藏通二教の關係と全く同じである。中道眞如を超越的原理とする別教は萬法は眞如に依止し若くは眞如から緣起したものであると說けども萬法の波がすぐ眞如の水であるとは說かぬ。たゞ萬法の事象萬法の波が納つた所に初めて眞如の理が顯現すると說くから萬法卽眞如・事卽理ではない。よつて別教を圓教に望めて劣といふ。圓教は萬法の波がそのまゝ眞如の水であつて、波のまゝが水である如くに萬法の差別相のまゝが眞如の體の全現である。若し萬法を棄てたならばどこにも眞如は捕捉されぬ。萬法卽眞如眞如卽萬法で事理相卽と說くが圓教である。たゞさういふ萬法卽眞如の不可思議の世界に在りながら無明の夢を貪つて妄想分別ばかりして居るから迷を離れることが出來ぬ。よつてその夢を破つて諸法の實相卽事理相卽の不可思議境を徹見せねばならぬといふが圓教である。○生滅無生無量無作は所謂四種四諦で源涅槃經聖行品に出づる所である。次での如く藏通別圓の四教のことになる。

四種四諦

生滅無生

無量

- 界内——狹
  - 劣——事理不卽……藏——生滅四諦
  - 勝——事理相卽……通——無生四諦
- 界外——廣
  - 劣——事理不卽……別——無量四諦
  - 勝——事理相卽……圓——無作四諦

生滅四諦のことは前に屢々出づる如し。○無生は無生無滅の略。藏敎では迷悟因果の事象は因緣によつて生滅するもので凡夫外道の執ずる所の實我實法はあるものでない。實我實法ありと思ふは單に主觀の妄分別であるが、因緣生滅の法には客觀的確實性を許すから生滅四諦といふのである。通敎ではその因緣生滅の迷悟因果(四諦)の事象はわれらの主觀の妄想に外ならぬ。いはゞ夢中の境であつて何等客觀的確實性のあるものでない。因緣法の當體が空である。然らば藏敎にて談ずるやうな實に因緣生滅は無いのである。それを無生無滅といふ。併しそれは無宇宙論ではない。科學的な經驗の世界を妄想の所產として空無したのであるが、それによつてさういふ生滅變異のない形而上の觀念の世界の實在を主張せんとするものである。そこが空卽是色の世界である生死卽涅槃の矛盾を調和せる世界である。よつて無生無滅の言にはかうした意味の事理相卽の世界を反顯して居るのである。それは無生の生・無滅の滅の不可思議の世界である。○無量は別敎の四諦觀を顯す語。別敎では眞如の一理が無明の緣に隨つて無量の差別相を

無作

變作したのが卽われ〳〵の前に展開されつゝある萬法の實相である。生死の苦果にも九法界の別があつて無量の苦相があり煩惱も亦無數であつて集諦無量である。道品にも亦十波羅密の別があつて無量なれば涅槃も亦萬德を具足する。かく迷悟因果は無量無數の別があるが、而もそれは眞如隨緣の一絲亂れざる緣起の世界である。更に亦その眞如は遠きにあるのではなく近くこの內心に求むべきである。無量の法界は要するに唯心變作のものに外ならぬ。何といふ不可思議な心であり亦世界であるといふ驚嘆より出發して、この無量相の緣起の世界の探求によつて轉迷開悟せんとするのが別敎である。よつて無量四諦を別敎の標語とする。○無作は圓敎四諦觀を示す語。圓敎は亦萬法を眞如隨緣の世界なりと言ふも、別敎と異なり眞如と無明とが相寄りて緣起の世界が成立したものであるとを許さない。萬法は眞如それ自らが開展した世界であつて、眞如と對立した何者の存在をも許さぬ。眞如は本來法爾としてそれ自らの差別相を開展變作したものが萬法である。然れば萬法の差別相は眞如それ自らの創造の世界であるから亦絕對的存在であつて相對的暫有的のものではない。迷悟十界の千波萬波は久遠より永劫まで易ることなく常住に打寄せる。そしてそこに眞如平等の音を開顯して止まない。それが諸法の實相である。しかしかうした萬法卽眞如の不可思議の境は唯佛與佛の境であつて凡小の計量の及ぶところでない。凡小はこれが眞理かあれが佛かと揣摩臆測を逞うし、その臆測に立つてたと

四諦の排列の意義

へ萬善諸行を勵むともそれは畢竟するに凡小の計量の所作であるから、その凡小の所作の鍵によつては不可思議境の門は開かれぬ。これこの凡小の所作は要するに眞如に達せざる無明の所産に外ならぬ。その無明の夢が覺めた所に初めて不可思議境が開顯される。それは凡小の所作を離れたいはゞ無作の境である。よつて圓教の四諦を無作といふ標語で顯すのである。無作といふ語は凡小人の所作をすてはてたことを意味するのであるが、それによつて法そのものゝ偉大なる所作創造が人の上に與へられて人が大なる所作を所有し得ることを反顯するものである。○向下名數更再不列とは。下三教を明す下にはもう四諦のことを再び言はないと斷つたのである。

然四諦之中分世出世前二諦爲世間因果（苦果集因）後二諦爲出世間因果（滅果道因）問何故世出世前果後因耶。答聲聞根鈍知苦斷集慕果修因是故然也。

【文科】四諦因果を明す一節。

【句解】然四諦之中等は解し易し。○問何故等。世間の因果を明すにも苦の果を前にし出世間も亦滅の果を前にするは何故かと問ふ。○答聲聞等。聲聞は其の日の生活に急迫して內省自觀の餘裕のない鈍根である。これに對して彼等の焦眉の問題となつて居る現實の世相を先づ究明して苦であると敎へらるゝ處に聲聞は救を感ずるのである。彼の現實の生活の上に地獄道の影のまつばつて居る者はどうしても極樂を與へられずば滿足が出來ぬやうに、生死の苦に逼迫されて居る聲聞がそれを確に苦であると究明して貰つた處に救濟を感ずる。併しそれだけならば一時の氣休めに過ぎぬ。そこに涅槃（滅）の理想が開顯される所に聲聞は滿足の救を感ずるのであつて、その感激が慘憺たる集を對治して道に就く行業もこれらの鈍根の機に受け入れしめる。四諦の排列順序にかうした深い宗敎的意義を含蓄して居ることは寧ろ驚くべき事實である。知苦斷集慕果修因の意深く味ふべし。

苦集（果因）―世間
滅道（因）―出世間

(3) 藏敎の行位

略明藏敎修行人之與位。

【文科】以上に四諦敎を明して藏敎の敎義の骨子を叙べ終つたから、これからは藏敎の行位を明す。今はそれを總標す。

【句解】人之與位とは人は三乘・位はそれ〴〵の行位である。此下行位を明すが主であり、所被の機の三人の名は前に列ねてあるから、今は人と位といはずたゞ位だけでよきやうなるが云何といふに、これは位だけでは緣覺に通せぬ。緣覺は別に行位といふ程のものはないから、斯

書の縁覺の下でもそれをいふて居らぬ。よつて次の縁覺を標するにも「次明縁覺」といつて縁覺位とはない。それに反して聲聞と菩薩の下の總標語には聲聞位菩薩位とある。よつて今人と位と語を重ねて言ふたものである。

(a) 聲聞の行位

初明聲聞位分二初凡二聖凡又二外凡内凡釋外凡中自分三。初五停心一多貪衆生不淨觀二多瞋衆生慈悲觀三多散衆生數息觀四愚癡衆生因緣觀五多障衆生念佛觀。二別相念處。如前四念處是三總相念處一觀身不淨受心法皆不淨乃至觀法無我身受心亦無我中間例知。已上三科名外凡亦名資糧位二明内凡者有四謂頂忍世第一。此四位爲内凡亦名加行位又名四善根位上來内凡外凡總名凡位亦名七方便位。

【文科】以下聲聞の行位を明す。其中凡位聖位の二に分るゝが。今は初に凡位を明す一段。

【句解】初凡二聖。四諦の理を見付けてから後が聖位。未だそれを見付けない間を凡位とす預流果以上の四果は聖位それ以前は凡位。○外凡内凡。外凡は眞理の影も見えない。たゞそれを見付けるまでの準備をする間。内凡はボンヤリながら眞理はこんなものであるといふ見當がついた位をいふ。○五停心觀は荒んだ心を調へる行法である。譬へば地面に種を蒔かうとしたならば種下しをする前に地均しをせねばならぬ如く、荒んだ心の地均をするが五停心觀である停はやめることで、心は貪・瞋・痴・散亂等の荒んだ心をいふ。これをやめる觀といふこと。○一多貪衆生等は、第一の不淨觀は貪愛の心を退治する爲である。不淨觀にも種々あるが例せば九想觀の如きものである。九想觀は人間の屍骸が漸次腐つて行く相を觀ずること。一脹脹(すぶくれる)二青瘀(ふくれた上に腐つて青みを持つて來る)三壞(所々がやぶれはちける)四血塗漫(はちけた所から血がしつて肉がゐみ出す)五膿爛(うみが流れ出て全身がたゞれてくる)六噉(鳥獸が來てつゝいて喰ふ)七散(四肢を初めすべてがばら〳〵になる)八白骨(殘るものは白骨だけである)九燒(白骨すらも燒いて了ふ)の九相である。尤もこれは實物を見るのではなく、假に心に思ひ浮べて人間の運命を觀ずるのである。かくて貪愛の心を退治する。○二多瞋衆生等。第二の慈悲觀は瞋恚の心を治する爲に用ゆる觀。今『輔行』九之三(十五左)に婆沙論に依つて明す慈悲觀の一端を叙べやう。先づ心に親中怨の人々を順次に思ひ出して、それに三禪樂(第三禪天相應の樂)四事(飲食・衣服・車乘・臥具)經行處所有樂(散歩した際に見聞したところの樂)のいづれか一つを怨親の別なしに平等に施して相手方の喜ぶ姿を心に思ひ浮べる。その親中怨は詳しくいへば七等に分れ上親(父母兄弟師長)中親(姉妹)下親(朋友知識)中人(非親非怨)下怨(害下親者)中怨(害中親者)上怨(害上親者)是れである。これも勿論布施物も相

九想觀

慈悲觀

手方もたゞ假に心に思ひ浮べるだけであるが、かういふ觀法の結果自ら愛憎の小さい念がなくなり、腹を立て怨恨することから離れられるのである。○三多散衆生等。第三數息觀は散亂心を治する法。これは今日の靜坐法の如きもので出入の息を調へて心の浮動を靜めるのである。

數息觀

○四愚癡衆生等。第四因緣觀は愚癡を治する法。愚痴は思慮分別の乏しいことで、性來の愚鈍のものは勿論邪法を信じて邪な思慮分別があるものでも、それはやはり思慮分別の乏しいのであるから愚痴の衆生である。因緣觀は十二因緣を觀せしむるのである。十二因緣のことは後に出づるがわれら衆生の生死輪廻の因緣道理を明したもの、この道理を心に思ひ浮べて、邪な思慮分別を排け正しい智慧を植え付ける。

因緣觀

○多障衆生等。第五念佛觀は障を除く法。障は坐禪中に生ずるものをいふ。前の觀法を修して居る中にいろ〳〵の障が生じて修觀を碍げる。その障に三ありて、一昏沈暗塞障。これは心が昏くなり意識が不明瞭になつて來ること。二惡念思惟障。坐禪をやつて居る裡に五逆十惡等の惡事を企らみそれのみに心をとられるやうになる。三境界逼迫障。これも坐禪をして居る中に忽ちにして身體が痛み出したり、水に溺れ火に焚かれるやうな急迫を感ずることがおこる。これらの障の生じた場合には佛の相好を念じ佛の神力を念じ或は佛の證德を念ずればその障が消散する。以上五停心觀は要するに佛道修行の準備として荒んだ心の地均しをする法である。

念佛觀

○二別相念處。これは四念處觀を修すること。既に心の地均しが出來上つたから種蒔をやるのである。四念處觀はたゞ手近な欲界の苦諦（五蘊假和合）だけを觀ずるのであるから、手始にこの觀を用ゐるのである。別相は總相に對する語で各別に不淨苦無常無我等の行相を心の上に浮べて身受心法の境を觀念するをいふ。○總相念處は境觀共に共通せしめて自由自在に觀ずる法で、『四念處』一末に四句分別を以て次のやうに明してある。

- 別相念處
  - 1、境別觀別
- 總相方便
  - 2、境別觀總（例せば身は不淨苦無常無我なりと觀ずるをいふ）
  - 3、境總觀別（例せば身受心法は不淨なりと觀ずるを云ふ）
- 總相念處
  - 4、境觀俱總（身受心法は不淨苦無常無我なりと觀ずるをいふ）

但し此書には唯境惣觀別だけを擧げて餘は略す。○中間例知。境惣觀別に四ある中だゞ不淨と無我との句だけを擧げたから中間の苦無常の二句は例知せよといふなり。○資糧位とは後の加行位と對（つい）の語で、譬喩に寄せていふ。旅立するには先づ糧食の用意をせねばならぬ。それが出來てから歩き出す。佛道の旅もその如くであるといふので、糧を仕入れる資糧位と歩き出した加行位とを立てるのである。此名目はもと唯識宗のものであるが、それを借り來つて聲聞の內凡外凡に配したもの。卽ち總相念處までは一分の敎理（四念處）は手に入つてもまだ皆目見當も

つかず一歩も前へ出て居らぬから外凡といひ又資糧位といふ。○煖はあたゝまりのこと。これは譬喩で燧を鑽るに火の出る前に先づ煙が出てあたゝまりが出來るが煖である。今は四諦の理を觀ずるに無漏智の火の出るに先ちて相似の解を生じて煩惱も亦伏せらるゝ。前の皆目自信のなかつた外凡位とは樣子が違つて來た處を煖位といふ。こゝからは上二界(色無色)の四諦の理と欲界の四諦の理とをすべて觀ずるのである。○頂は亦譬についた名で、四諦の理を照す智惠がだん〳〵明になり恰かも山頂に登つて四方を見亘すやうになつた處といふので頂位といふ。○忍は忍可忍許の義、これに相違はないとわが心の內に確たる自信の出來たことで、いよ〳〵智惠が確かになつて來た處を云ふ。○世第一は世間中最第一のこと。卽ち煩惱を斷じない有漏世間の中ではこの位が最上無上である。もう一息すれば惑を斷じ理を見て聖者の仲間に轉入して了ふ。○四善根位。善根は善の根本で善は無漏智をさす。煖等の四位は親しく理を見付けて無漏智の生ずる爲の根本となるから四善根位といふ。○加行位は前に釋する如し。相似の智慧なれども一歩を佛道へのり出したのであるから四善根位を加行位といふ。○方便位。方便は手段方法の意で、この七賢位は無漏智を得て空理を見る爲にあらゆる手段方法を盡す位故に方便位と名く。

次明聖位亦分三。一見道(初果)二修道(二三果)三無學道(四果)一須陀洹

此翻預流。此位斷三界八十八使見惑見眞諦故名爲見道。又名聖位。二斯陀含此云一來。此位斷欲界九品思中斷前六品盡後三品猶在故更一來。三阿那含此云不來。此位斷欲殘思盡進斷上八地思。四阿羅漢此云無學。又云無生。又云殺賊。又云應供。此位斷見思俱盡子縛已斷果縛猶在名有餘涅槃。若灰身滅智名無餘涅槃。又名孤調解脫。

【今科】次に聖位を明す一段。

【句解】預流とは聖者の中間(流類)に預り入るといふ意。見道とは初果は未だ曾て見ない四諦の理を初めて見る位ゆへ見といふ。道は涅槃に通ずる道路の義。○修道は二三果をいふ。二三果は前に見た四諦の理を重ねて照しそれによつて思惑を斷ずる位である。一度見た眞理をそのまゝに置かずそれを重ねて觀見する所を修といふ。○無學道は第四果。第四果は學ぶべき何物もなくなつた位ゆへ無學といふ。學は修學の義で前の修道に於いて眞理を研き惑を斷ずるを學といふ。今はもはや研くべき眞理もなく斷ずべき惑もなくなつて眞理を窮め盡したから無學といふ。○眞諦は空理のこと。四諦は迷悟の事象であるがその原理として一貫したものは法性

の空理である。その空理を見得ざるが見惑である。依て見惑を斷じて空理を見る。これが初果である。尙殘るものは思惑でそれを斷盡するが二三果である。○一來は一往來の略で、天上と人間に一往來して後涅槃を得る聖者をいふ。卽ち人界でこの果を得れば一度天上に生れ更に人界に生を得て涅槃を得る。若し天上でこの果を得れば人界に往き後天上に歸つてそこで涅槃を得る。つまりモウ一遍だけ欲界の生を受けて來るのである。○欲界九品思。思惑に九品を分つことは前に辨ずる如し。この欲界の九品思惑は全體で七生（一生は一往來）だけの潤生（未來の果を受けること）の力がある。卽ち左の如し。

圖の如く上上品は二生を招く勢力があつて最も強く下三品は最も弱く三品にて一生を潤すだけの力よりない。よつて一來果ではその中前六品だけ斷ずるから、殘るはたゞ下三品だけなればたゞ一生だけの果を引くことになるから一來果といふ。○不來は亦不還ともいふ。再び欲界へは還り來らぬ聖者故に不來果といふ。○進斷上八地思は更に進んで上界の八地の思惑すべてゞ七十二品の思惑を斷ずる。これは第四果に向ふのであるから四果向とも言ふが今は勝進阿那含といふて阿那含の進み行くものとして第三果に收める。この勝進阿那含に對して欲界下三品思惑を斷じた所を住果阿那含といふ。○無學は譯語ではない後人の通稱。○無生も殺賊も應供も阿羅漢の義譯である。多含にて正譯はない。無生とはもはや三界の生を受くることはないといふ意。殺賊は見思二惑の賊を悉く斷じたこと。應供は人天の供養に應ずる德あるものゝ謂である。○子縛果縛。子縛は煩惱のこと、煩惱は生死の苦果を生ずる種子なれば子といひこれによつて三界に縛りつけらるゝものであるから縛といふ。果縛は肉身のこと。肉身は前世の業因によつて感じた果報であるから果縛といふ。○有餘涅槃は煩惱は斷じても尙ほ肉身が殘つて居るから有餘といふ肉身の滅する所を無餘涅槃といふ。○灰身滅智は肉體も精神も共に滅して迷の影のないことをいふ　○孤調解脫は自己一人だけのさとりといふこと。孤調は獨りだけこしらへて他はかまはぬこと。解脫は三界の繫縛を解きて自由になること。勿論孤調解脫といふ名は大乘から言ふ語である。

略明聲聞位竟

【文科】聲聞の行位を結ぶ語。

(b) 緣覺と獨覺

次明緣覺亦名獨覺

【文科】前來聲聞の行位を明し了り、これより以下は緣覺と獨覺のことを明す一項。今はたゞそれを標する語。

緣覺獨覺の同異

【句解】次明緣覺等。この下は順序として緣覺の行位を明すべきなれど緣覺は聲聞の如く複雜な位地なければ別に叙ぶるまでもない。それ故に明緣覺位とは言はずたゞ明緣覺と標して前の教義を明す下で聲聞の四諦教の次に明すべくして明さなかつた十二因緣教のことを叙べて、緣覺はいかなるものかを示す。○亦名獨覺とは獨覺を緣覺の異名とす。所が次下の所明では緣覺は佛の教法を禀けてそれによつて開悟するもの、獨覺は無佛の世に出でゝ外因緣によつて無師獨悟するものと別なものとしてある。これは云何といふに、緣覺と獨覺との同異を考へやう先づ梵語に就いて見るに、舊譯では辟支迦羅若くは辟支佛の語で梵音を寫し、これを譯して緣覺といひ亦獨覺と名くるとして同體異名とする。然るに『華嚴音義』には畢勒支底迦(佛)の梵語は獨覺と譯し鉢羅底迦(佛)の梵語は緣覺と譯するとありて、梵語に於いて二語ありとする。然るに梵語學者に聞くにこれ必ずしも二語にあらず共に Pratyēka Buddha にしてプラチェカの語に獨の義も緣の義もありといへば、梵語に於いては獨覺と緣覺と同體異名である。この故に諸經論中獨覺佛世に出づるといひ若くは無佛世に出づるものに緣覺といへるとまゝある。然るに機類の實體に就いて考ふるに、佛教によつて覺るものと、飛花落葉を觀じて無師獨悟するものとの二類あり、共に内省自觀によつて開悟する。そこで漢譯佛典には前者の場合には緣覺の語にて顯し後者の場合には獨覺の語にて顯して區別したものであらう。併しこれは便宜上の區別

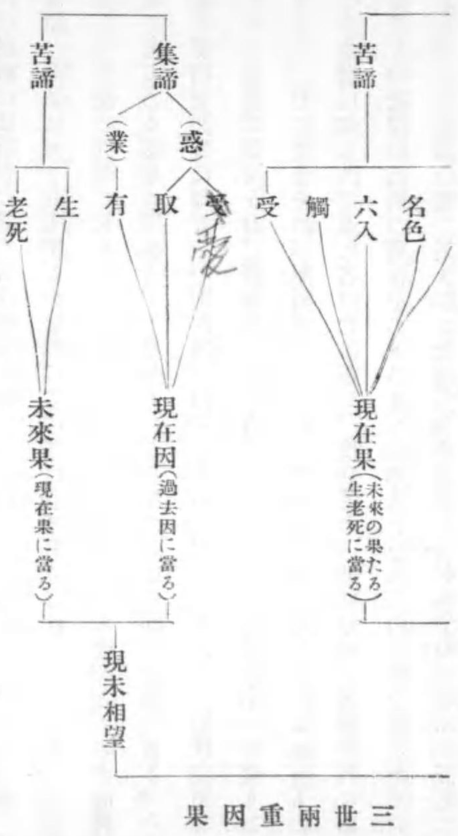
であるから一概に論すべきではない。佛世に値ふものにも内觀を主とする機類なれば獨り靜に三昧に努むるが故に各々獨行の義ありて獨覺ともいふべく。無師獨悟の機類も飛花落葉の外因緣によつて覺るものなれば亦緣覺と呼ばるゝ義あれば、名によつて局執すべきではない。然れば斯書亦標語には緣覺卽獨覺の邊にて「緣覺亦名獨覺」といひ。次の釋文には緣覺獨覺二類の邊にて區別して說いてある。

値佛出世稟十二因緣教所謂一無明(煩惱障煩惱道)二行(業障・業道此二支屬過去)三識(託胎一分氣息)四名色(名是心色是質)五六入(六根成此胎中)六觸(出胎)七受(領納前境好惡等事從識至受名現在五果)八愛(愛色男女金銀錢物等事)九取(凡見一切境皆生取著心此二見未來因皆屬煩惱如過去無明)十有(業已成就是未來因屬業道如過去行)十一生(未來受生)十二老死此是所滅之境。

【文科】十二因緣教を明す。

【句解】無明は煩惱の通稱。見思二惑は其の根本は眞理を見る明なきより生ずるものなれば無明といふ。○煩惱障煩惱道は煩惱は眞理を覆ひ隱すもの故に障といひ、煩惱は業を作り苦果を生ずるもので業苦へ通ずる道筋といふ邊から道といふ。○行は行爲所作の義。善惡二業の通稱。○二支屬過去は二支は無明と行のこと。これは過去世に就いていふものである。○識はた、

いましいのこと。母胎に心識の托せし最初の端的をいふ。一分氣息とは壽命の一分をいふ。息をするのは壽命のあるしるしであるから壽命を氣息といふ。托胎の心識は壽命のあるものといふことで亦一分氣息といふ。○名色は肉體の出來かゝつた所をいふ。名は心・色は物質肉體である。前の識は心とも色ともつかぬものであつたものが、母胎で發達して肉のかたまりとなつた所。○六入は六根のことで肉體が完備した所。○觸は乳兒が生れて外界に觸れて外界を覺知するに至つた所。○受は外界の刺激を受け納れて、苦樂の感情を持つやうになつた所。○愛は愛憎の念を生ずること。外物に對して能動的な感情のはたらくこと。愛色は一般的に物を愛することをいふ例を擧げて男女金錢等といふ。○取は執着心卽我物にせんとする所有欲。○有は業のこと、業は未來の苦果を保有するものなれば有といふ。○未來受生とはこの生老死は來世の苦果のことをいふものだと示すのである。以上十二因緣は生死輪廻の極りなき相をいへるもので、三世にわたつて惑業苦が互に因果關係をなして連鎖するのである。今この要旨を圖示するに左の如し。



○此是所滅之境とは。十二因緣は要するに世間の因果たる苦集二諦の境にしてやがて斷ぜらるべき惑業と滅せらるべき苦果なれば所滅之境といふ。

與前四諦開合之異耳。云何開合。謂無明行愛取有此之五支合爲集諦餘七支爲苦諦也。既名異義同何故重說。爲機宜不同故。緣覺之人先觀集諦所謂無明緣行行緣識乃至生緣老